



OYASHIKI-SITE

# 小屋敷遺跡

県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財発掘調査

1997

長坂町教育委員会

峡北土地改良事務所

山梨県長坂町

---

# 小屋敷遺跡

---

県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財発掘調査

1997. 3

長坂町教育委員会

峡北土地改良事務所

# 序

雄大な八ヶ岳南麓は、縄文時代から中近世にいたるまでの遺跡の密集地帯として知られています。この麓のほぼ中央に位置する長坂町では、水田農業の近代化を目的として、町内ほぼ全域を対象に圃場整備事業を推し進めています。

今日、圃場整備事業はほぼ完了しつつありますが、町内ではこれに伴い数多くの遺跡が発掘調査され記録として保存されました。

本報告書も1991年度の山梨県営圃場整備事業にともない発掘調査された小屋敷遺跡の概要を記したもので、縄文時代から中世にかけての様々な資料が出土し、地域の歴史教育教材の一つとなったことはもちろん、縄文中期の学術的に貴重な土器が多数確認されました。本報告書がひろく教育や研究の場に活用されることを望みます。

地域住民の皆様の多大なご理解のもとに発掘調査が完了したことを深く感謝するとともに、調査へのご指導、ご協力をいただいた関係機関に御礼申し上げます。

平成9年3月

長坂町教育委員会

教育長 小松 清 寿



# 例 言

- 1 本書は山梨県北巨摩郡長坂町大八田字小屋敷 他に所在する小屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は山梨県営圃場整備事業にともない、山梨県峡北土地改良事務所からの委託を受け長坂町教育委員会が実施した。
- 3 本書の編集は小宮山隆（町教育委員会埋蔵文化財担当）が行った。
- 4 遺物実測・図面作成・トレース・図面整理・表作成等に関わる業務については吉田光雄（調査補助員）、石川昭江、井出仁美、長田加代子、清水純代、橋本はるみ、日向登茂子、深沢憲子（整理作業員）が行った。なお、出土石器の資料化と報告は村松佳幸（山梨県埋蔵文化財センター）が行った。
- 5 出土品及び図面・写真は長坂町教育委員会が保管している。

# 小屋敷遺跡

## Contents

もくじ

### 本文

---

序	
例言	
第1章 調査の経過と概要	9
1 調査の経過	9
2 遺跡の概要	9
3 調査組織	10
第2章 遺跡をとりまく環境	11
1 自然環境	11
2 長坂町内の遺跡分布	11
第3章 発見された遺構と遺物	15
1 A区の調査	15
2 B区の調査	15
3 C区の調査	23
4 D区の調査	59
第4章 調査のまとめ	60
1 C区東地区出土の縄文時代中期終末土器について	60
2 おわりに	62

## 挿図

第1図	長坂町の遺跡分布図	12	第27図	C区東出土土器2	35
第2図	小屋敷遺跡の位置	14	第28図	C区東出土土器3	36
第3図	A区全体図	16	第29図	C区東出土土器4	37
第4図	B区北全体図	17	第30図	C区東出土土器5	38
第5図	B区南全体図	18	第31図	C区東出土土器6	39
第6図	B区南1号住居	18	第32図	C区東出土土器7	40
第7図	B区南2号住居	19	第33図	C区東出土土器8	41
第8図	B区南3号住居	19	第34図	C区東出土土器9	42
第9図	B区南4号住居	19	第35図	C区東出土土器10	43
第10図	B区南5号住居	19	第36図	C区東出土土器11	44
第11図	B区南6号住居	20	第37図	C区東出土土器12	45
第12図	B区南7号住居	20	第38図	C区東出土土器13	46
第13図	B区出土土器	21	第39図	C区東出土土器14	47
第14図	B区出土石器	22	第40図	C区東出土土器15	48
第15図	C区西全体図	26	第41図	C区東出土土器16	49
第16図	C区西1号住居	26	第42図	C区東出土土器17	50
第17図	C区西2号住居	26	第43図	C区東出土土器18	51
第18図	C区東全体図	27	第44図	C区東出土土器19	52
第19図	C区東1号住居、2号住居、3号住居	28	第45図	C区東出土土器20	53
第20図	C区東4号住居	28	第46図	C区東出土石器1	54
第21図	C区東5号住居、6号住居、7号住居	29	第47図	C区東出土石器2	55
第22図	C区東土壌内出土土器1	30	第48図	C区東出土石器3	56
第23図	C区東土壌内出土土器2	31	第49図	C区東出土石器4	57
第24図	C区東土壌内出土土器3	32	第50図	C区東出土石器5	58
第25図	C区東土壌内出土土器4	33	第51図	D区全体図	59
第26図	C区東出土土器1	34	第52図	加曾利E式系周辺資料	60



## 写真图版

---

图版 1	小屋敷遺跡C区東全景·····	65
图版 2	C区東出土土器·····	66
图版 3	C区東出土土器·····	67
图版 4	C区東出土土器·····	68
图版 5	C区東出土土器·····	69
图版 6	C区東出土土器·····	70
图版 7	B区出土土器·····	70
图版 8	B区出土石器·····	71
图版 9	C区東出土石器·····	71
图版10	C区東出土石器·····	72



# 第1章 調査の経過と概要

## 1 調査の経過

小屋敷遺跡は山梨県北巨摩郡長坂町大八田に位置し、小字名では小屋敷・道風・中之台にひろがる。1990（平成2）年、山梨県農務部耕地課および山梨県峡北土地改良事務所から町教育委員会に長坂地区第Ⅲ工区の県営圃場整備事業計画についての事前協議がなされた。町教育委員会では同年11月から12月にかけて現地踏査と試掘調査を実施し、鳩川右岸の山梨秋田農協（現JA梨北秋田支所）付近から中央自動車西宮線にかけての約21,000㎡の範囲に、縄文時代から中世の遺物・遺構が確認された。

町教育委員会では遺跡の保存について山梨県農務部と協議を重ねたが、圃場整備の工法的に現状保存が困難であるとの結論に至り、約13,850㎡の範囲について記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査は1991（平成3）年6月から10月まで行われた。調査終了後に担当者や教育委員会事務局職員の異動・退職が相次いだためか、小屋敷遺跡の整理作業は大幅に遅延し、報告書刊行の目途すらたてられない状態であった。しかし1995（平成7）年、長坂町も含め北巨摩郡下の未報告遺跡に対する報告書刊行を促す県教育委員会学術文化課からの指導に基づき、町教育委員会は県農務部および峡北土地改良事務所と協議し、翌1996（平成8）年、県営圃場整備事業に関わる小屋敷遺跡ほか未報告遺跡の整理事業について、負担協定を締結した。これによって、町教育委員会では同年4月から翌年3月までこれら遺跡出土資料の洗浄・注記・接合作業と、教育委員会に保管されていた図面と写真の整理作業にとりくみ、小屋敷遺跡分について報告をここに行う運びになった。

## 2 遺跡の概要

1992（平成4）年4月10日付けで、町教育委員会が文化庁長官宛に提出した「平成3年度小屋敷遺跡外遺跡発掘調査事業実績報告書」の調査所見をまず以下に記しておく。

「小屋敷遺跡は、A・B・C・Dの4地区において調査し、昭和58年・59年・63年に調査を行った小和田館跡に接する地域で、館跡の外郭部としての中世遺構を中心として、さらに時代を遡った平安時代の住居跡、縄文時代の土壌が確認された。」

さて調査区の位置は第1図に示したように南北に細長く、鳩川東岸の低尾根上にある。厳密には南からA区、B区南、B区北、D区、C区西、C区東の6つの調査区に分かれる。中世室町時代の領主層の館と集落が確認されている小和田館跡は、小屋敷遺跡C区北側の中央自動車道ルート付近からさらに北側に展開している。これに関わる可能性がある遺構はC区東の薬研堀遺構である。縄文時代の土壌群が確認されたのは最も北側のC区である。ここからは縄文時代中期終末を中心とした約150基の土壌が確認された。縄文時代では中期初頭の住居址がB区南で1基確認された。平安時代の住居址はB区南で7軒、中世の住居址はC区西で2軒、C区東で9軒ある。いずれの遺構も調査時図面の紛失（？）やその後の

保管状況等に不備の点があり、残念ながら個々については説明できないものが多い。

### 3 調査組織

1991（平成3）年度発掘調査

事業主体 長坂町教育委員会  
調査担当 桜井真貴（長坂町教育委員会技師：当時）  
事務局 平井美隆（長坂町教育委員会教育長：当時）  
大石康雄（長坂町教育委員会教育課長：当時）  
植松 本（長坂町教育委員会教育係長：当時）

1996（平成8）年度整理事業

事業主体 長坂町教育委員会  
整理担当者 小宮山隆（長坂町教育委員会主事）  
事務局 小松清寿（長坂町教育委員会教育長）  
植松 忠（長坂町教育委員会教育課長）  
興石君夫（長坂町教育委員会生涯学習係長）

## 第2章 遺跡をとりまく環境

### 1 自然環境

小屋敷遺跡は北緯35度50分10秒、東経138度23分10秒に位置し、標高705mから730mの南北に細長くのびる低尾根上の緩斜面に立地する。このような低尾根は、第四紀火山の崩壊としては日本で最大規模といわれる葦崎岩屑流によって形成された八ヶ岳南麓緩斜面を、塩川の支流である鳩川や泉川といった中小河川にわずかに浸食されてできたもので、標高700m付近を境に下流域では段丘が発達してくる。なお、小屋敷遺跡の調査では遺構覆土は別として、標準土層堆積に関する記録はない。

### 2 長坂町内の遺跡分布（第1図、第1表）

小屋敷遺跡の周囲は非常に多くの遺跡が分布している。縄文時代では柳新居遺跡で中期前半の集落跡<sup>1)</sup>が、柳坪A・B両遺跡<sup>2)</sup>では中期後半の集落跡がそれぞれ発掘調査されている。また別当遺跡<sup>3)</sup>や原田遺跡<sup>4)</sup>でも後期の集落跡が調査されている。さらに前期後半の天神遺跡<sup>5)</sup>、中後期の姥神遺跡<sup>6)</sup>、後晩期の国史跡金生遺跡など、八ヶ岳南麓を代表する縄文時代の遺跡群が周囲に数多く分布する。弥生時代から古墳時代の遺跡は少ないものの柳坪A遺跡で弥生中期初頭の住居址と古墳前期の集落、境原遺跡<sup>7)</sup>で弥生後期前半土器の出土例があり、今後に遺跡数の増加が予想される。平安時代になると遺跡数は急増し、大八田地区の集落遺跡調査事例だけでも南新居西遺跡<sup>8)</sup>、小和田館跡<sup>9)</sup>、原田遺跡、柳坪A・B両遺跡、柳坪南遺跡<sup>10)</sup>、境原遺跡が挙げられる。中世・戦国時代では国人領主層の館とそれをとりまく集落が確認された小和田館跡、堀と土塁が良好に遺存する深草城址がある。

---

1) 未報告

2) 山梨県教育委員会1975『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一北巨摩郡長坂・明野・葦崎地内一』  
山梨県教育委員会1986『山梨県埋蔵文化財センター調査報告第13集 柳坪遺跡』

3) 長坂町教育委員会1987『深草遺跡 別当十三塚遺跡 別当遺跡（第2次） 糺屋敷遺跡』

4) 長坂町教育委員会1989『大八田・原田遺跡』

5) 山梨県教育委員会1994『山梨県埋蔵文化財センター調査報告第97集 天神遺跡』

6) 大泉村教育委員会1987『姥神遺跡』

7) 未報告

8) 長坂町教育委員会1991『南新居西遺跡』

9) 長坂町教育委員会1985『小和田館跡』

10) 未報告

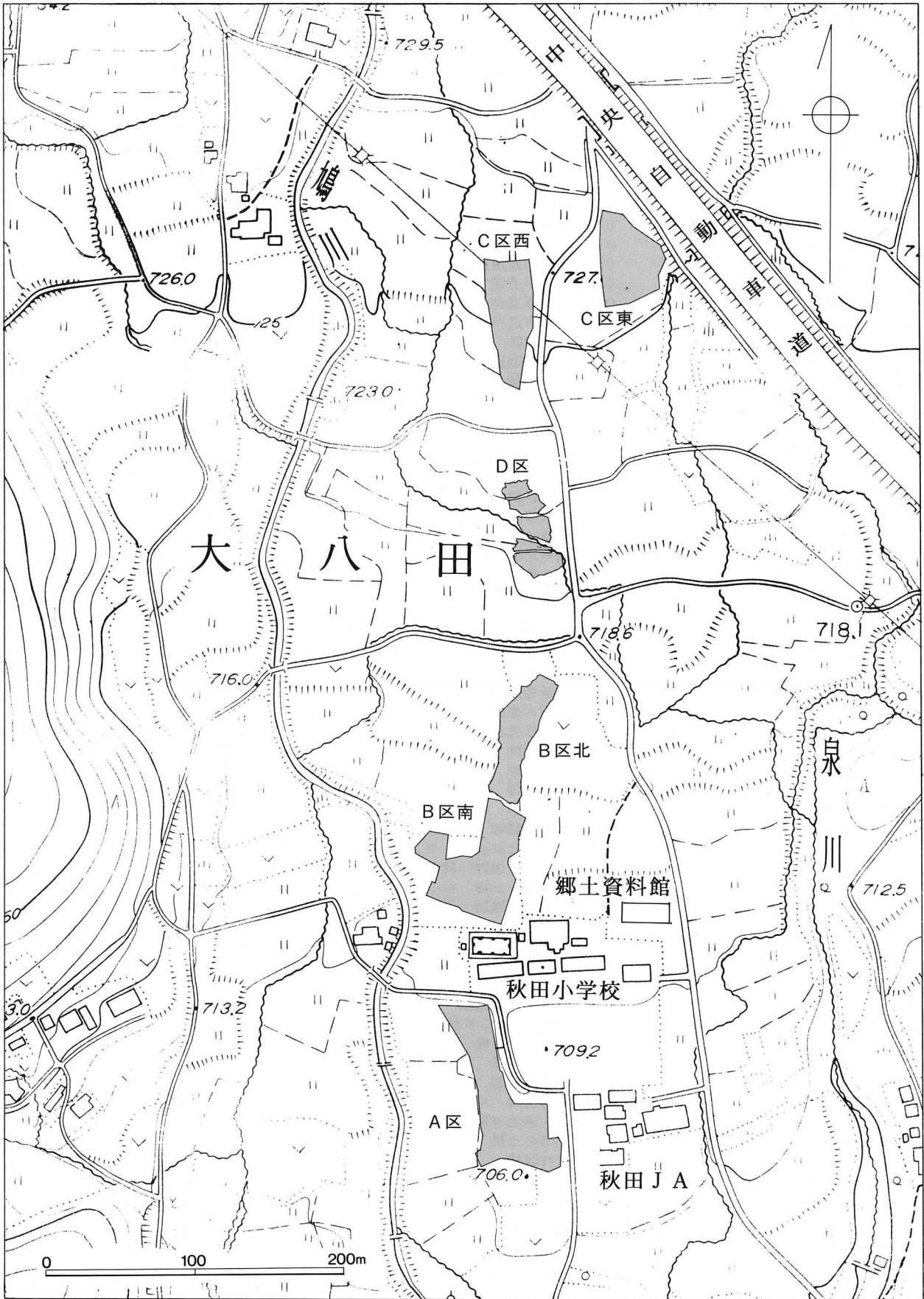


第1図 長坂町の遺跡分布図

表1 長坂町の遺跡分布一覽

(縄一縄文時代 弥=弥生時代 古=古墳時代 平=平安時代 中=中世)

001	耳塚	中	070	石原田南遺跡	縄 平 中	140	相吉氏屋敷跡	中
002	法性寺前遺跡	縄 中	071	塚原遺跡	縄 平	141	相吉遺跡	中
003	信玄原遺跡	縄	072	越中久保遺跡	縄 平	142	上松氏屋敷跡	平
004	小荒間古戦場跡		073	久保遺跡	縄	143	下屋敷遺跡	縄
005	桜畑遺跡	近	074	房屋敷遺跡	縄	144	清水頭遺跡	縄 古 平
006	小泉遺跡	近	075	池の平遺跡	縄	145	向原遺跡	平
007	菅間遺跡	縄	076	東蕪遺跡3	平	146	三つ墓古墳2	消滅
008	桜畑南遺跡	縄	077	東蕪遺跡2	平	147	原町農業高校前遺跡	縄
009	糞屋敷東遺跡	縄	078	東蕪遺跡4	縄 平	148	三つ墓古墳3	消滅
010	糞屋敷北遺跡	縄	079	東蕪遺跡1	縄 平	149	三つ墓古墳1	古
011	糞屋敷遺跡	縄	080	和手山東遺跡	中	150	池之平昭和堤北遺跡	縄
012	牛久保遺跡	縄 弥	081	小尾平遺跡	旧石 縄	151	池之平A遺跡	縄 平
013	牛久保南遺跡	縄	082	間の原遺跡		152	向井丹下屋敷跡	中
014	沢入遺跡	縄 中	083	西蕪東遺跡	平	153	池之平B遺跡	縄
015	宇千平遺跡	縄 中	084	西蕪遺跡	縄	154	上日野遺跡	縄 平
016	東下屋敷遺跡	縄	085	西蕪南遺跡	縄 平	155	田中氏屋敷跡	中
017	西下屋敷遺跡	縄	086	和手遺跡	縄 平	156	上日野A遺跡	縄 平
018	新田森遺跡	縄	087	腰巻遺跡	縄	157	上日野B遺跡	縄 平
019	西下屋敷南遺跡	縄	088	城山上北遺跡	縄 平	158	上日野C遺跡	縄 平
020	横手遺跡	縄 中	089	城山上遺跡	縄	159	姥久保遺跡	平 中
021	神之原遺跡	縄	090	中丸城跡	中	160	日野原遺跡	平
022	屋敷附遺跡	縄 中	091	居久保遺跡	縄 平	161	上日野原遺跡	縄 平
023	内城遺跡	中	092	青春白樺美術館南遺跡	縄	162	富岡遺跡	近
024	十郎林遺跡	縄	093	細久保遺跡	縄	163	横針遺跡	弥 古
025	阿原遺跡	平	094	後平遺跡	縄 平	164	大林遺跡	縄
026	中尾根遺跡	縄	095	狐平北遺跡	縄 平	165	中込遺跡	縄
027	手白尾遺跡	縄	096	狐平遺跡	縄 平	166	手白尾東遺跡	縄
028	夫婦石遺跡	縄	097	大平遺跡	縄 平	167	西屋敷遺跡	古
029	横山1遺跡	縄	098	下鳥久保遺跡	縄	168	上町南遺跡	縄
030	横山2遺跡	縄	099	鳥久保遺跡	縄	169	龍角西遺跡	縄 古 平
031	横山平南遺跡	縄 平	100	高松遺跡	縄	170	龍角遺跡	古 平
032	葛原北遺跡	縄 平	101	上町遺跡	縄 平	171	長坂上条遺跡	縄 平
033	上フノリ平北遺跡	縄	102	酒呑場遺跡	縄 古 平	172	西久保遺跡	縄
034	上フノリ平遺跡	縄	103	東村A遺跡	縄 平	173	新宿区健康村遺跡	縄 平
035	上フノリ平西遺跡	縄	104	東村B遺跡	古 平	174	長坂下条・藤塚	
036	下フノリ平北遺跡	縄	105	中村遺跡	古 平	175	和田遺跡	弥 平
037	葛原遺跡	縄 弥	106	錨田遺跡	平	176	古屋敷遺跡	縄
038	下フノリ平遺跡	縄 中	107	西村遺跡	古 平	177	泥里遺跡	縄
039	下フノリ平南遺跡	平	108	中反遺跡	縄 平	178	中込北遺跡	縄
040	別当遺跡	縄	109	中丸・藤塚		179	渋沢 上町遺跡	縄
041	別当西遺跡	縄	111	白山神社前遺跡	平	180	下屋敷北遺跡	縄 平
042	別当十三塚		112	上ノ屋敷遺跡	縄 平	181	柳坪南遺跡	平
043	南新居北遺跡	中	113	大々神十三塚	中	182	柳坪北遺跡	縄 弥 平
044	深草城址		114	大々神A遺跡	平	183	境原遺跡	弥 平
045	小和田遺跡	縄 平	115	大々神B遺跡	古 平	184	北村北遺跡	縄 弥 平
046	南新居屋敷		116	治郎田遺跡	古 平	185	酒呑場東遺跡	縄 弥 平
047	南新居遺跡	平	117	頭無A遺跡	平	186	山本遺跡	縄
048	南新居西遺跡	平	118	櫻木遺跡	弥 古	187	北村東遺跡	縄 古
049	小和田館跡		119	塚川・柳坪遺跡	縄	188	大久保北遺跡	縄 中
050	米山遺跡	縄	120	頭無遺跡(二本木遺跡)	縄 古	189	天王塚古墳	古墳
051	米山東遺跡	平	121	新田遺跡	縄	190	池之平北遺跡	縄 平
052	塚田遺跡	平	122	塚之越遺跡	中	191	清水頭北遺跡	縄 平
053	窪田遺跡	縄 古 平	123	原町北遺跡	平 中	192	宇千平の土壘	
054	弥右衛門塚1		124	原町遺跡	平	193	成岡 藤塚	
055	弥右衛門塚2		125	上久通北遺跡	縄 平	194	馬越場遺跡	
056	渋田北遺跡	平	126	塚川の土壘	中	195	紺屋遺跡	平
057	渋田遺跡	平	127	下村遺跡		196	治郎田北遺跡	縄
058	東原の土壘		128	塚川十三塚群				
059	東原遺跡	中	129	宮久保遺跡	縄			
060	柳新居遺跡	縄 古 平	130	下村南遺跡	縄			
061	原田遺跡	縄 平	131	泥里西遺跡	縄 平			
062	柳坪A遺跡	縄 古 平	132	勝見遺跡	縄 平			
063	柳坪B遺跡	縄 古 平	133	競馬場遺跡	縄 平			
064	小屋敷遺跡	縄 平	134	寺前遺跡	縄 平 中			
065	久保地遺跡	縄	135	上久通遺跡	縄			
066	成岡遺跡	縄 弥 平	136	反田遺跡	縄 平 中			
067	成岡新田遺跡	弥 平	137	三井氏屋敷跡	中			
068	曲田遺跡	平	138	北村遺跡	弥 古			
069	石原田北遺跡	縄 平	139	新居遺跡	縄			



第2図 小屋敷遺跡の位置

# 第3章 発見された遺構と遺物

小屋敷遺跡の調査は前述したように、図面や写真等資料の保管等に不備があり、遺構や遺物の台帳も遺されていない状況なので、個々の遺構・遺物について出土状況のみならず出土位置すら正確に報告することができない。よってここでは、各調査区ごとに遺された図面と航空写真から全体図を作成し、出土遺物の図示を最大限の目的として報告する。

## 1 A区の調査（第3図）

A区は遺跡のなかで最も南に位置し、北東から南西方向に緩やかに傾斜する。調査面積は3,467㎡である。溝状遺構2基と土壌20基以上が検出されたが、図示できる遺物はない。

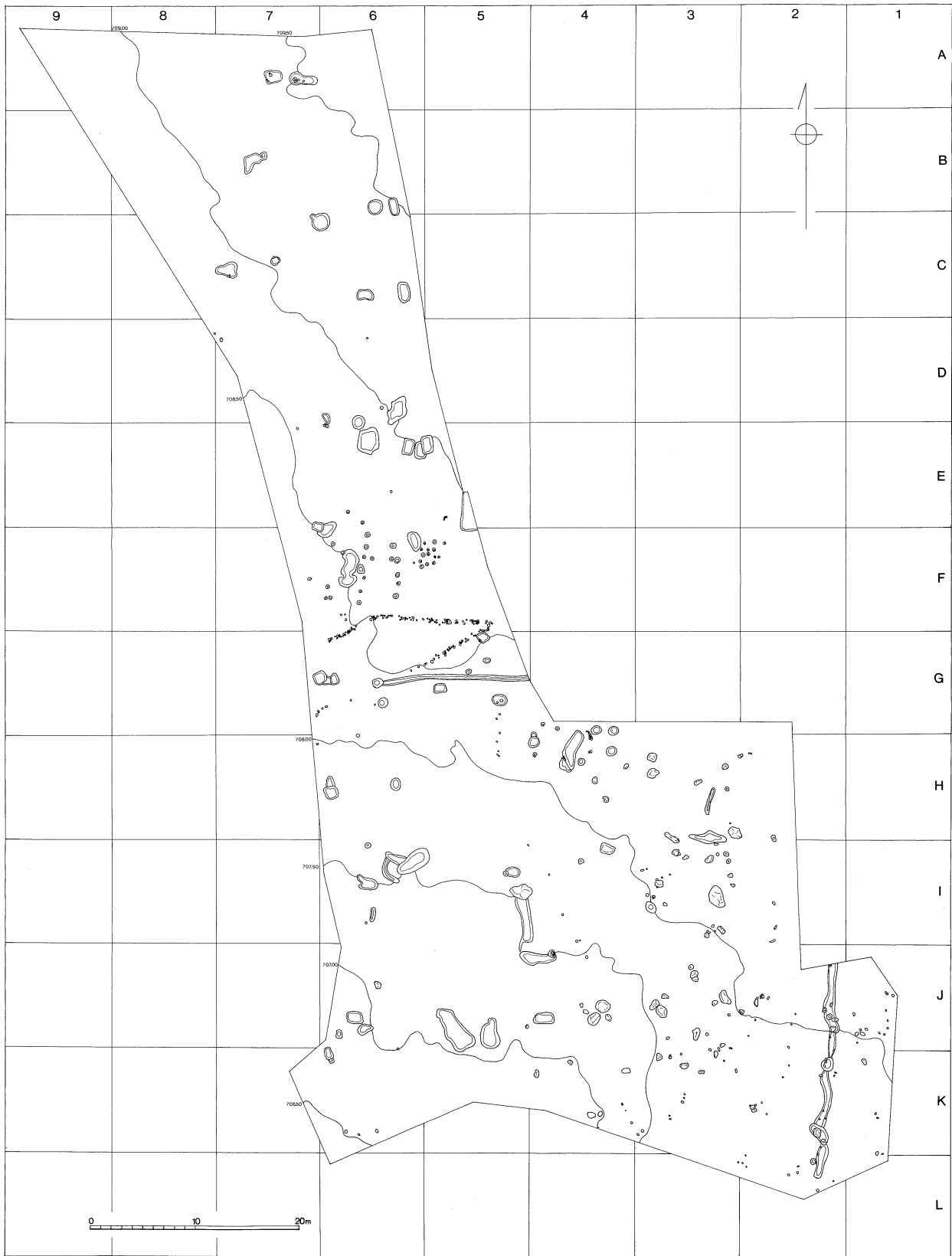
## 2 B区の調査（第4図、第5図）

B区は町立秋田小学校の北側にあり、さらに南北に分かれる。B区北は調査面積1,698㎡、B区南は3,101㎡で、A区と同じく北東から南西方向に傾斜する。平安時代から中世の住居址がB区南で7基、また両区でややまとまりのある分布をみせる土壌群がある。

図示できた遺物は少なく、土器は縄文時代中期初頭から中期後葉にわたる（第13図）。石器は石鏃1点、打製石斧8点、横刃形石器5点が出土している（第14図）。1は黒曜石製の有茎石鏃である。基部形態は凸基で、茎部が欠損している。2～9は打製石斧である。2～8は側縁部が刃部に向かって幅広くなったり、屈折する撓型で、9は短冊型になると思われる。4・6・8・9は基部が、7は刃部がそれぞれ欠損している。石材は2がシルト岩、3・5・8・9が砂岩、4・6・7がホルンフェルスである。10～14は横刃形石器で、10のみ欠損している。12が頁岩で、それ以外はホルンフェルスである。

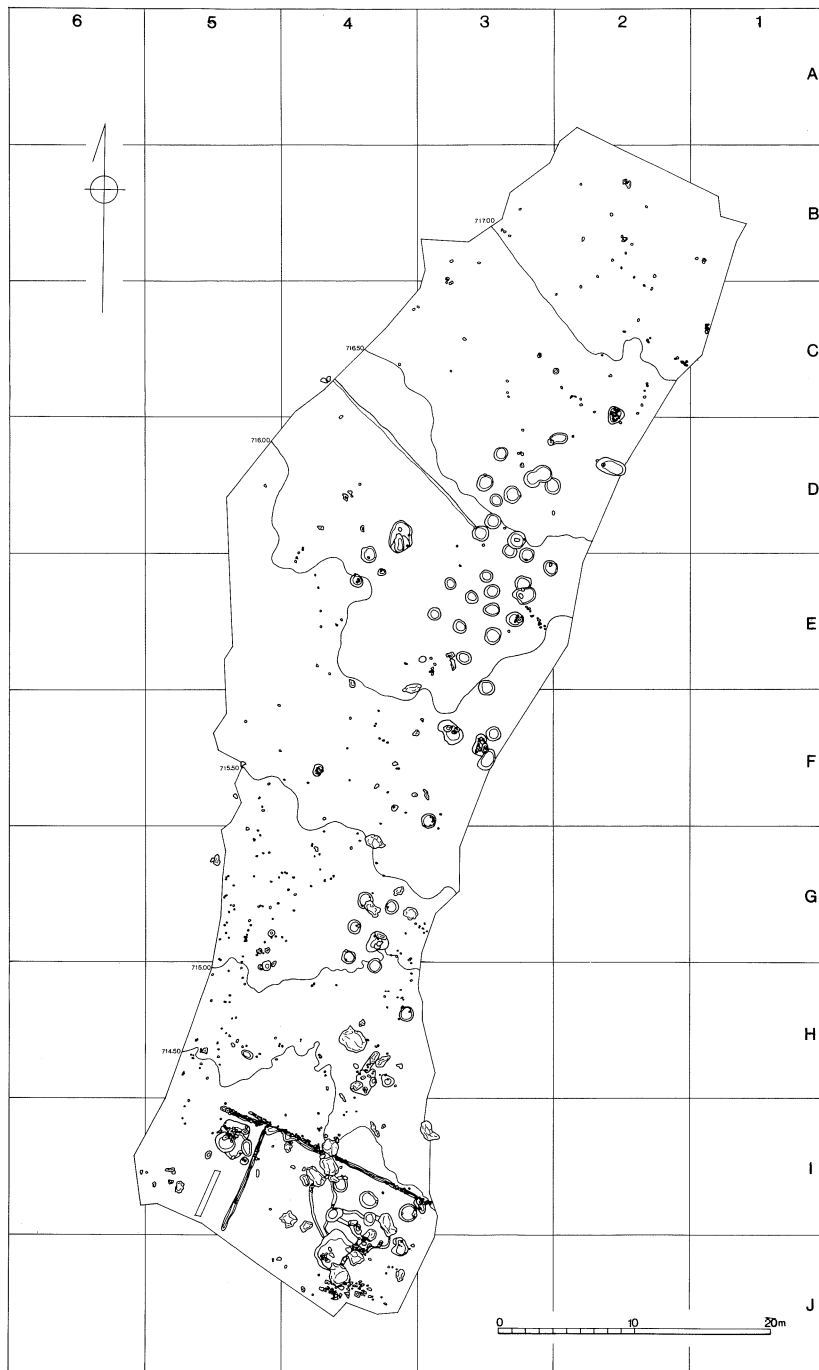
第2表 B区南 住居址一覧

住居 No.	長軸(m)	短軸(m)	所属時期	図版番号
1号住居	6.0	4.5	縄文時代中期初頭	第6図
2号住居	5.6	4.5	中世か?	第7図
3号住居	4.0	3.0	中世か?	第8図
4号住居	—	4.6	中世か?	第9図
5号住居	4.5	4.4	中世か?	第10図
6号住居	6.1	4.5	中世か?	第11図
7号住居	4.2	3.1	中世か?	第12図

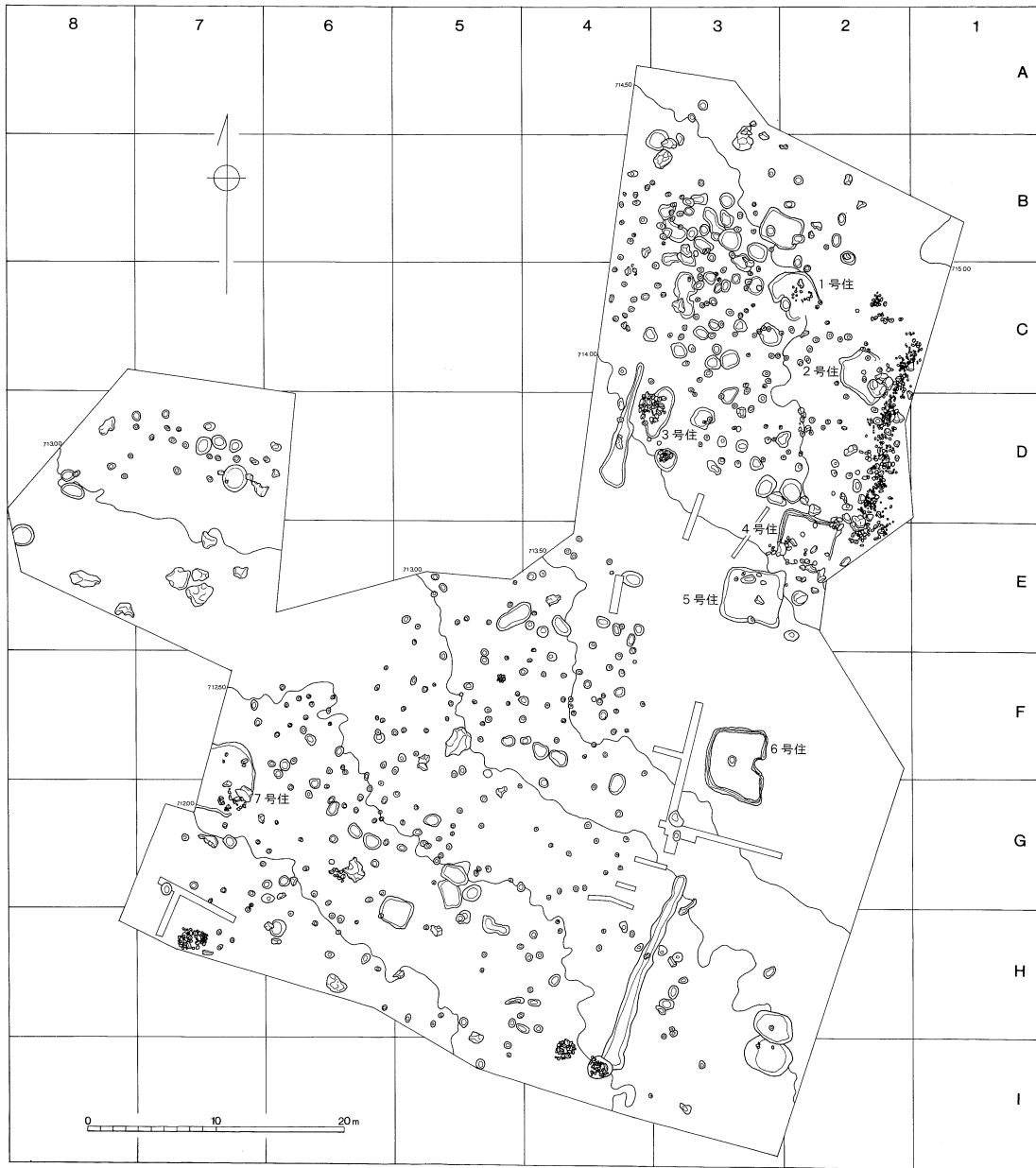


第3图 A区 全体图





第4图 B区北 全体图



第5图 B区南 全体图



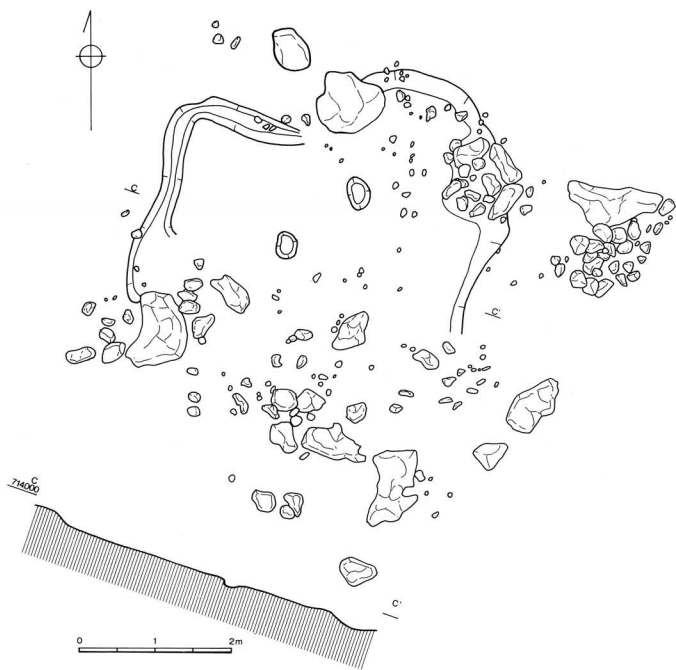
第6图 B区南 1号住居



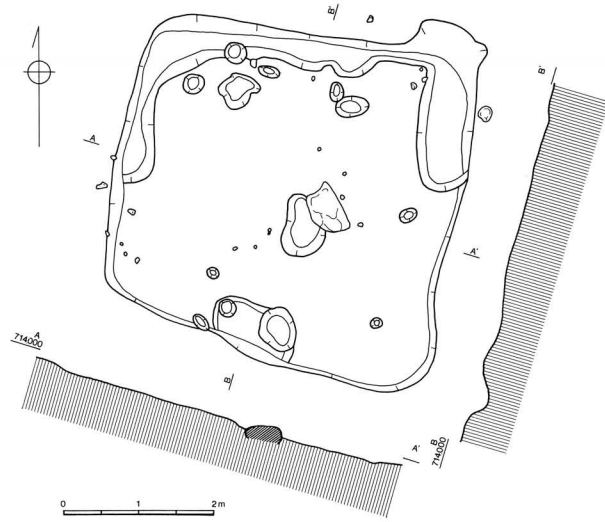
第7图 B区南 2号住居



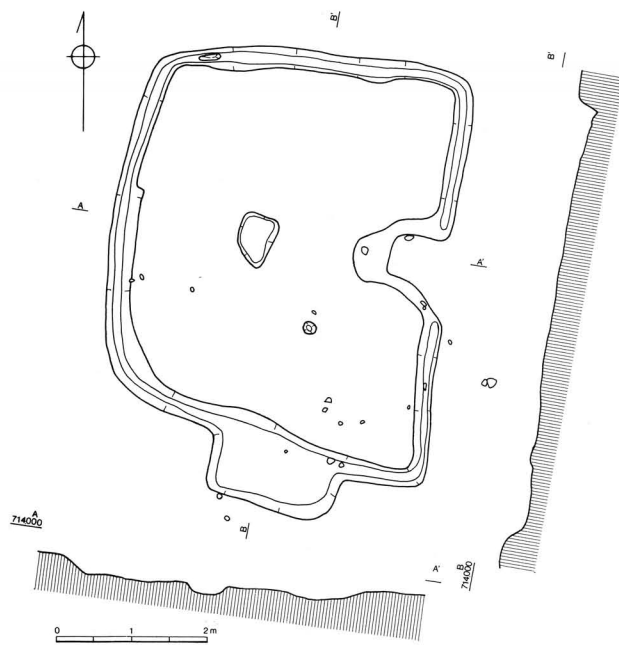
第8图 B区南 3号住居



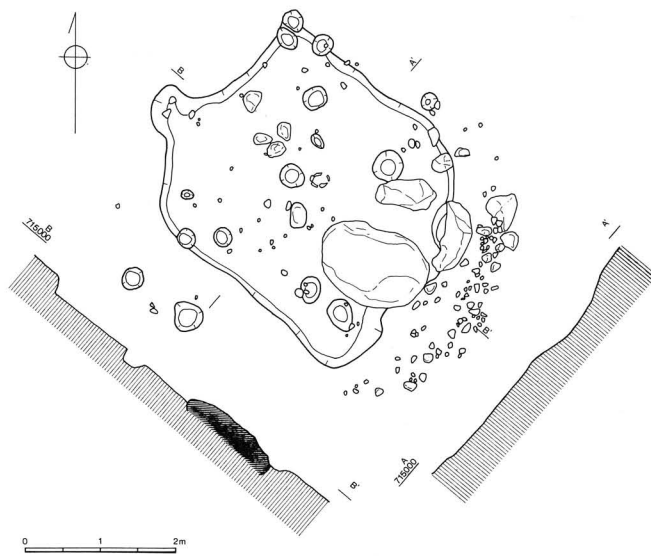
第9图 B区南 4号住居



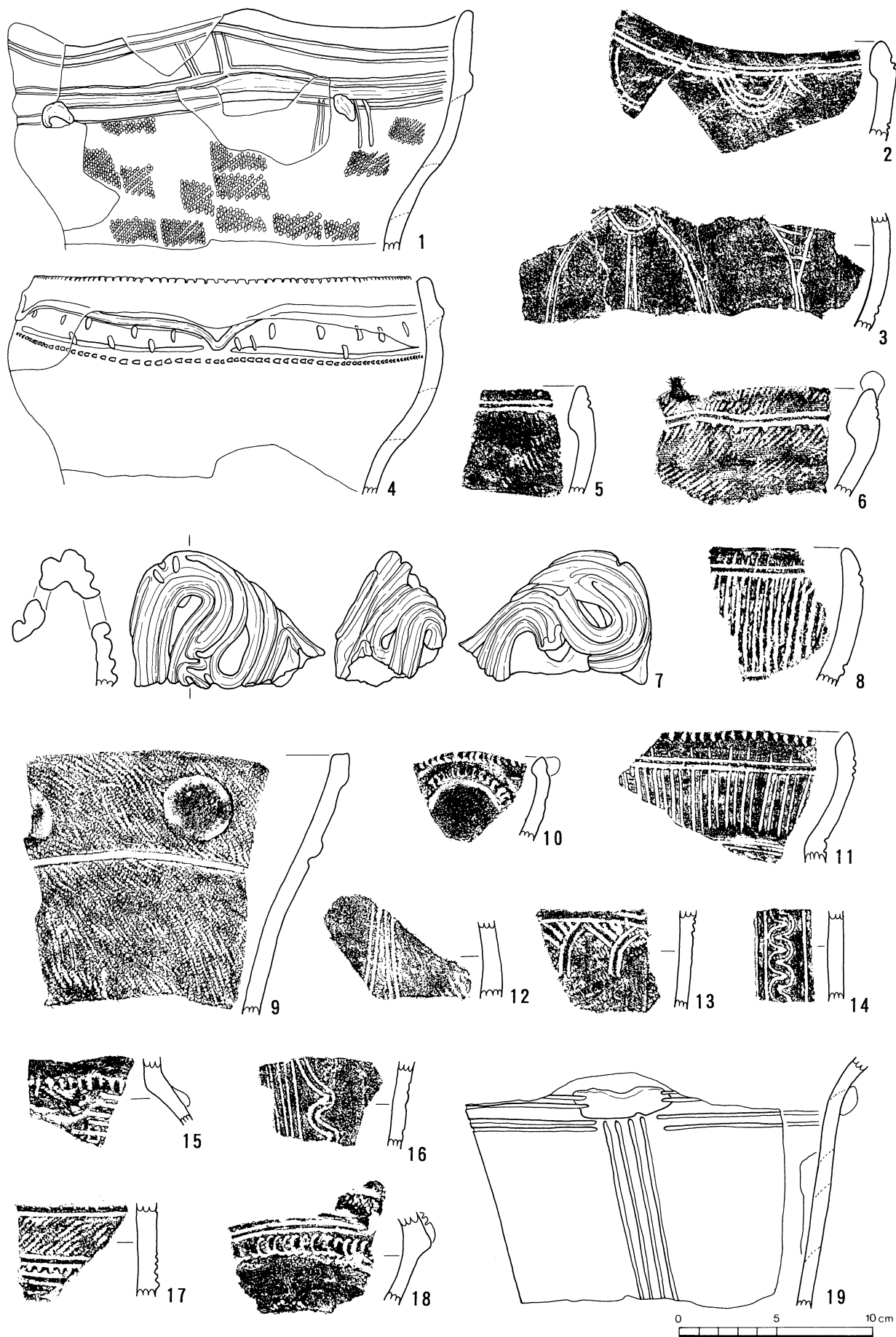
第10图 B区南 5号住居



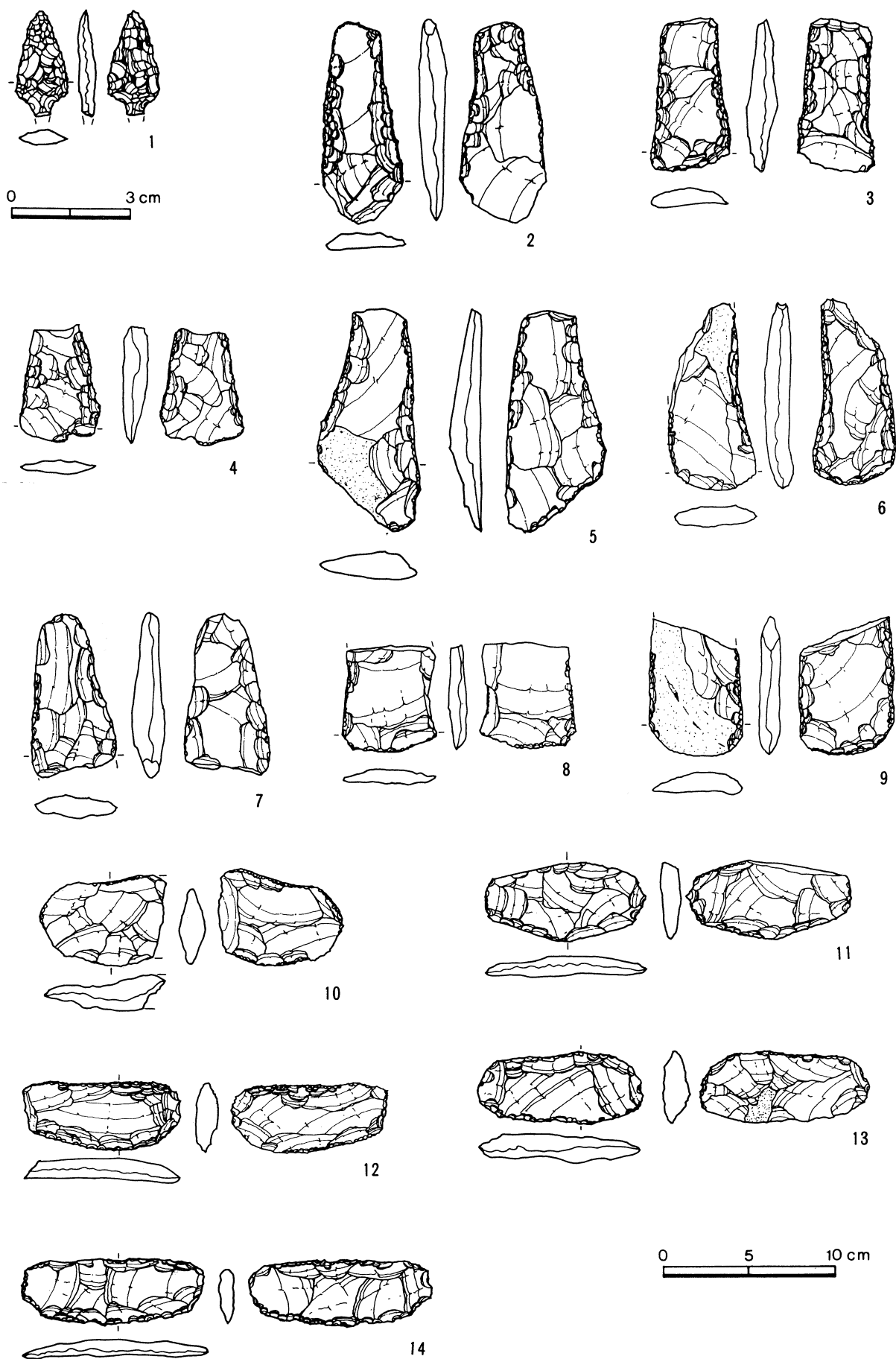
第11图 B区南 6号住居



第12图 B区南 7号住居



第13图 B区出土土器



第14图 B区出土石器

### 3 C区の調査（第15図、第16図）

C区は最も北側の調査区で、町道を挟んで東西二つの調査区に分かれる。C区西は調査面積2,332㎡、C区東は2,070㎡である。C区西が北から南へ低くなる低尾根上の緩斜面であるのに対して、C区東は北北西から南南東へ低くなる幅広い緩斜面になっている。

C区西からは、平安時代から中世の住居址2基、竪穴状遺構2基、土壇10基以上、溝状遺構1基が確認された。

第3表 C区西 住居址一覧

住居 No.	長軸(m)	短軸(m)	所属時期	図版番号
1号住居	4.0	3.9	中世か？	第17図
2号住居	4.0	3.7	中世か？	第18図

C区東からは、約150基の土壇群と平安時代から中世の住居址9基、薬研堀遺構1基、溝状遺構が検出された。縄文時代中期後半から後期初頭にかけての土器が多く出土し、完形復原土器7を含め土壇群に関わる遺物とされる。これら土器の出土状況を追認できる資料は残されていないのだが、C区東では縄文時代の遺構がこの土壇群しかないこと、また覆土中から完形に近い縄文土器が出土した土壇が多くあったことから、これらの土壇群は中期終末を中心とした時期に位置づけられる可能性が高い。

第4表 C区東 住居址一覧

住居 No.	長軸(m)	短軸(m)	所属時期	図版番号
1号住居	3.6	3.0	中世か？	第19図
2号住居	—	2.0	中世か？	第19図
3号住居	—	2.2	中世か？	第19図
4号住居	4.3	4.1	中世か？	第20図
5号住居	4.5	3.6	中世か？	第21図
6号住居	4.0	3.6	中世か？	第21図
7号住居	4.8	2.5	中世か？	—
8号住居	2.7	2.6	中世か？	—
9号住居	3.5	3.2	中世か？	—
10号住居	4.3	3.8	中世か？	—

### C区東 土壇内出土縄文時代土器（第22図～第25図）

1は埋設土器と注記されていたが詳細はわからない。口縁部の突起を一つもち全面にRLの斜縄紋が施された中期中葉の深鉢である。2は前期末葉、3～8は中期初頭から前葉、9～13は中期後半曾利式新段階に

位置づけられる。

14～50は基本的に縄紋を地紋とし、隆帯紋または沈線紋による紋様区画が施された加曾利E式新段階に類する土器群である。14～16、18、19、21～22は隆帯による渦巻または楕円形の曲線区画紋が、17、20、23は隆帯による直線的な区画紋が施されている。24は口縁部付近に横位の、胴部に縦位のLR縄紋をそれぞれ地紋とし、沈線により曲線区画された胴部が強く括れた深鉢である。25～36も沈線による曲線区画された土器群である。30は縦位のLR縄紋を地紋として、沈線による曲線紋と不規則な列点が施された深鉢上半である。37～44は沈線による直線的な区画紋が施された土器群と思われる。45は縦位のLR縄紋を地紋とし、胴部を沈線による逆U字状区画紋、頸部に1条の横位沈線紋が施された完形の甕である。46～49は地紋のみ、または無紋の土器片で、全体の紋様構成はわからない。50は口縁部付近に横位の、胴部に縦位のLR縄紋が施された深鉢で胴部の括れが強い。

51～58は後期から晩期の土器を一括した。51～56は後期初頭から前葉、58は後期中葉、57は晩期後半と思われる。59は2条の平行する縦位の沈線が胴部に、1条の横位沈線が口唇部にそれぞれ施されたミニチュア土器である。60～72は土器底部を一括した。66～72は中期後半の台付深鉢底部であろう。

## C区東 出土位置不明縄文時代土器（第26図～第45図）

73は前期末葉、74～83は中期初頭から中葉にかけての土器である。84～86、89は中期後半曾利式古段階の土器であろう。87は棒状工具による平行条線を地紋とした深鉢だが、この型式に特徴的な胴部の隆帯垂下紋はなく、頸部の条線施紋が乱雑であることから曾利Ⅲ式前後に位置づけられる。

88～146は曾利式新段階を一括したが、口縁部紋様や胴部垂下紋の有無・形状により若干の時間差が予想される。胴部の地紋に連続ハの字紋が施されるものがほとんどで、条線のものもわずかに含まれる。

147～426は、基本的に縄紋を地紋とし、隆帯紋または沈線紋による紋様区画が施された加曾利E式新段階に類する土器群で、C区東地区では最も出土量が多い。147～158は口縁部紋様帯を有する土器群である。147は胴部に縦位のLRの結節縄紋が施されている。159～172、174～218は隆帯による曲線区画紋が施された土器群である。159はLR縄紋を地紋として2本単位の隆帯が全面に施され、160は1本単位の隆帯による渦巻紋と楕円紋が胴部に施された土器でいずれも口縁に4単位の波状突起がある。219～263は隆帯により胴部に直線垂下紋、口縁部に横位の隆帯を1条巡らす可能性が高い土器群である。219は口縁部の横位隆帯直下に横位の、胴部に縦位のLR縄紋を施す大型の深鉢である。173、264～324は沈線による渦巻あるいは楕円形などの曲線紋が胴部に施された土器群である。264はRL縄紋を地紋として、胴部上半に渦巻紋と蕨手状紋の組み合わせ、下半に楕円紋が施され、胴部中央が最大径で胴部下半から底部にかけての括れが強まる。胎土がきめ細かく、整形、焼成ともに良好な優品で、完形で出土した。325～364は沈線によるU、または逆U字状の区画紋が胴部に施されたものであるが、楕円区画紋との区別が困難なものもある。365～416は沈線による直線的な区画紋が施された可能性の高い土器群である。全体的な紋様構成についてはよくわからない。417～426は地紋のみまたは無紋の土器片で、やはり全体の紋様構成はわからない。

427・428は壺形土器で、中期後半の両耳壺であろう。

429～468は後期以降の土器群である。磨消し縄紋が施された土器片のなかには中期終末のものと区別がつかない資料も含まれる可能性がある。457は晩期後半であろうか。465～468は紋様構成が判然としないが、胎



土や整形が後期以降の粗製土器に近い。

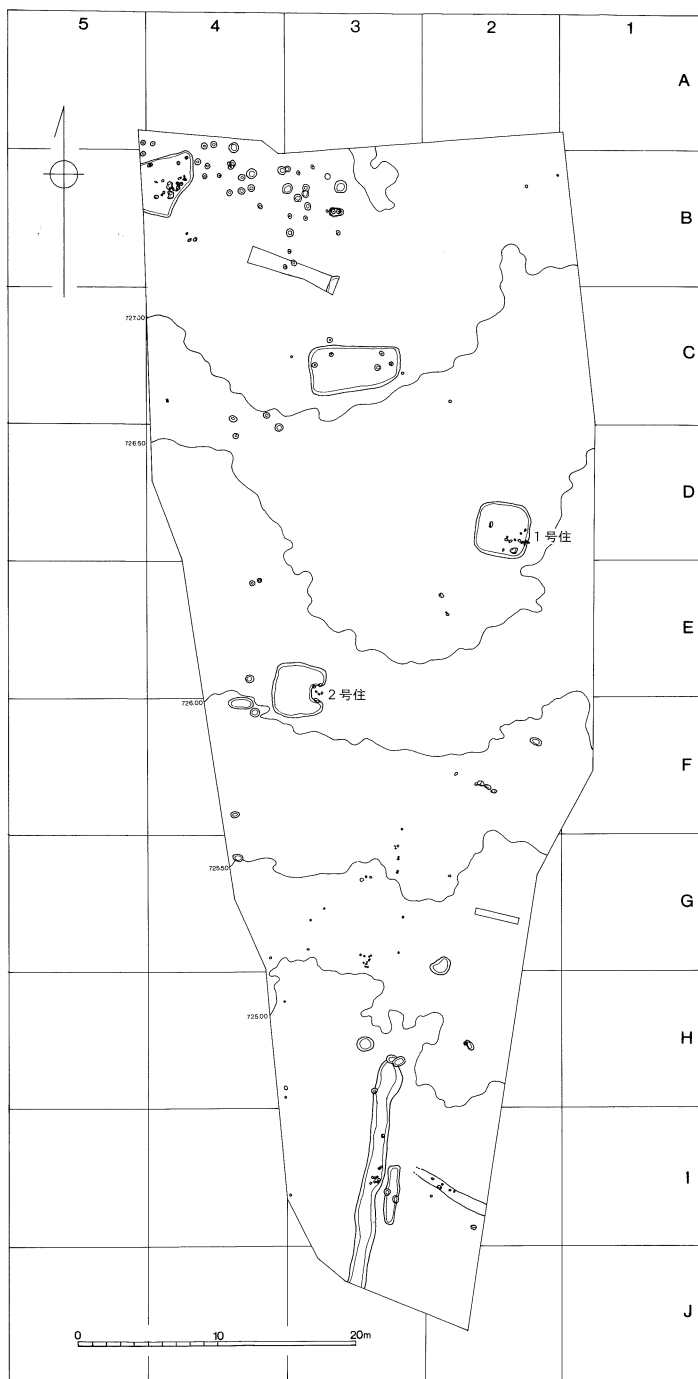
469～510は底部、517～519は台付深鉢底部である。511は中期後半の器台、512は後期前半の注口土器の注口部分、513はミニチュア土器と思われる。514～516は口縁部の突起である。

以上のなかで最も出土量が多い中期終末土器については次章でもとりあげる。

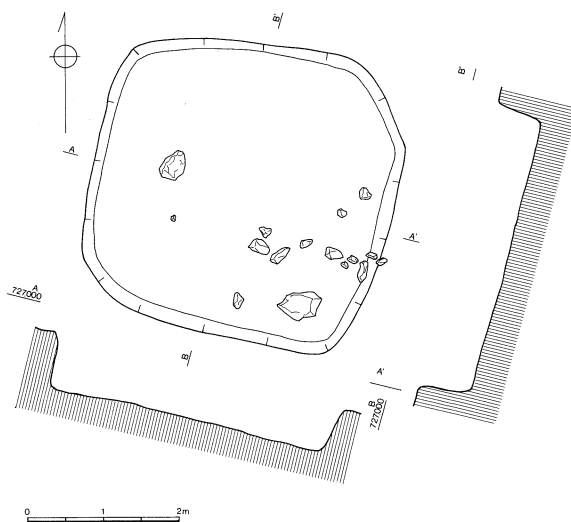
## C区出土縄文時代石器（第46図～第50図、第5表、第6表）

C区から出土した石器は総数55点で、その内訳は石鏃2点、石匙3点、スクレーパー2点、磨製石斧2点、打製石斧10点、横刃形石器3点、磨石15点、凹石7点、ピエス・エスキュー1点、小剥離のある剥片1点、石核1点、剥片7点、棒状礫1点である。

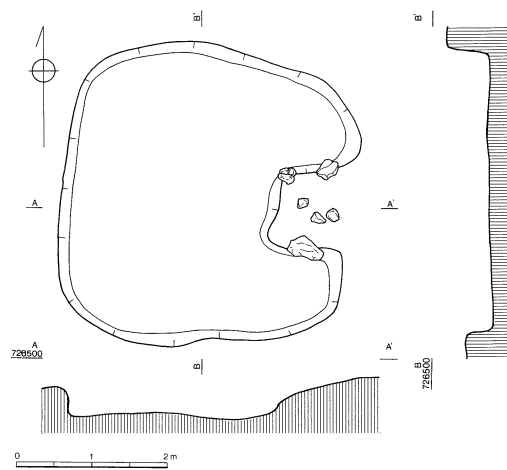
1・2は無茎凹基の石鏃である。ともに完形で黒曜石製である。3・5・6は石匙で、3は完形の斜型であり、5はつまみ部と体部が欠損しているが、おそらく3と同様に斜型であろう。6は完形の横型である。石材は3がホルンフェルス、5・6がチャートである。4は刃部端の破片であり、スクレーパーとしているが、石匙の可能性もある。石材は頁岩である。9は黒曜石製のスクレーパーで、刃部を作り出すための剥離と一部を除きほとんどが自然面であり、原石をそのまま利用している。7・8は定角式の小型磨製石斧である。どちらも刃部から基部にかけて欠損している。10は側縁部に小剥離のある剥片である。11は上下2辺に階段状の剥離痕と、それ以外に対辺に向かってのびる剥離痕があるので、ピエス・エスキューであろう。背面は階段状剥離痕以外は自然面であり、石材は黒曜石である。12は黒曜石原石の周りを打ち欠いているので石核とした。13～19は剥片である。石材は13・17が安山岩、14～16が黒曜石、18・19がホルンフェルスであり、18と19は接合する。20～29は打製石斧である。22以外は刃部に向かって幅広になったり、側縁部が屈折する撓型であり、20・29以外は刃部あるいは基部が欠損している。30～32は横刃形石器である。30は表裏面ともに磨り痕が確認でき、表面左側（裏面右側）の挟り部および上部は研磨して成形している。石材は30が粘板岩、31が硬質頁岩、32がホルンフェルスである。33～47は磨石である。磨面の数で分類すると、磨面が1面のもの1点（41）、表裏の2面に磨面をもつもの9点（33～36・38・40・43～45）、磨面が3面のもの1点（39）、磨面が4面のもの3点（37・42・46）、不明のもの1点（47）となる。40は両側面に敲打痕がある。石材は43・45が片麻岩で、それ以外は安山岩であるが、安山岩のなかでも38・39・42・47は輝石安山岩である。48～54は凹石である。ここでは磨面があっても凹みをもつものを凹石とした。48は断面形態が三角で、各面に凹み2つと磨面があり、他に磨面が1面ある。49は表面に凹みが2つ、裏面に磨面がある。50は表裏面2つずつ凹みがある。51は表面に凹みが3つ、側面に磨面2つ、裏面に磨面1つある。52・53は表裏面に1つずつ凹みがある。54は約半分欠損しているので全体の数はわからないが、表裏面に2つずつ凹みが残っている。石材は全て輝石安山岩である。55は棒状の礫であり、特に使用痕等は確認できない。磨石と凹石と合わせた総数22点を、磨面・凹部・敲打痕の3つの使用痕の組み合わせで分類すると、磨面のみ14点(63.6%)、凹部のみ4点(18.2%)、磨面+凹部3点(13.6%)、磨面+敲打痕1点(4.6%)である。本遺跡の磨石類の特徴は、単独の使用痕をもつものが圧倒的に多く、複数の使用痕をもつものは少ない。特に敲打痕をもつものは1点しかない。



第15图 C区西全体图



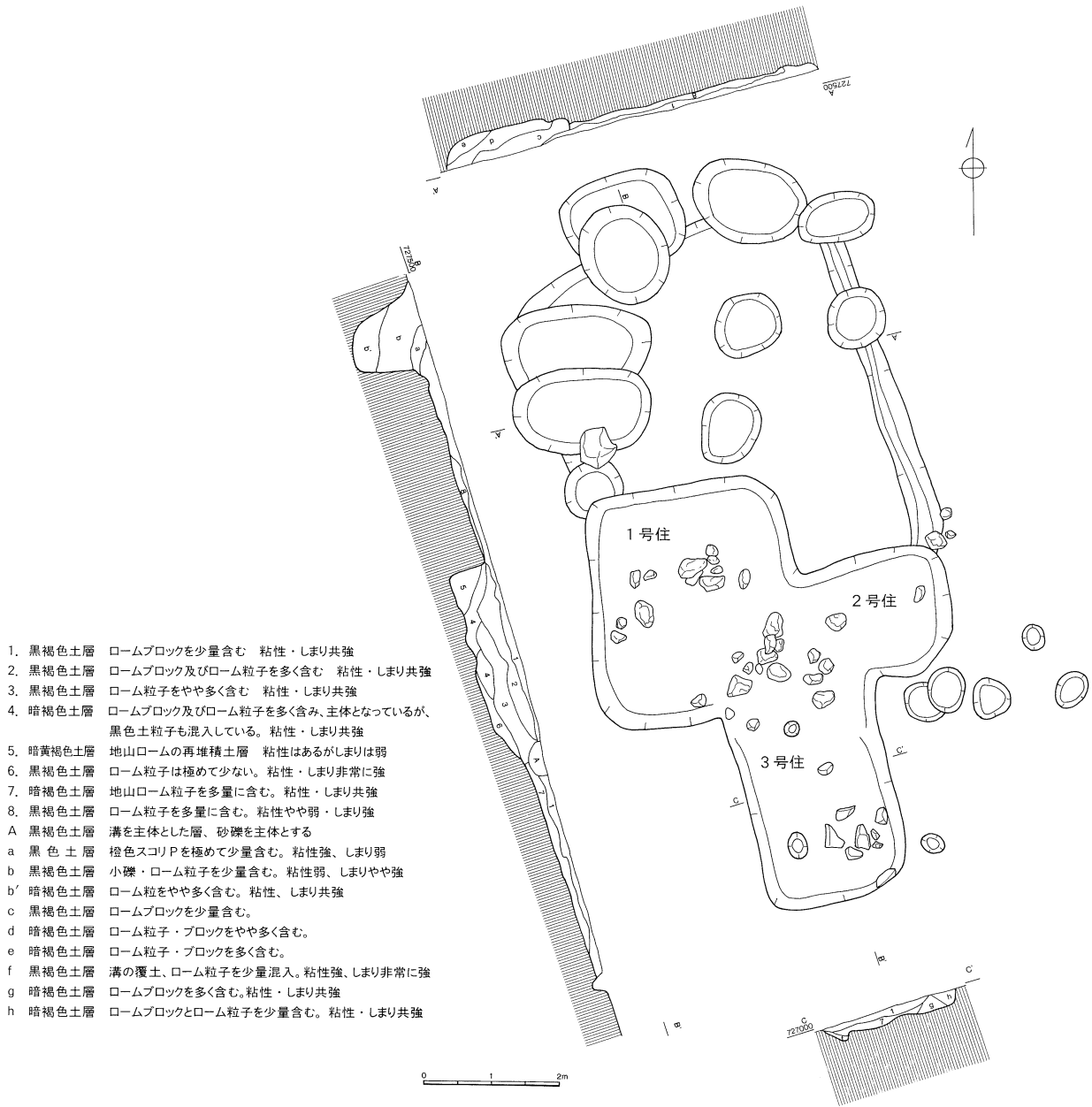
第16图 C区西1号住居



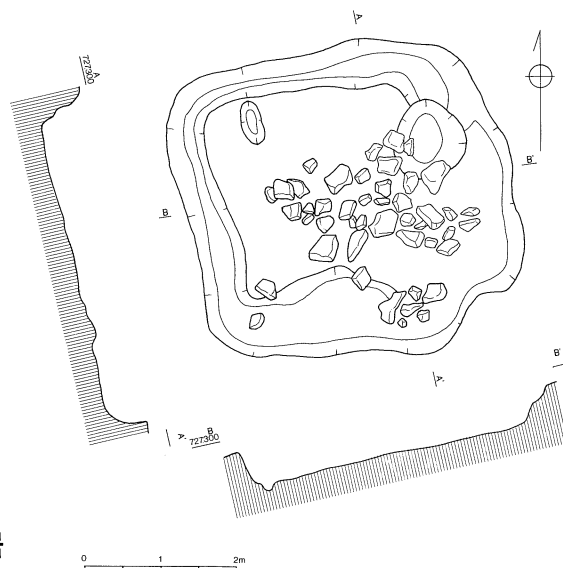
第17图 C区西2号住居



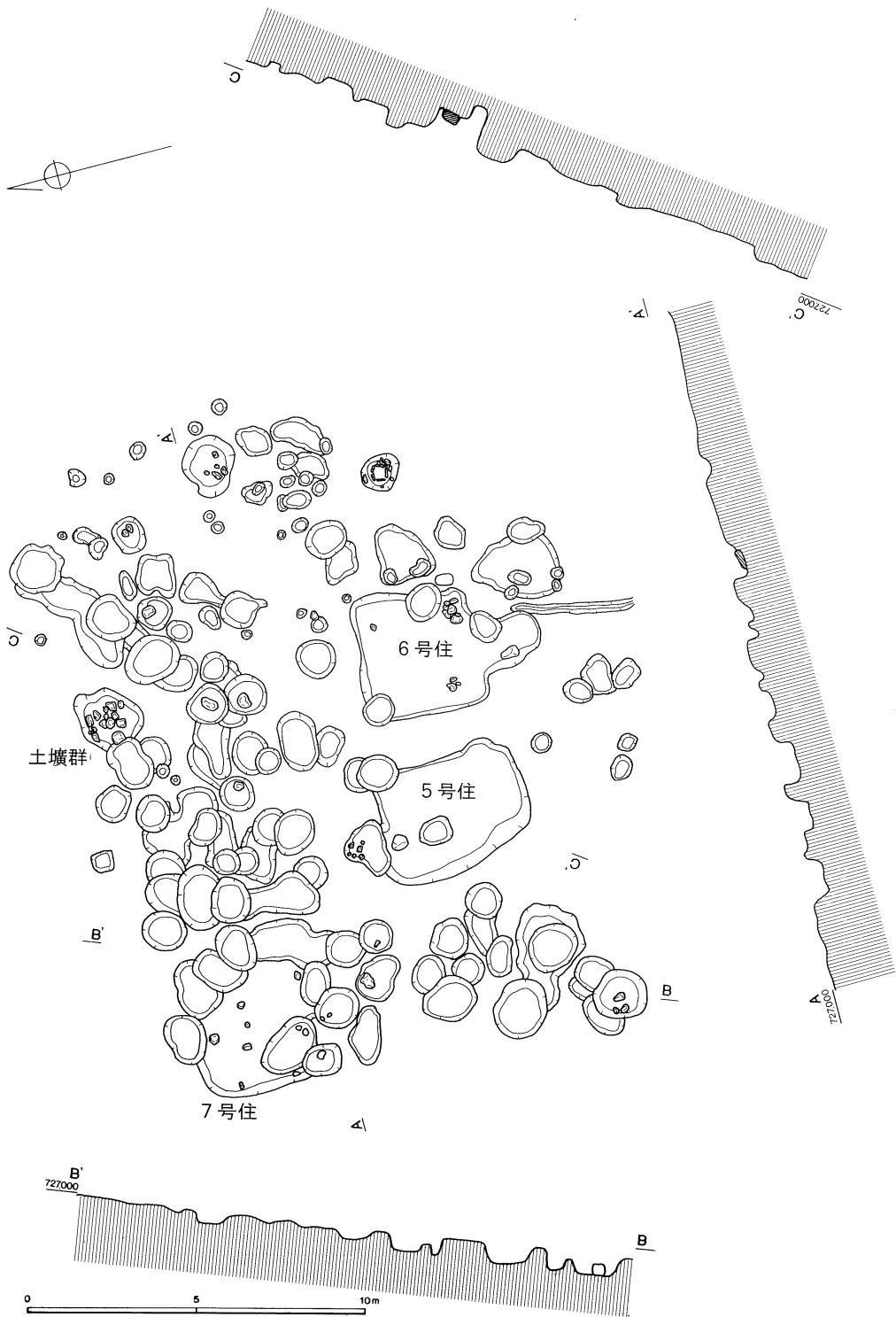
第18图 C区東全体图



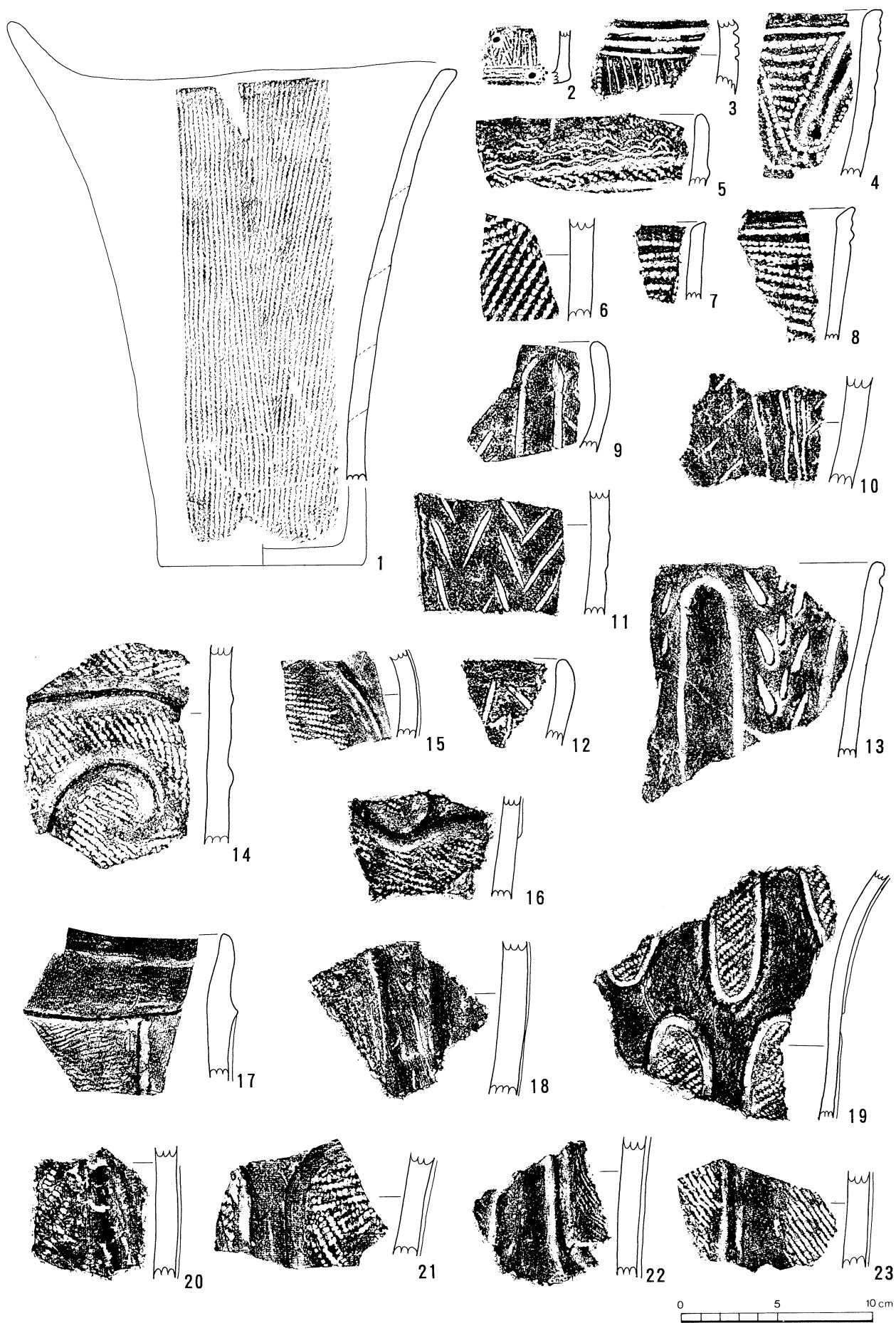
第19図 C区東1号住居、2号住居、3号住居



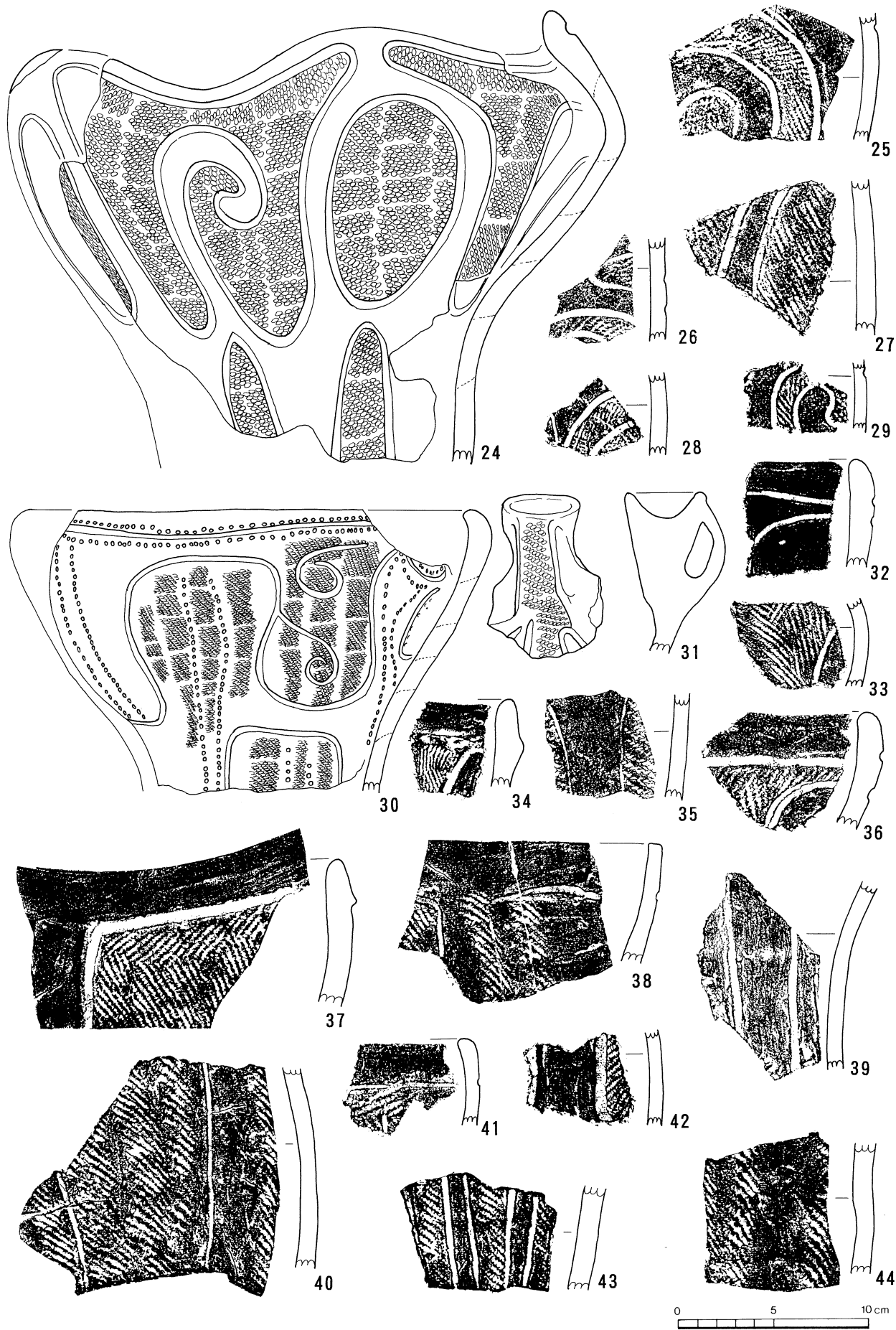
第20図 C区東4号住居



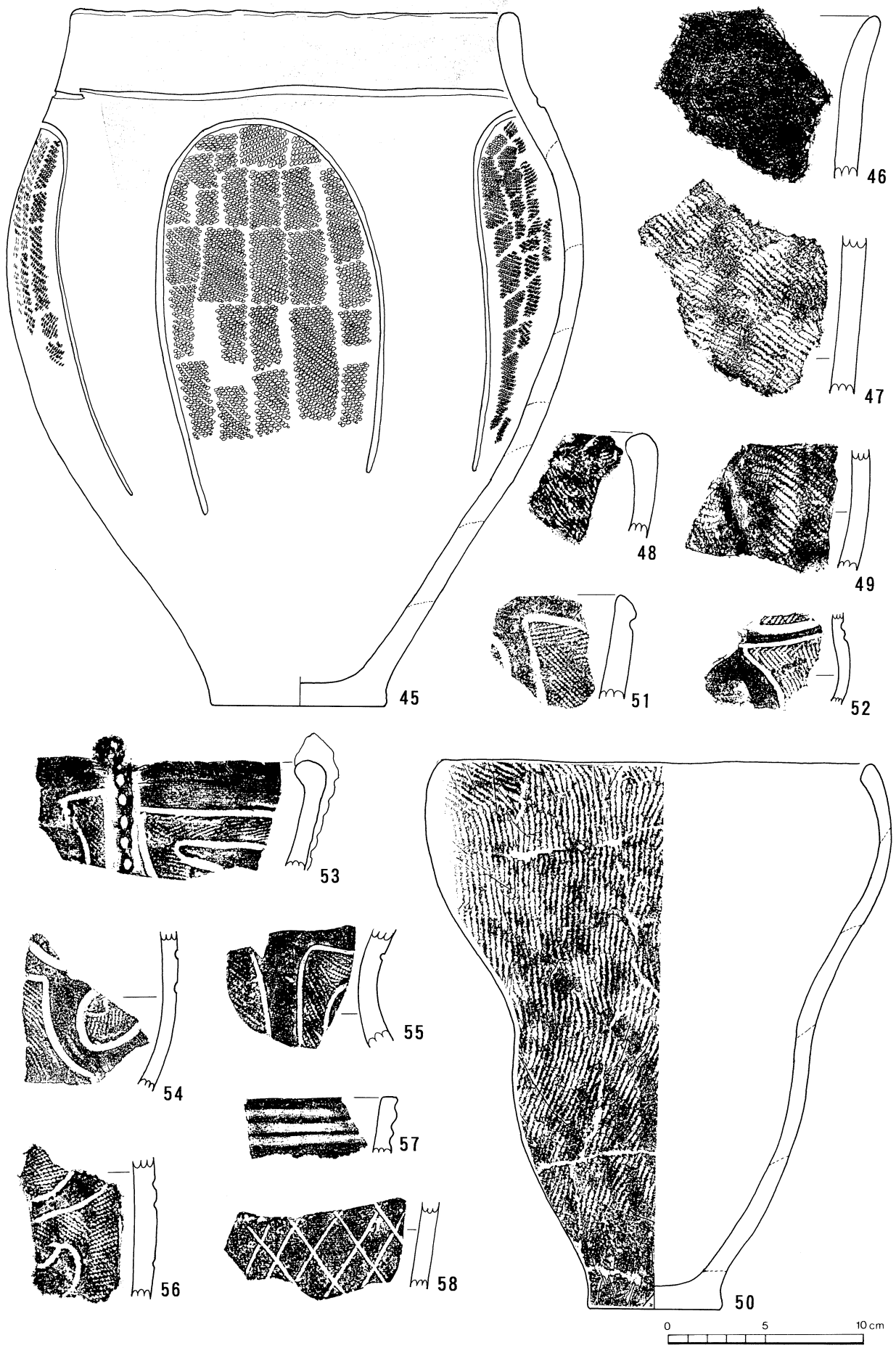
第21图 C区東5号住居、6号住居、7号住居 土塘群



第22图 C区東土壤内出土土器 1

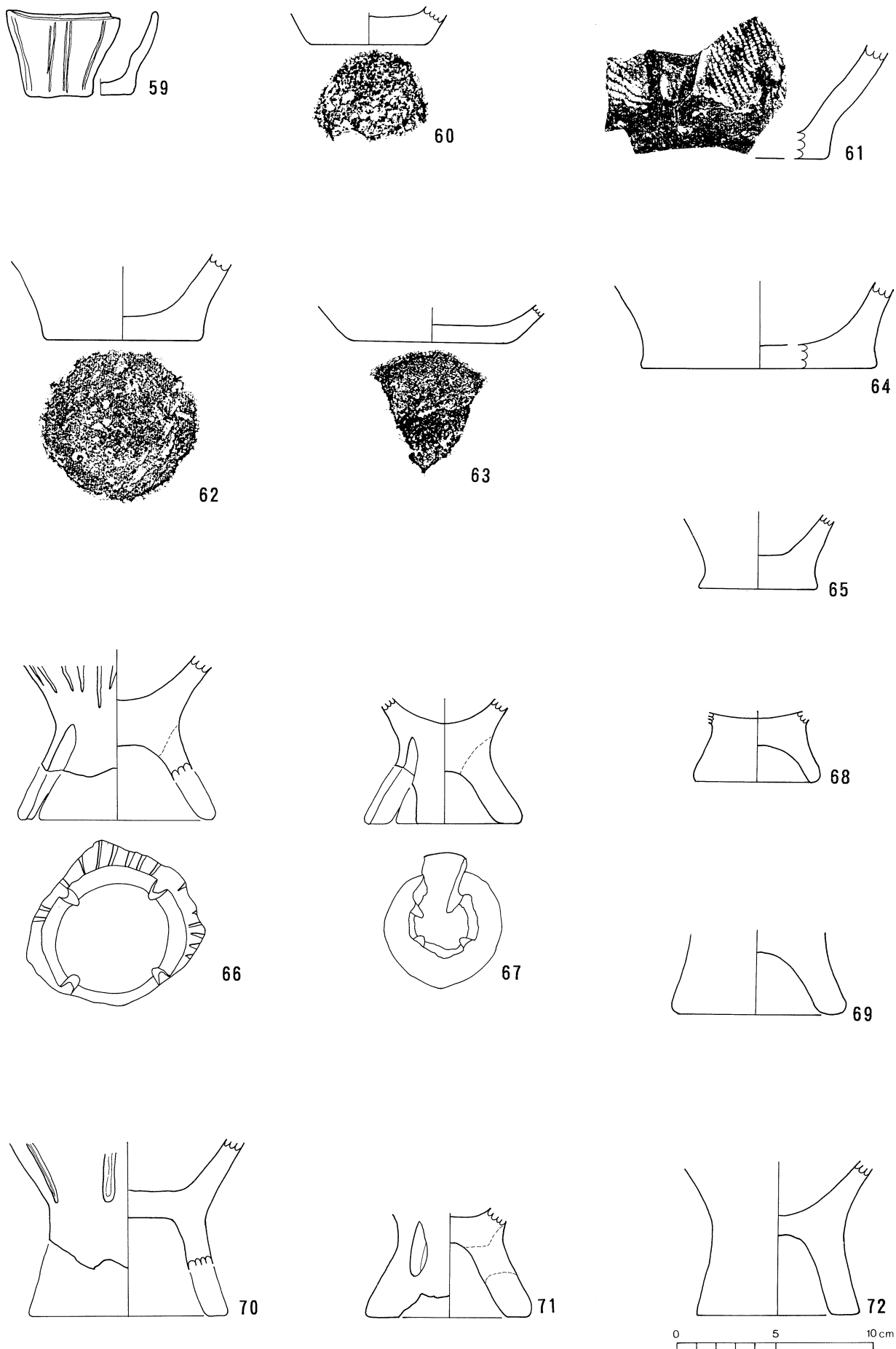


第23图 C区東土壤内出土土器 2

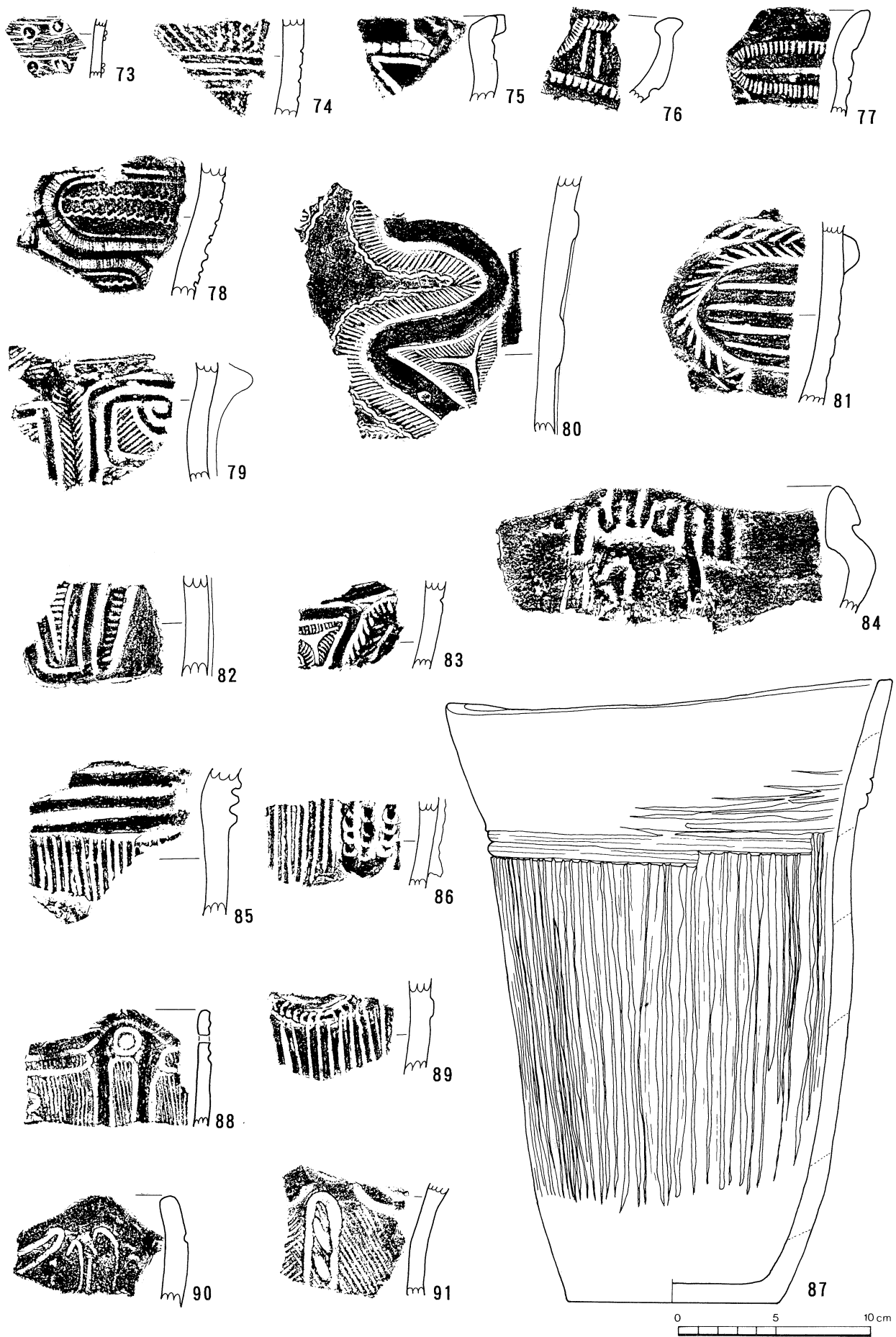


第24图 C区東土壤内出土土器 3

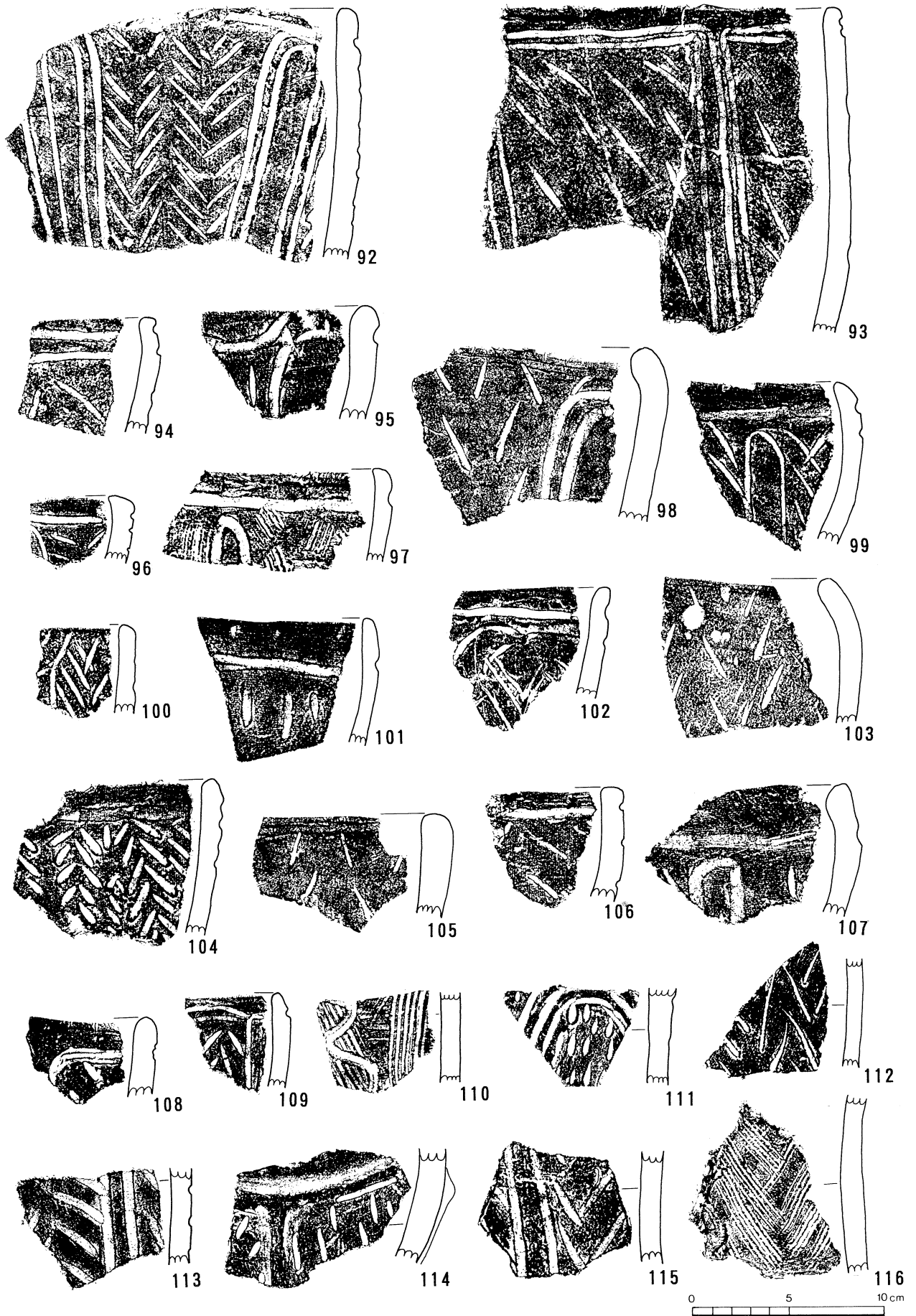




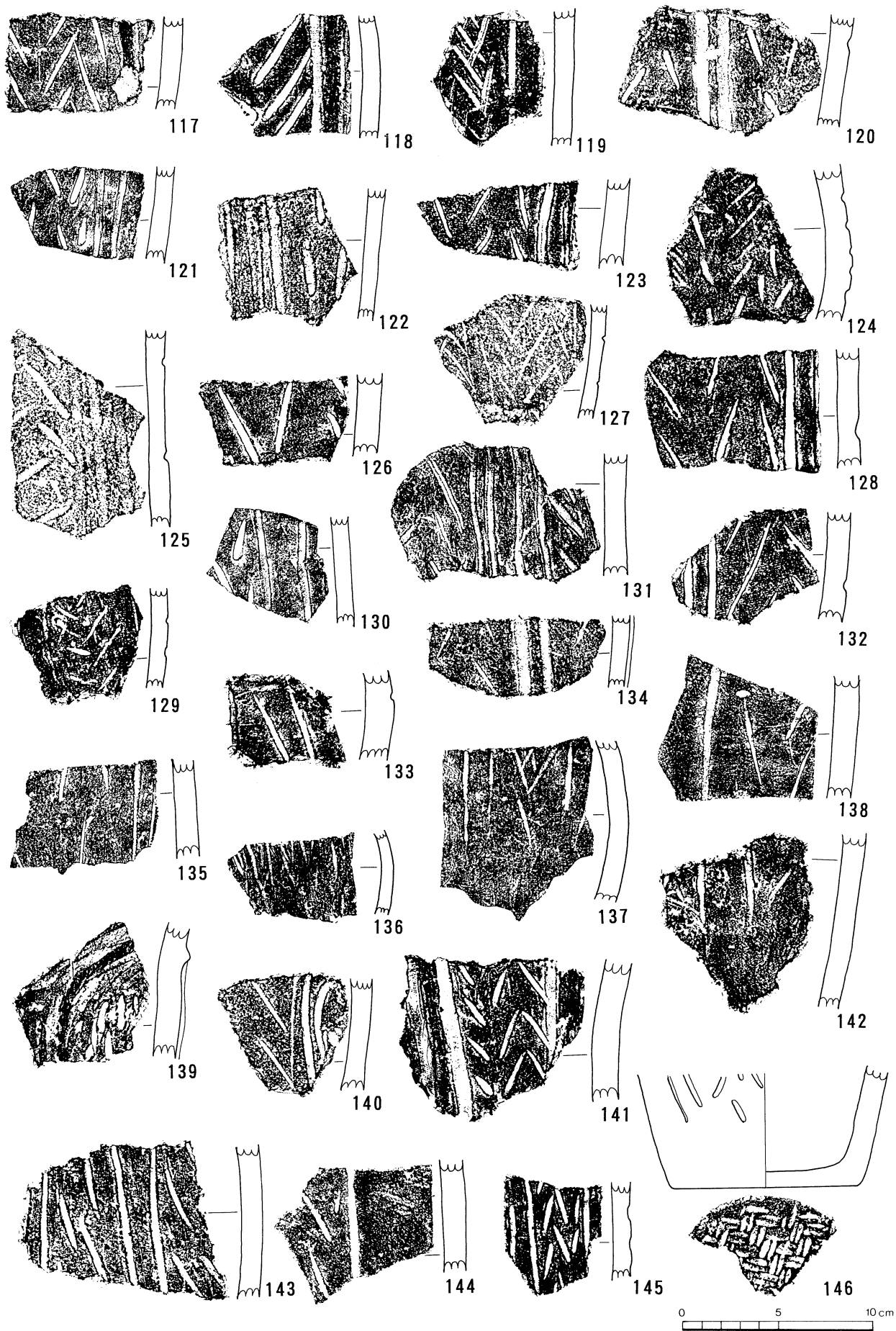
第25图 C区東土壤内出土土器 4



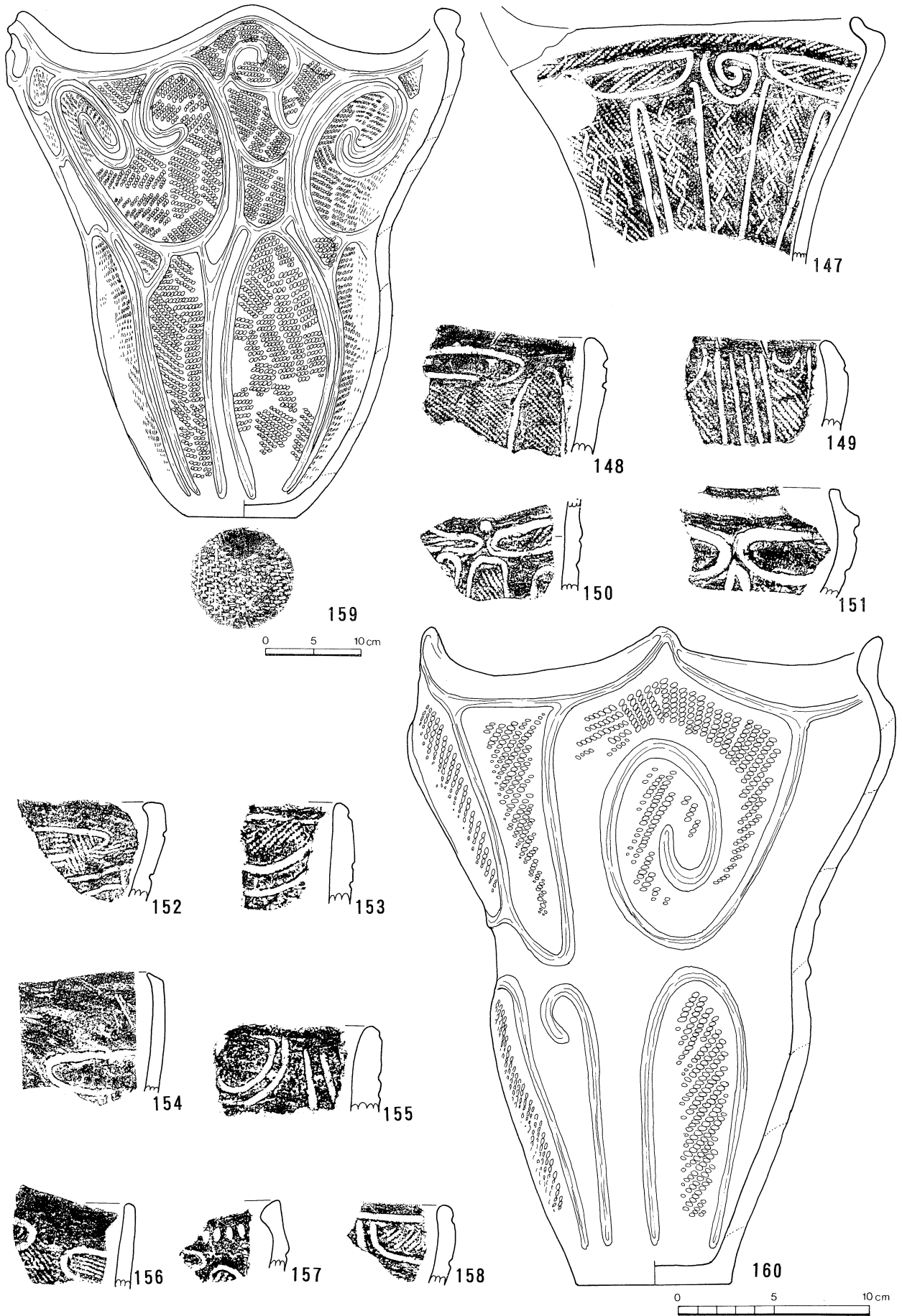
第26图 C区東出土土器 1



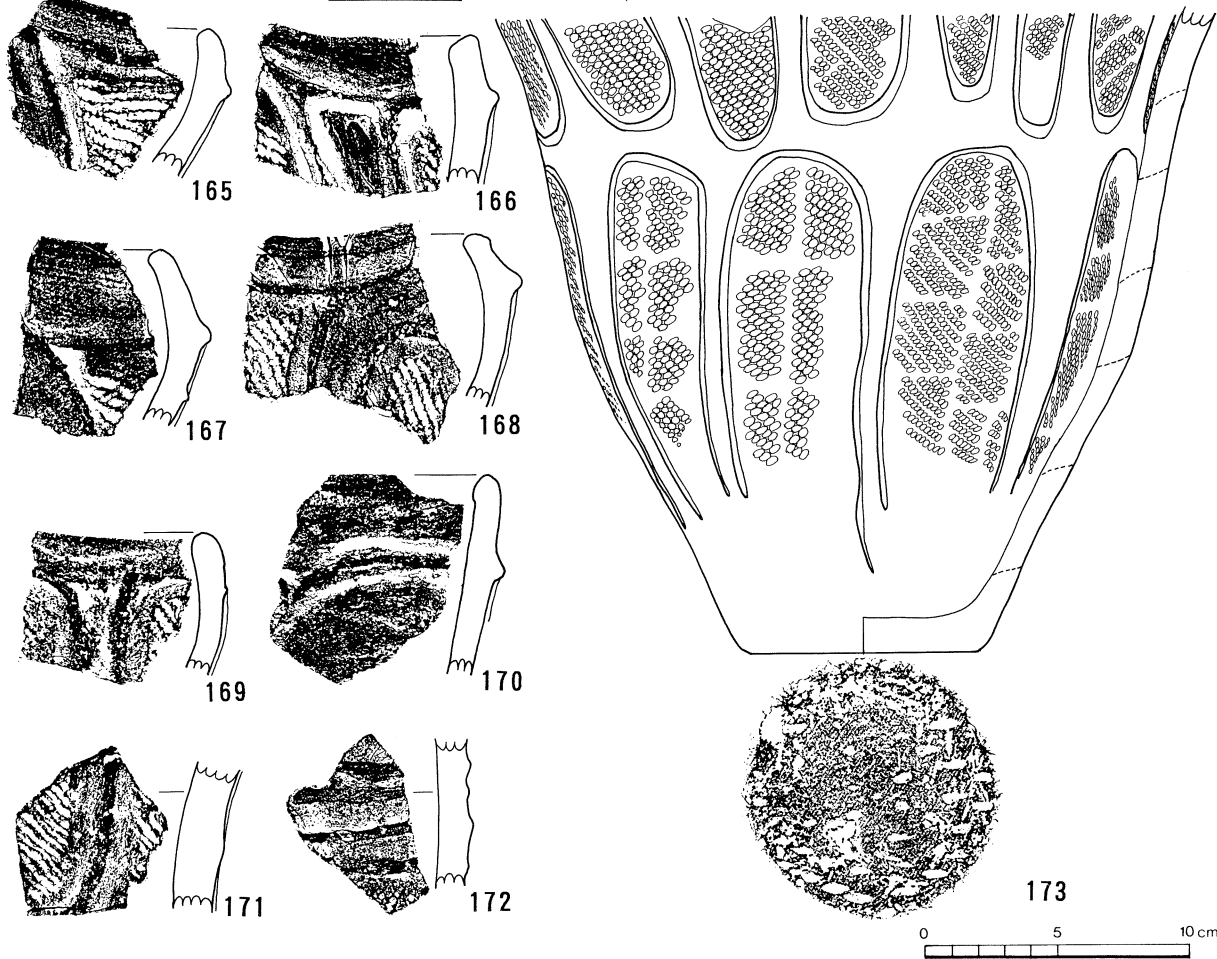
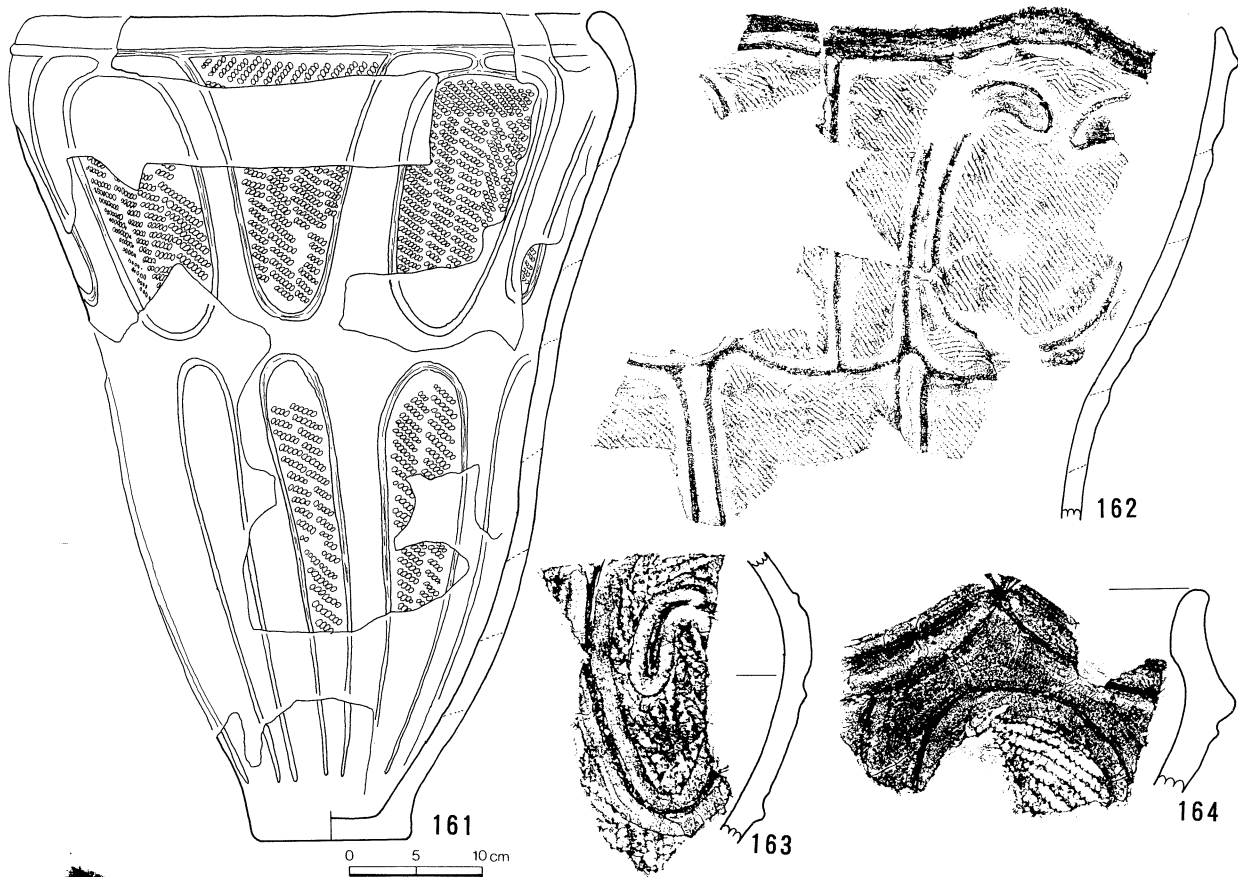
第27图 C区東出土土器2



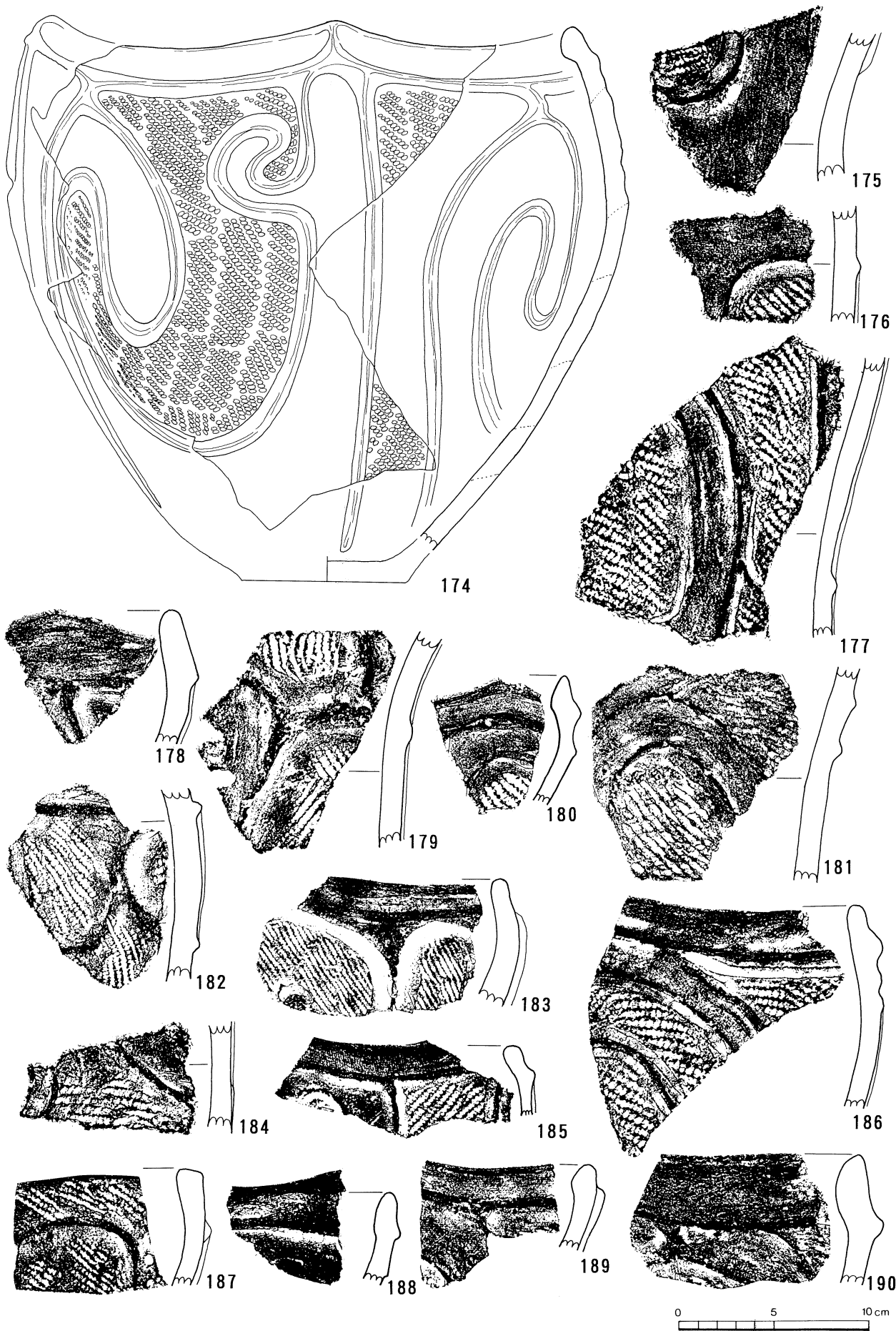
第28图 C区東出土土器 3



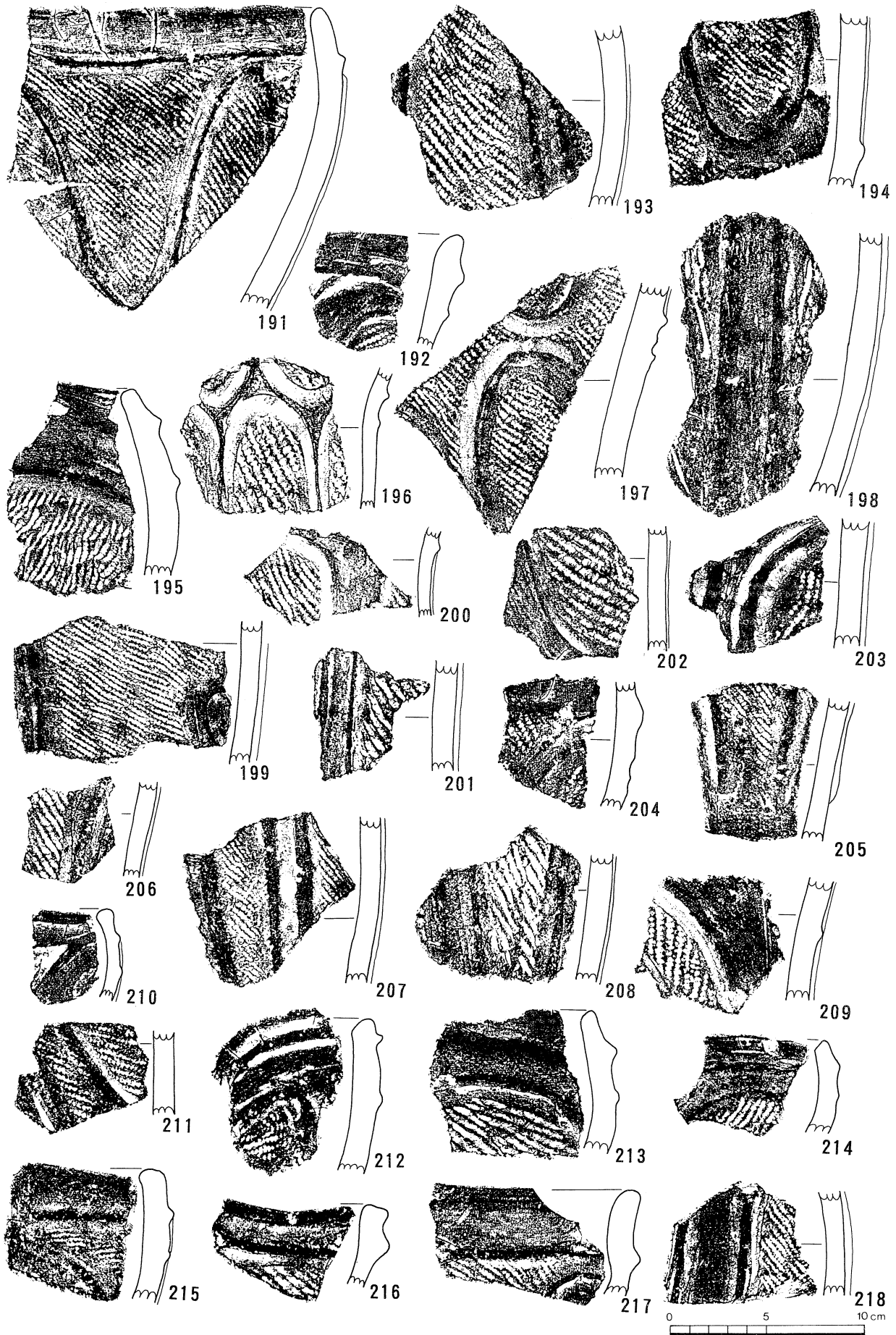
第29图 C区東出土土器 4



第30图 C区東出土土器5

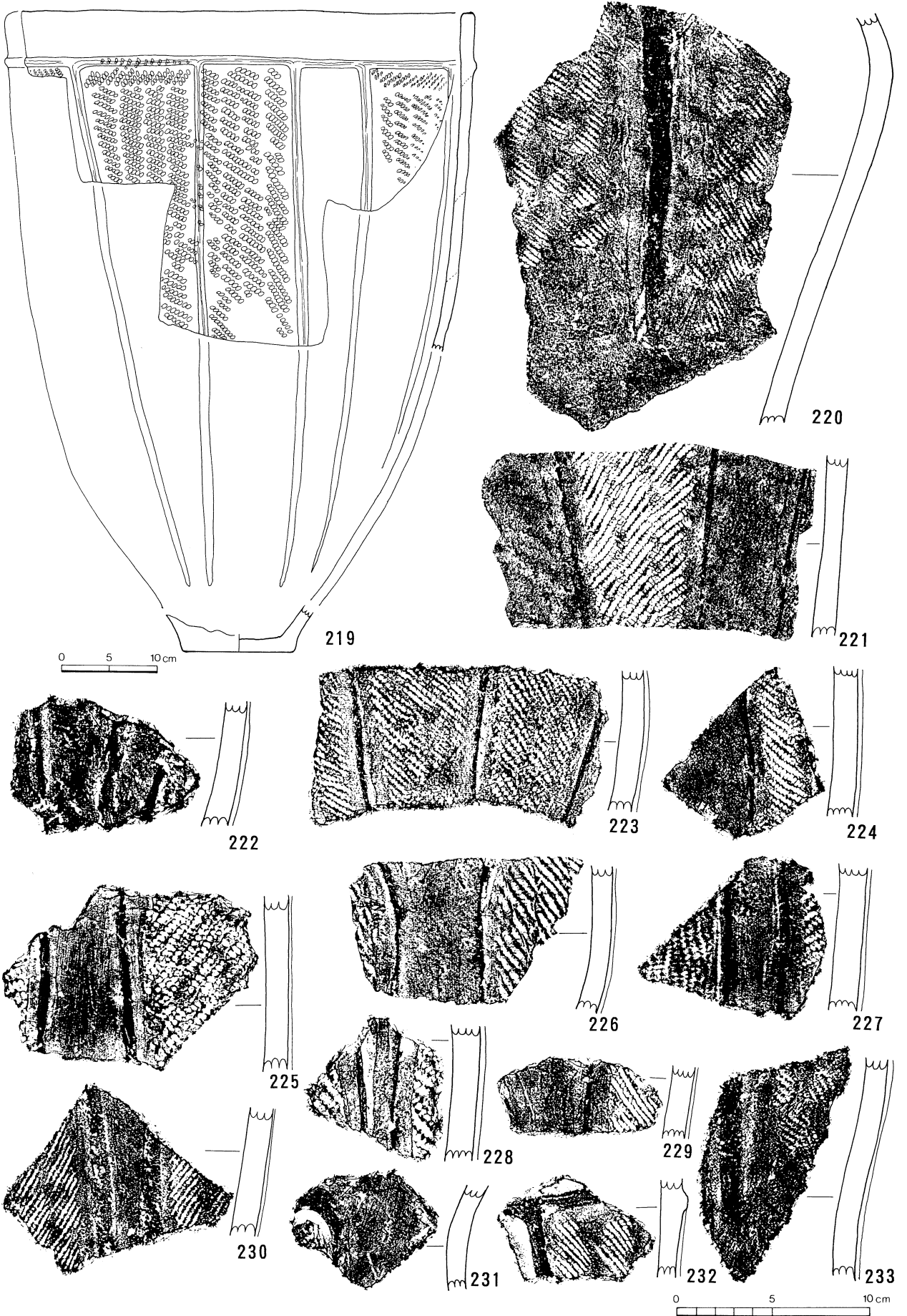


第31图 C区東出土土器6

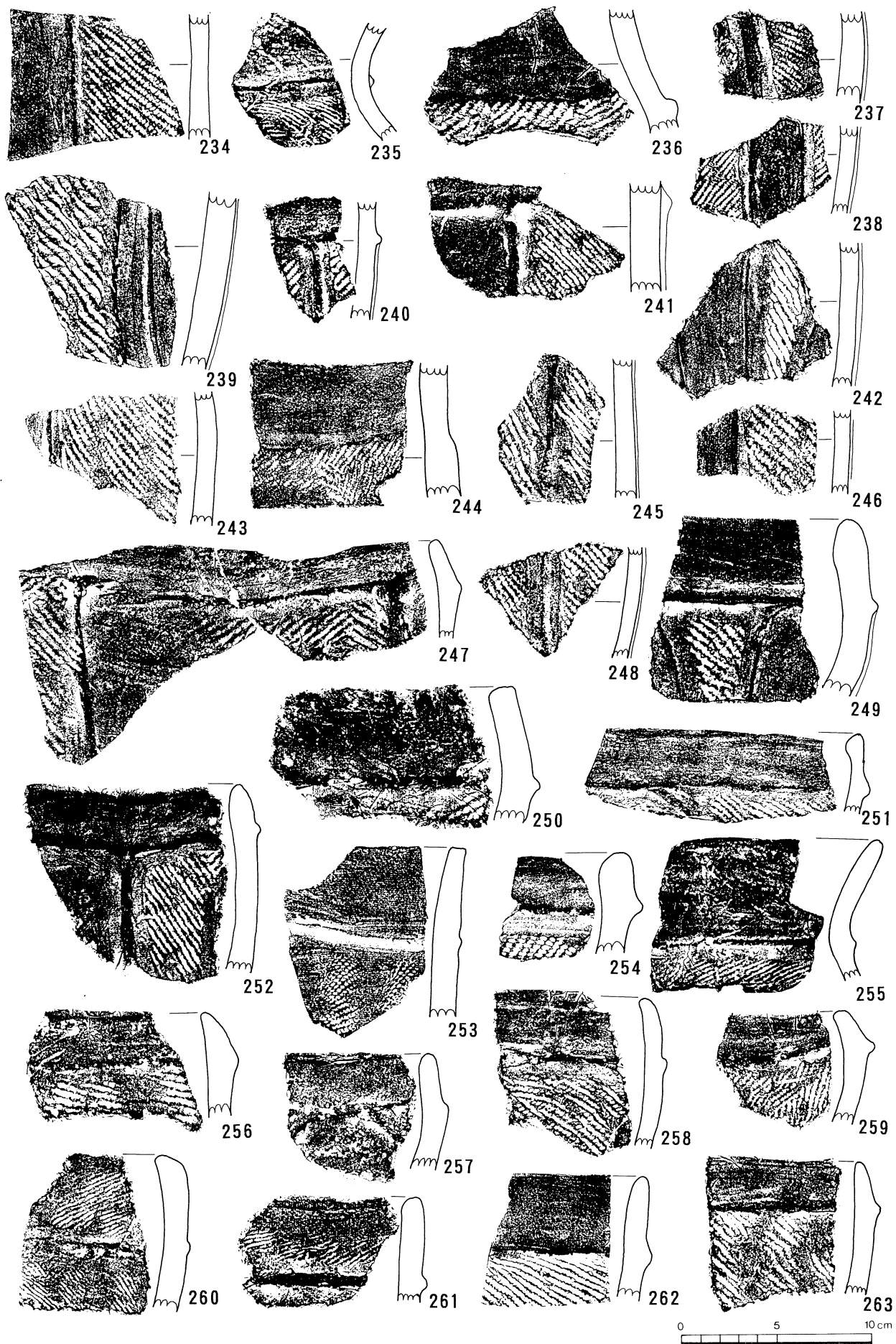


第32图 C区東出土土器 7

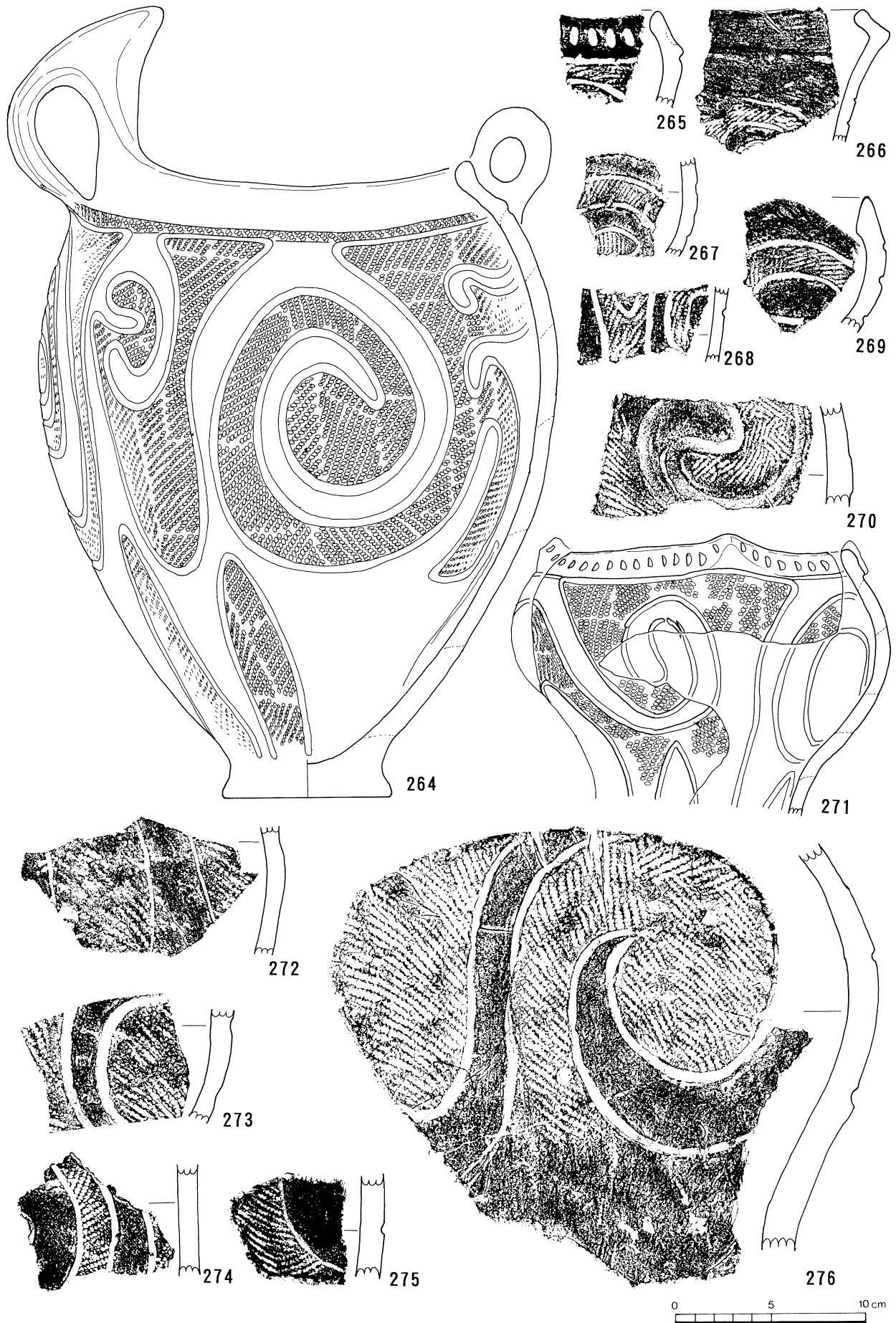




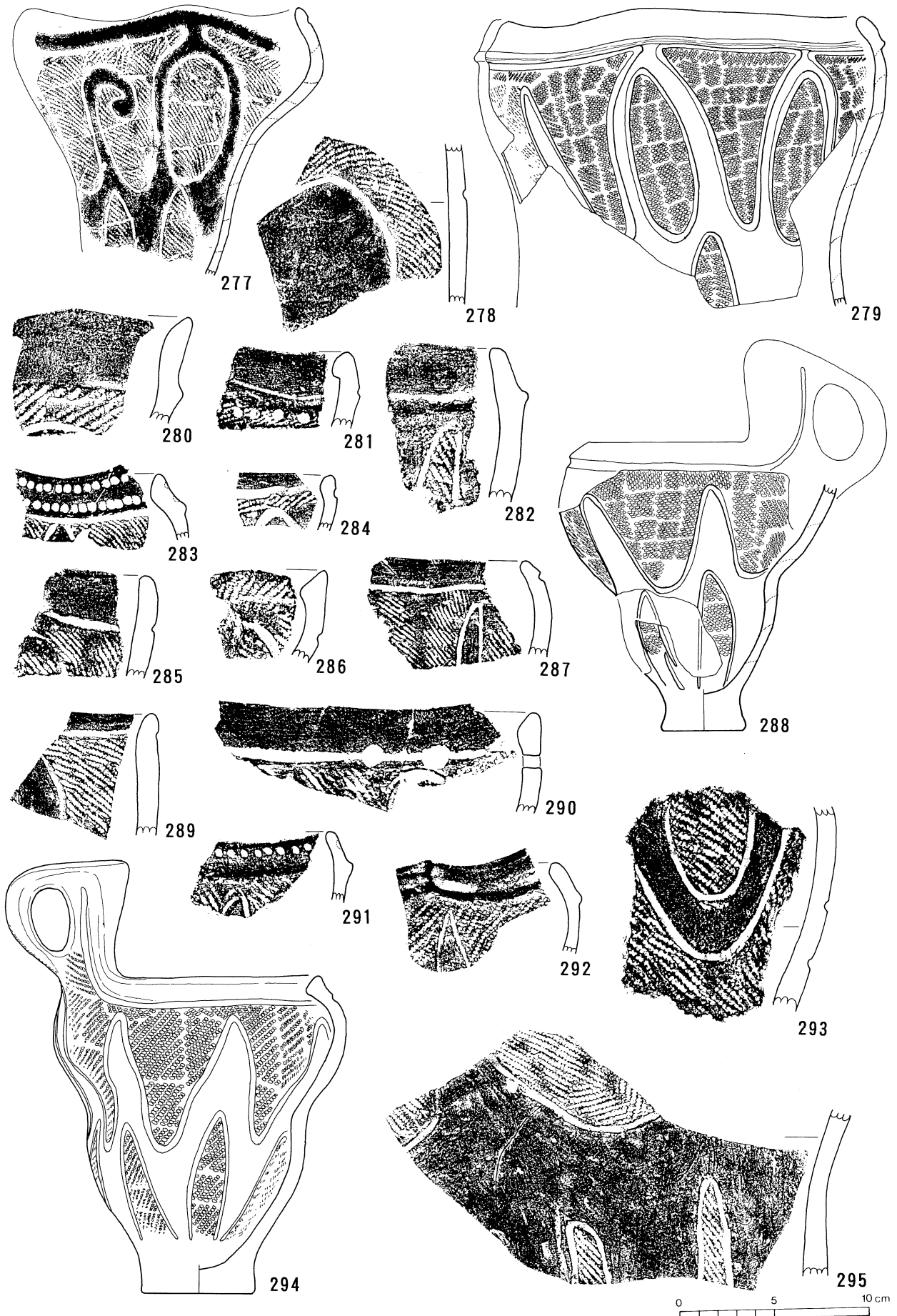
第33图 C区東出土土器8



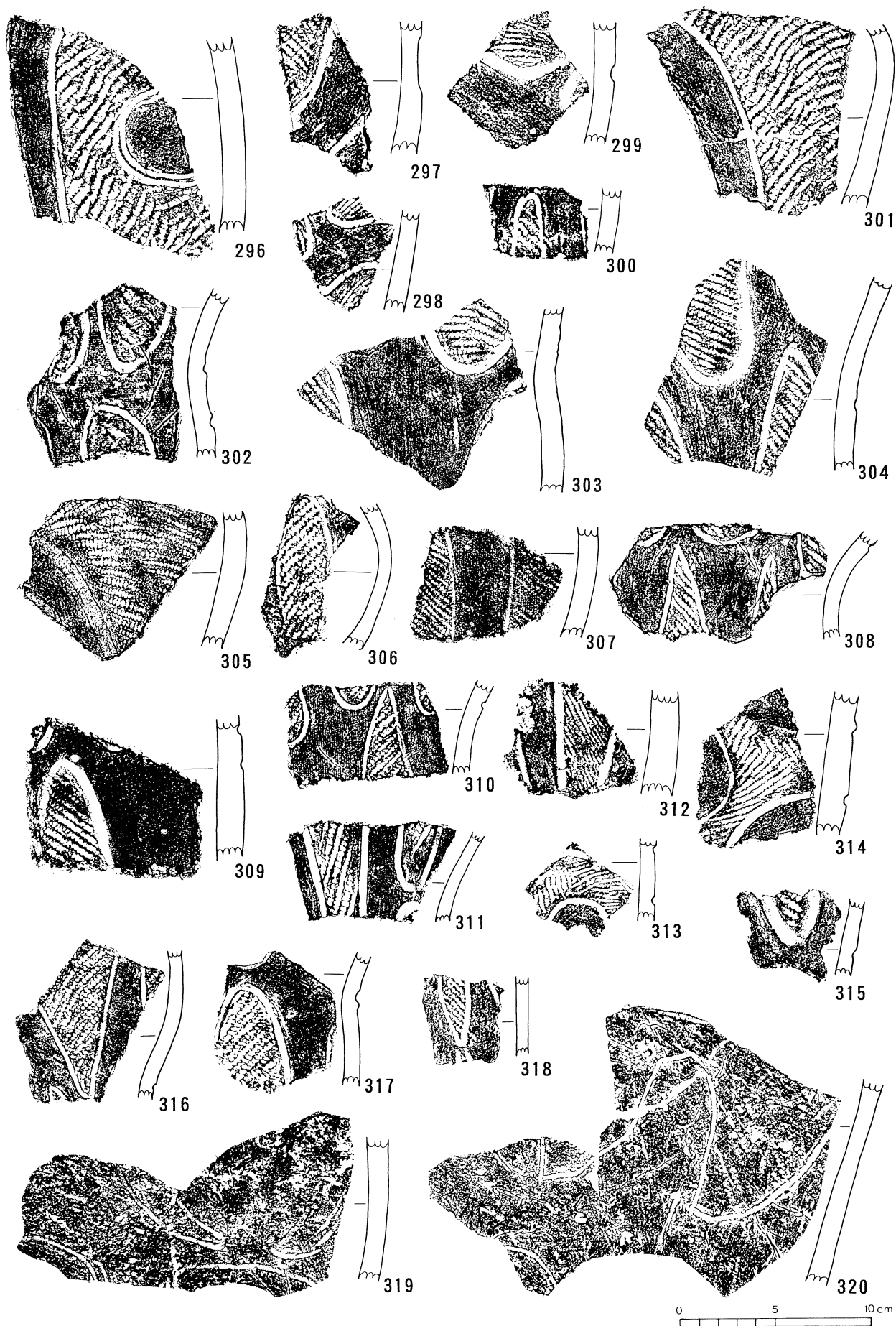
第34图 C区東出土土器9



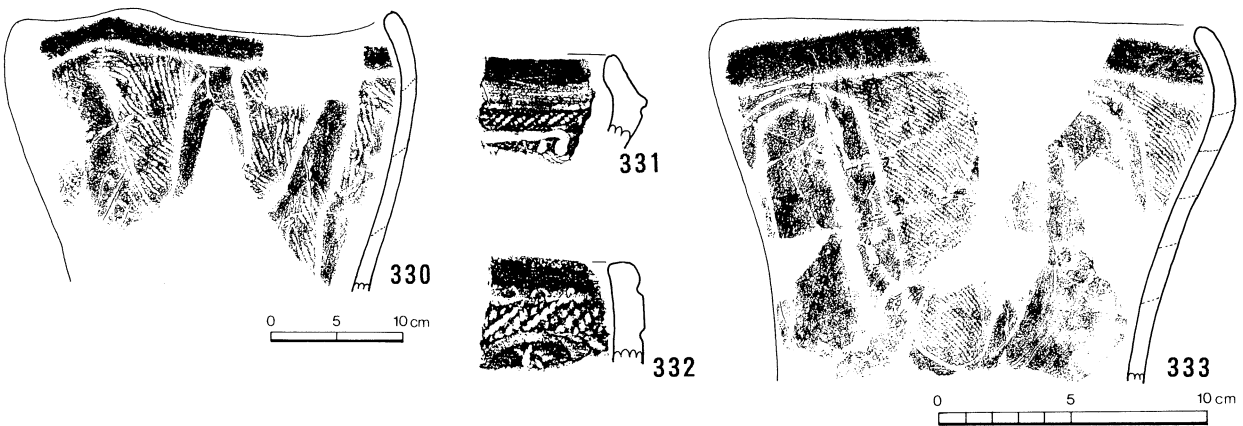
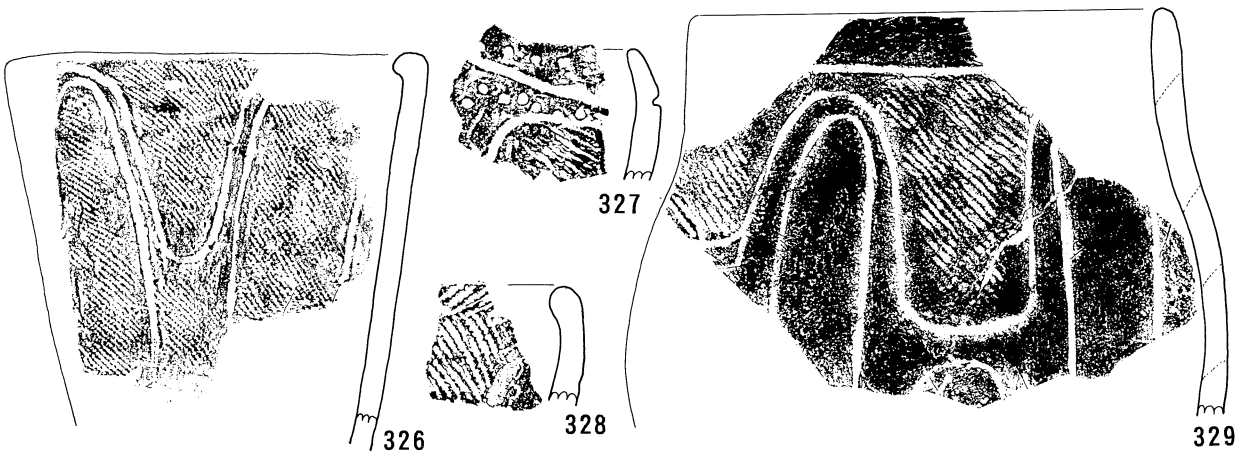
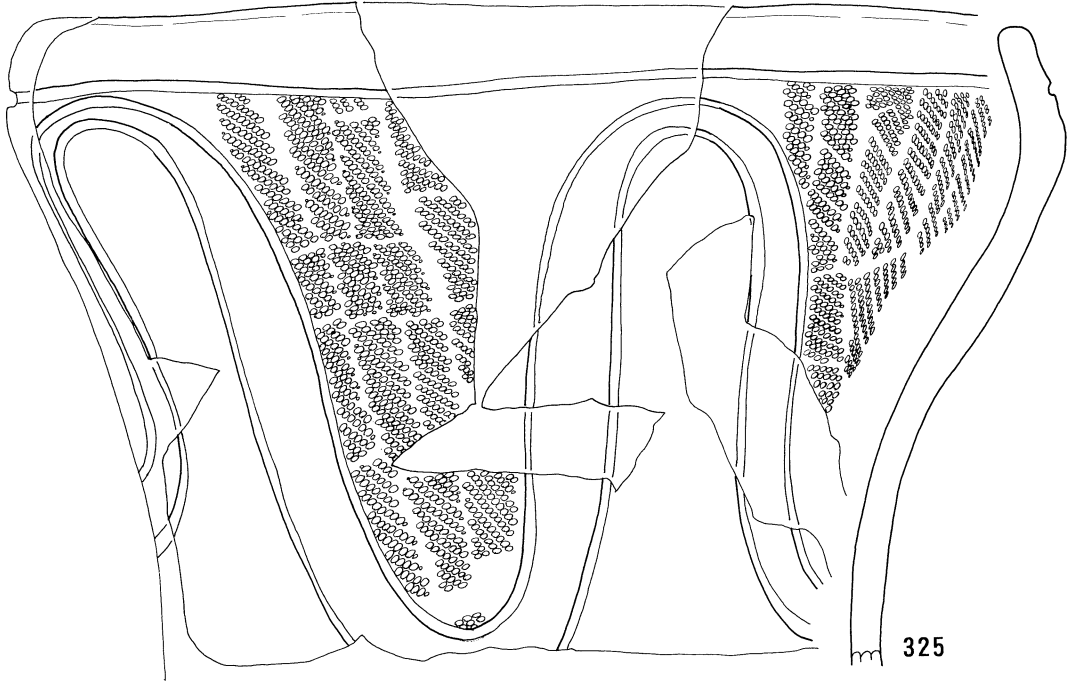
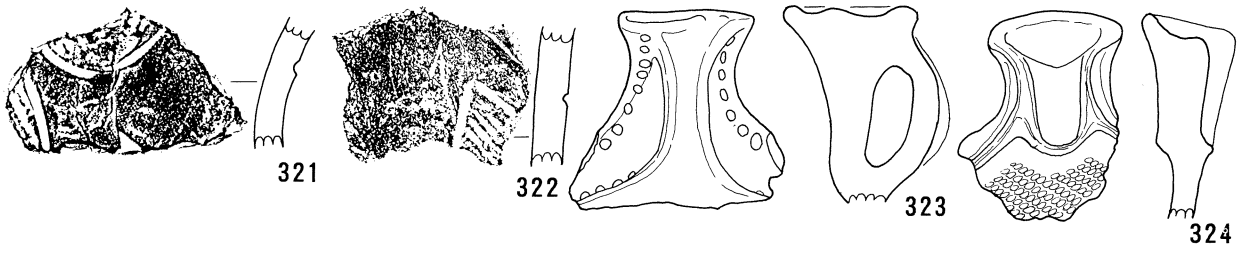
第35图 C区東出土土器10



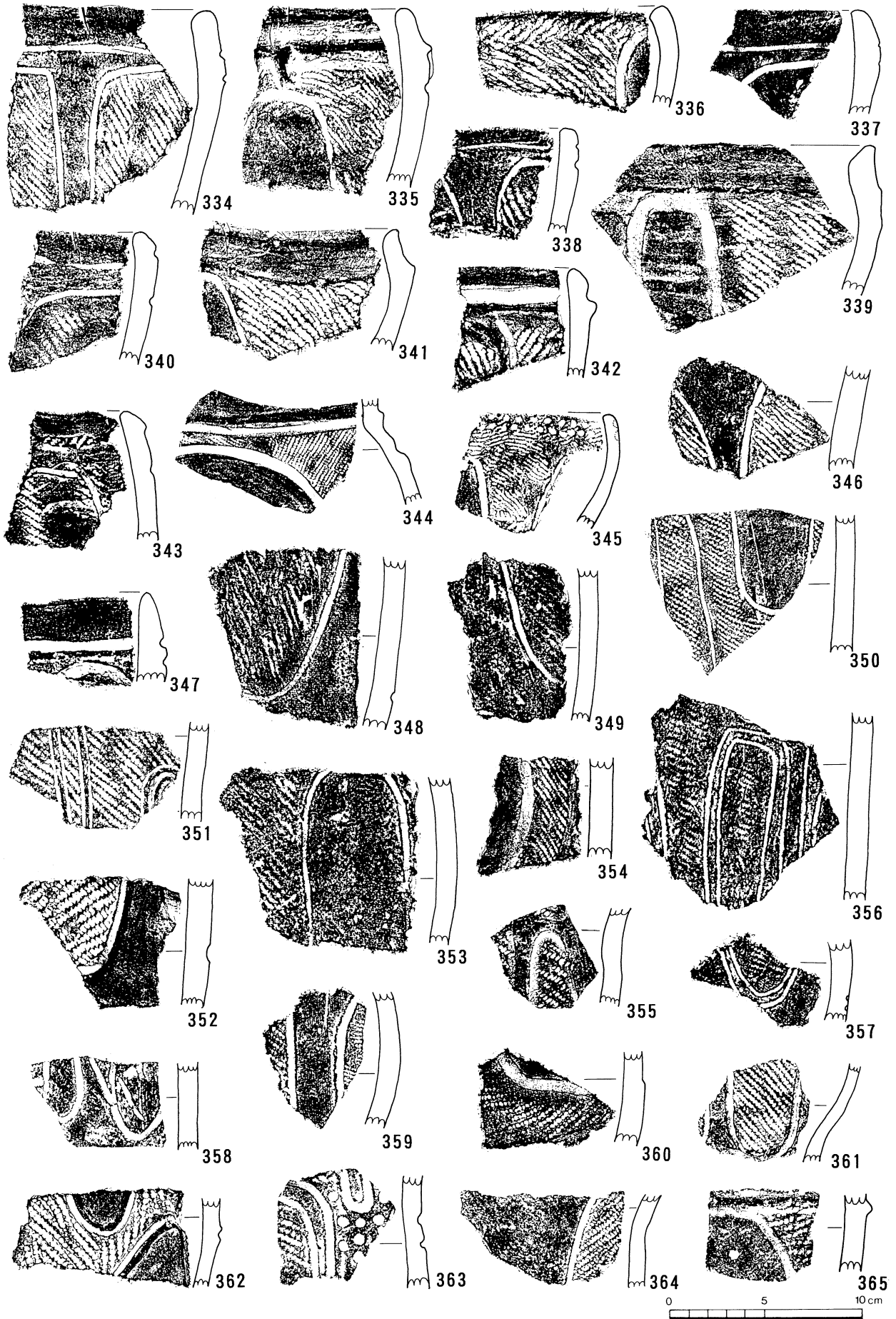
第36图 C区東出土土器11



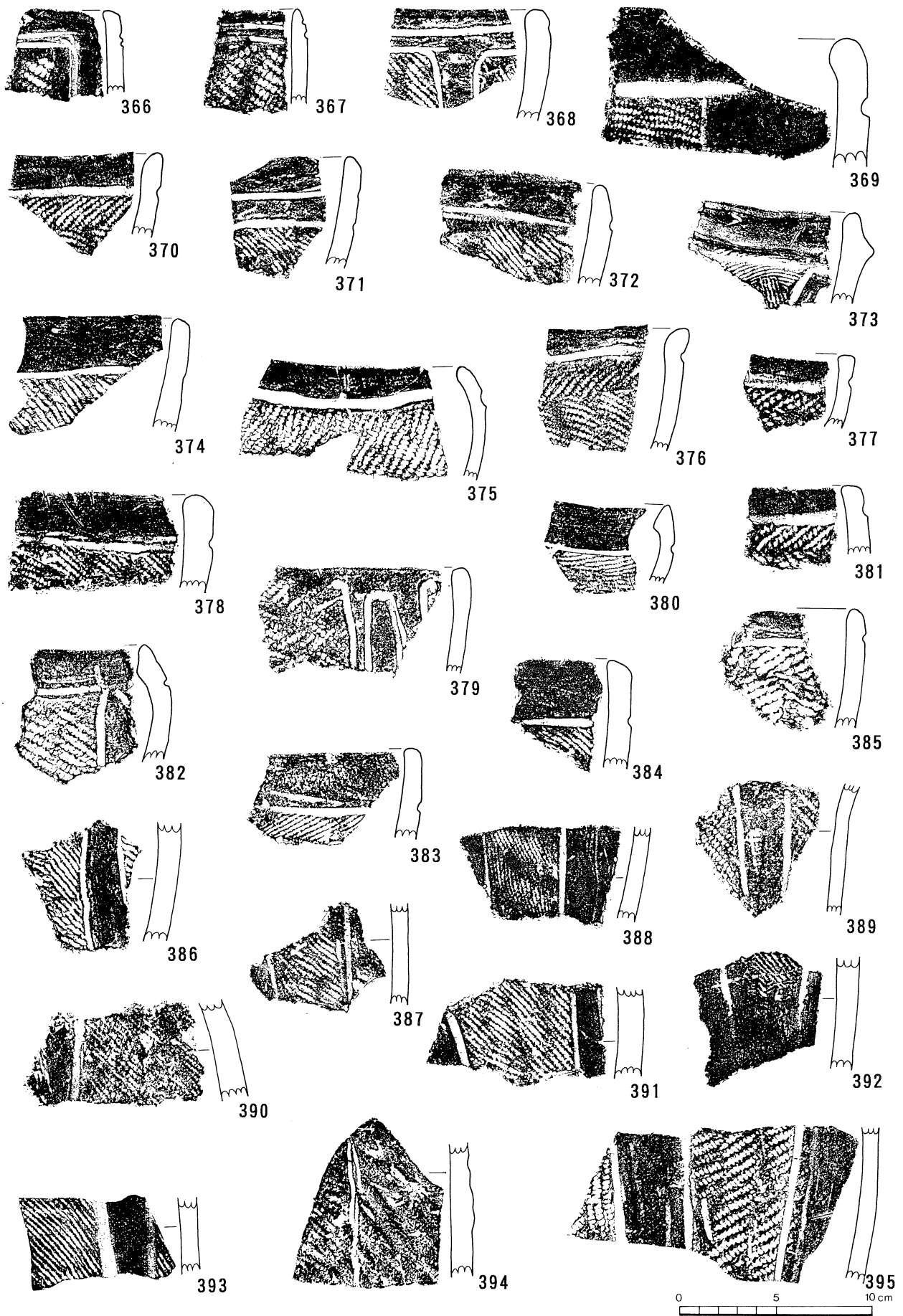
第37图 C区東出土土器12



第38图 C区東出土土器13

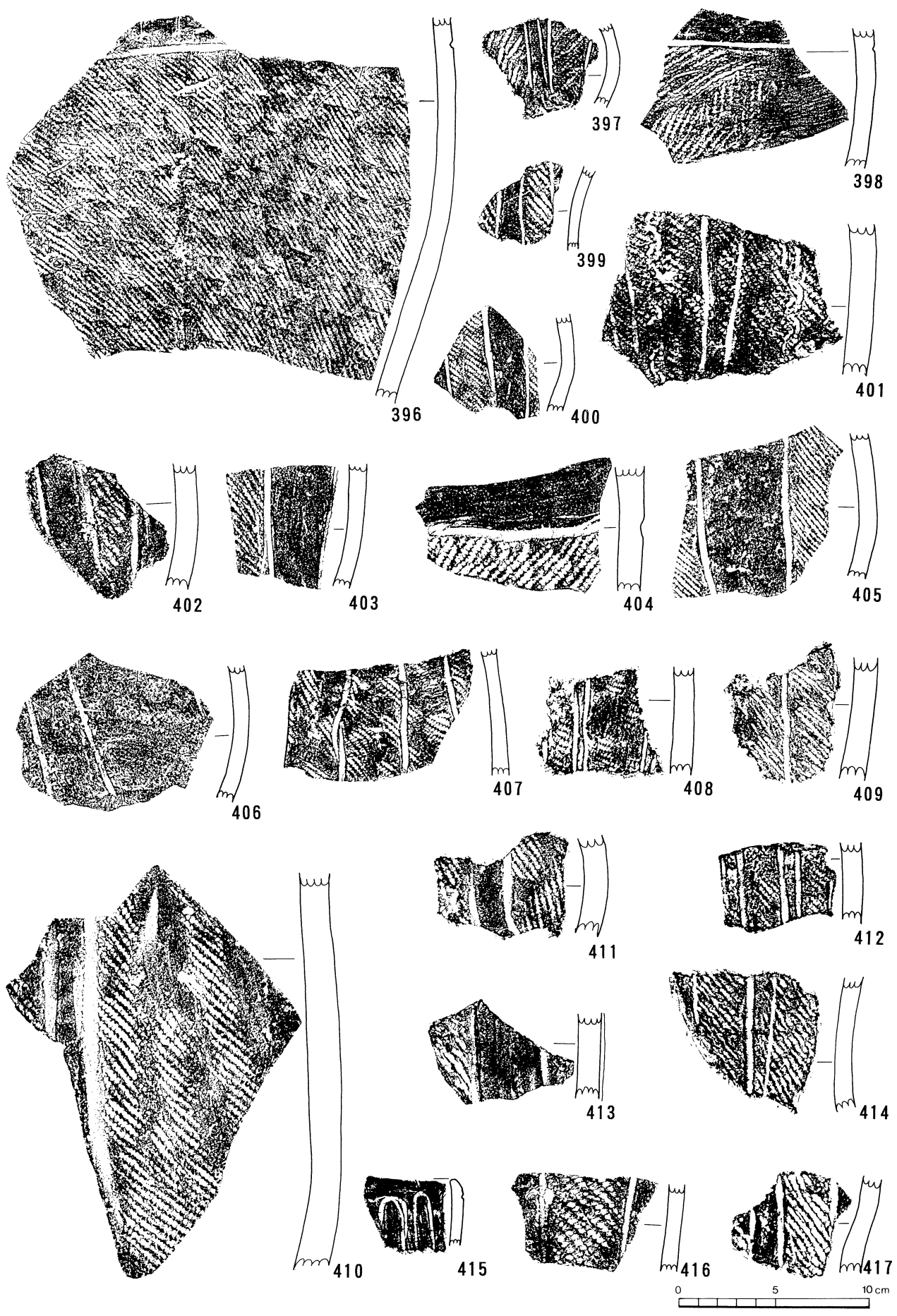


第39图 C区東出土土器14

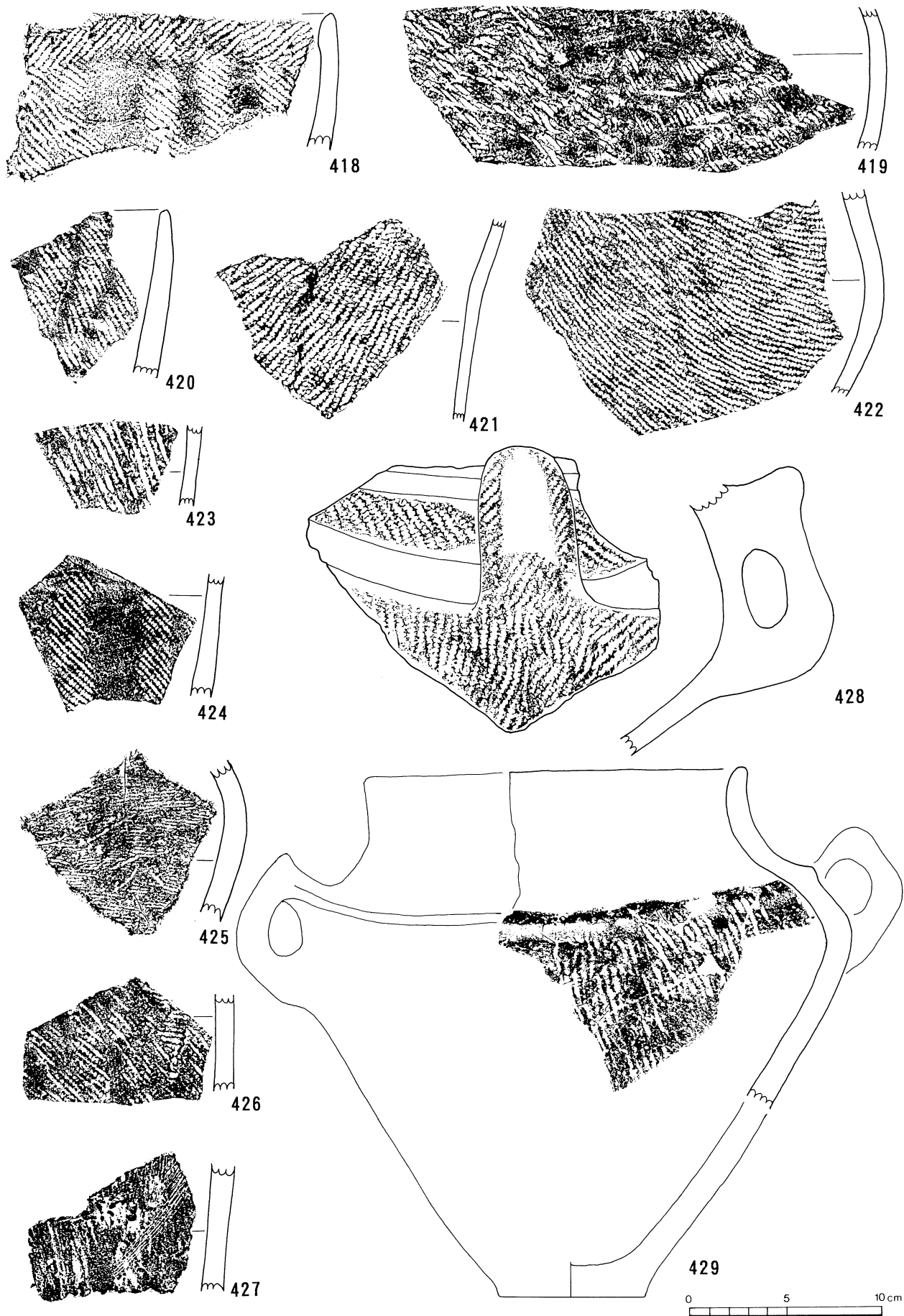


第40图 C区東出土土器15

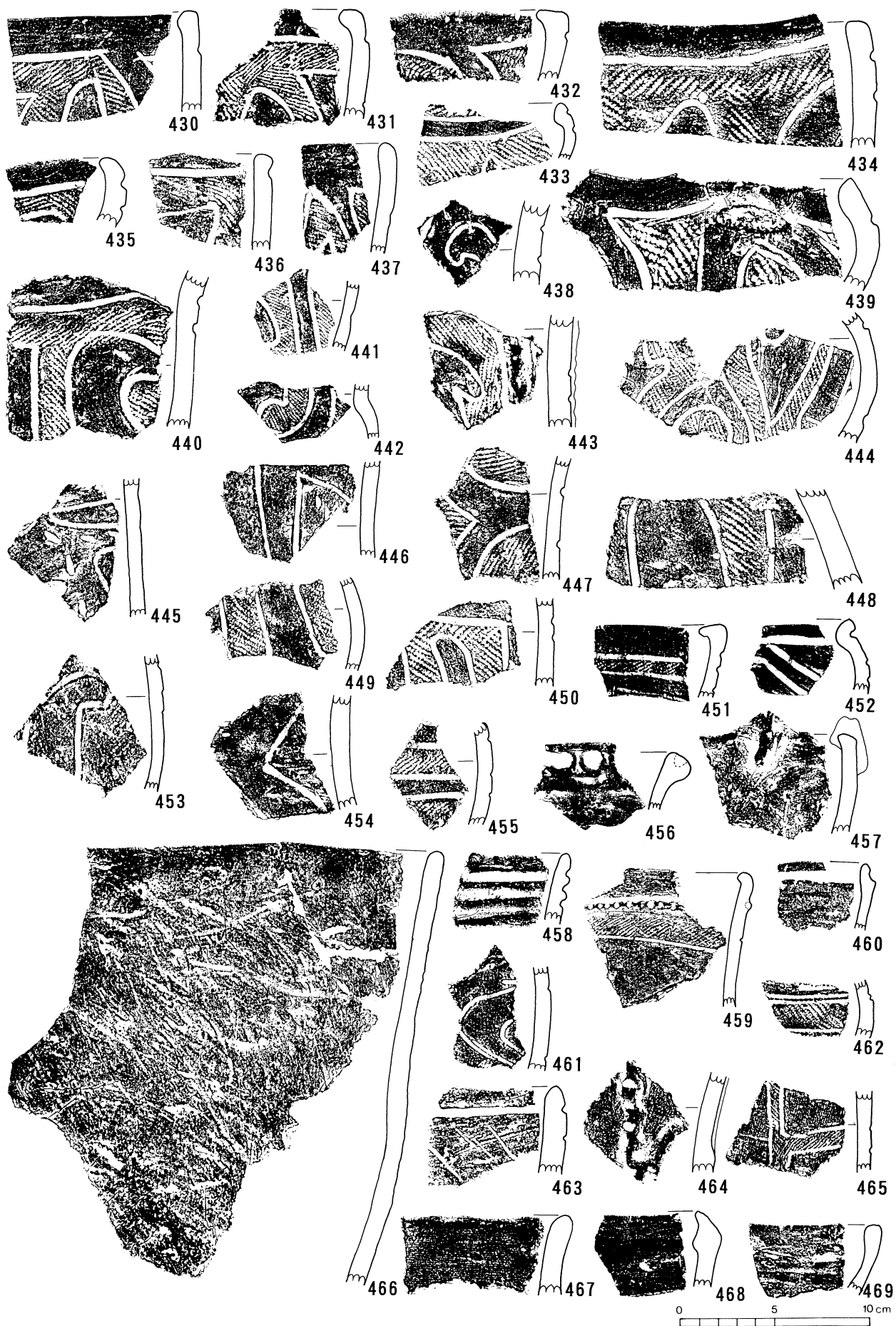




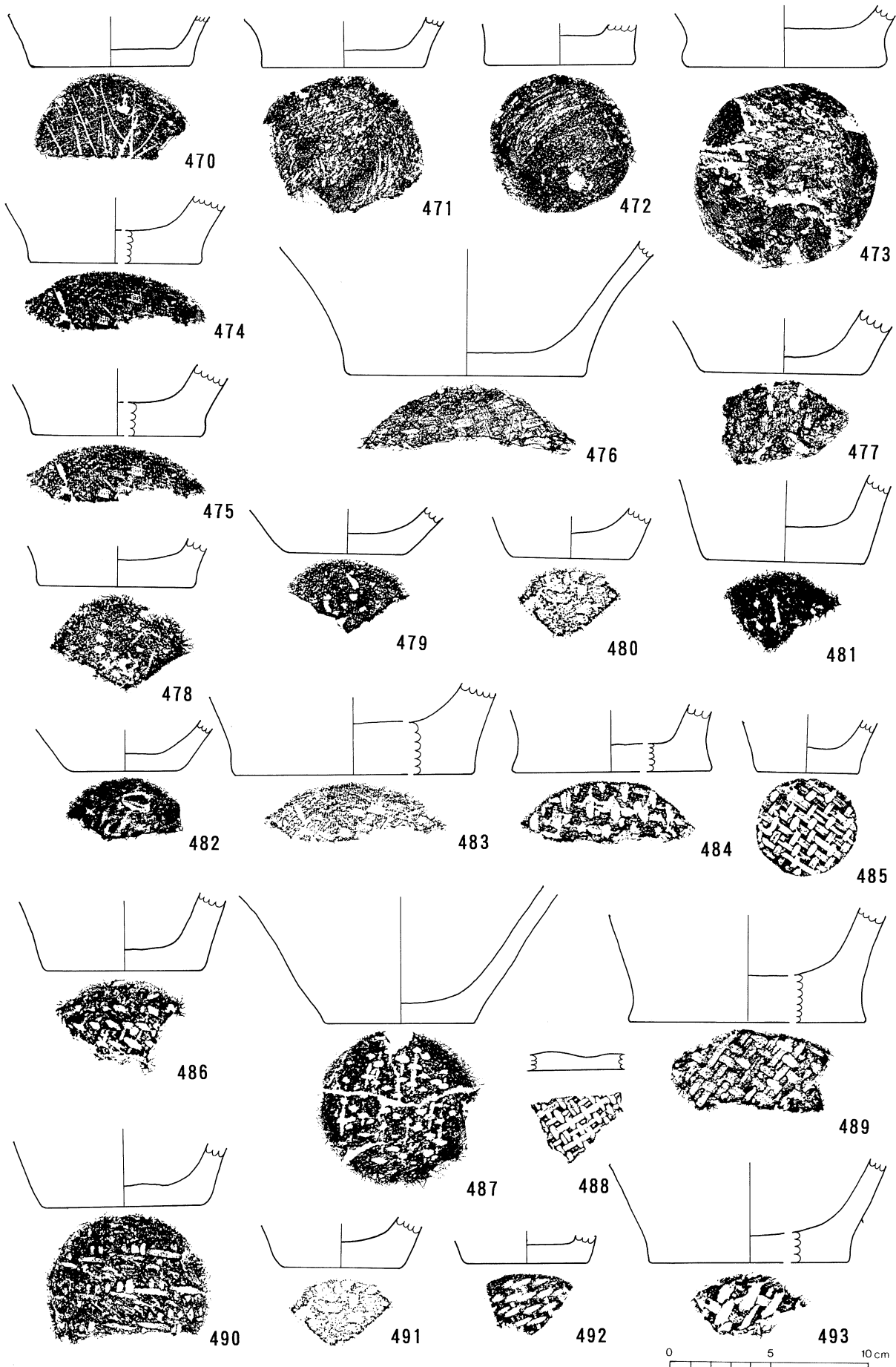
第41图 C区東出土土器16



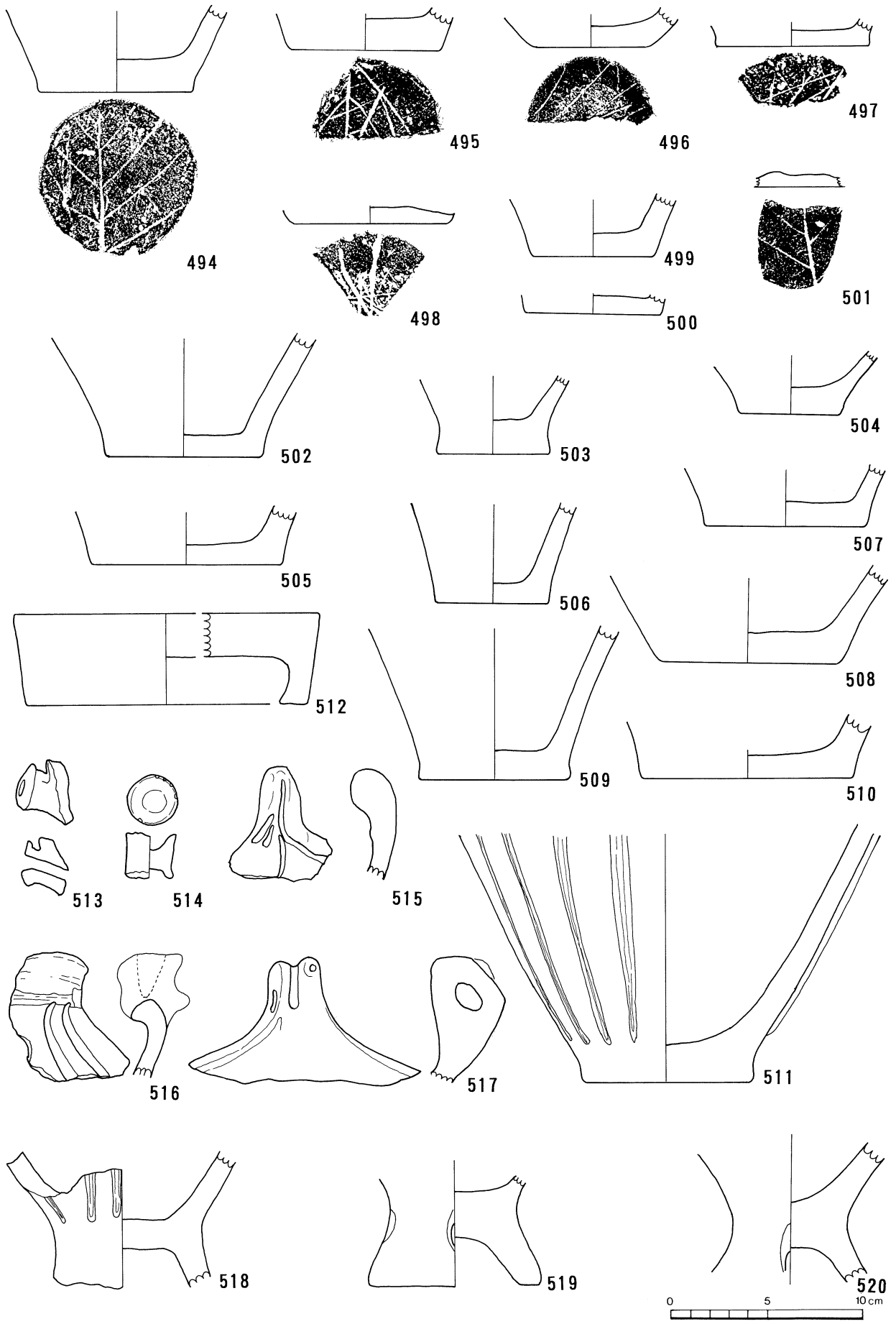
第42图 C区東出土土器17



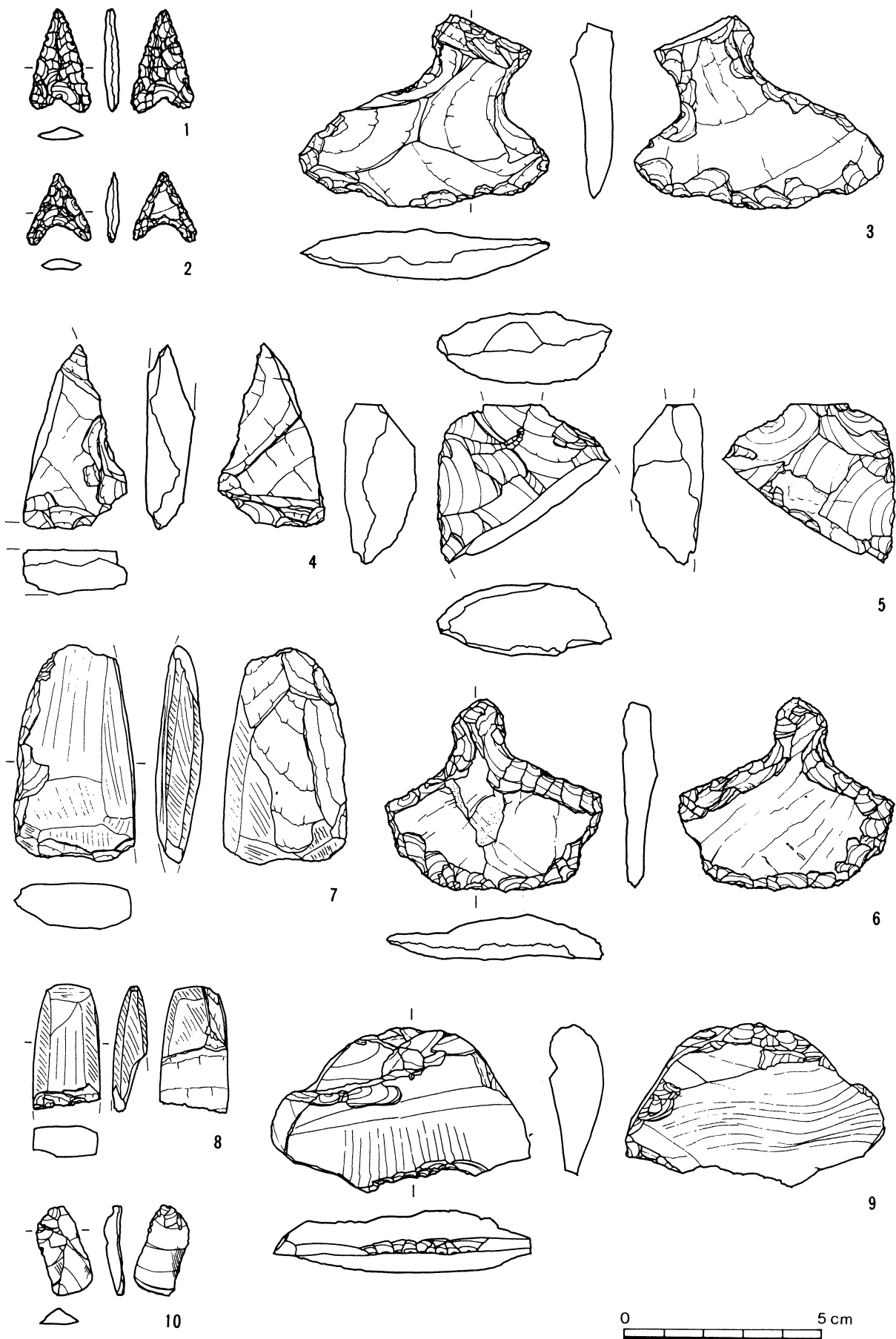
第43图 C区東出土土器18



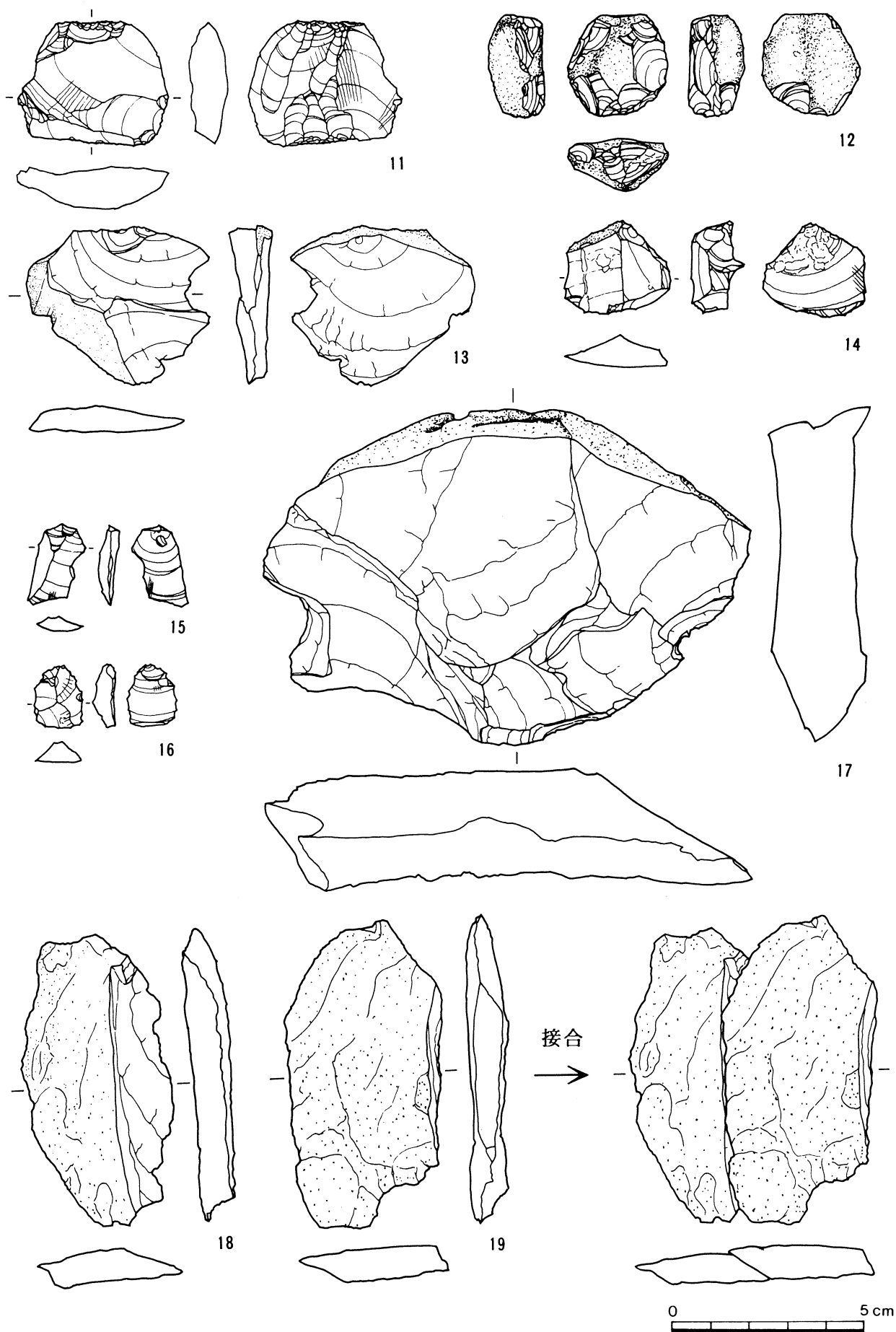
第44图 C区東出土土器19



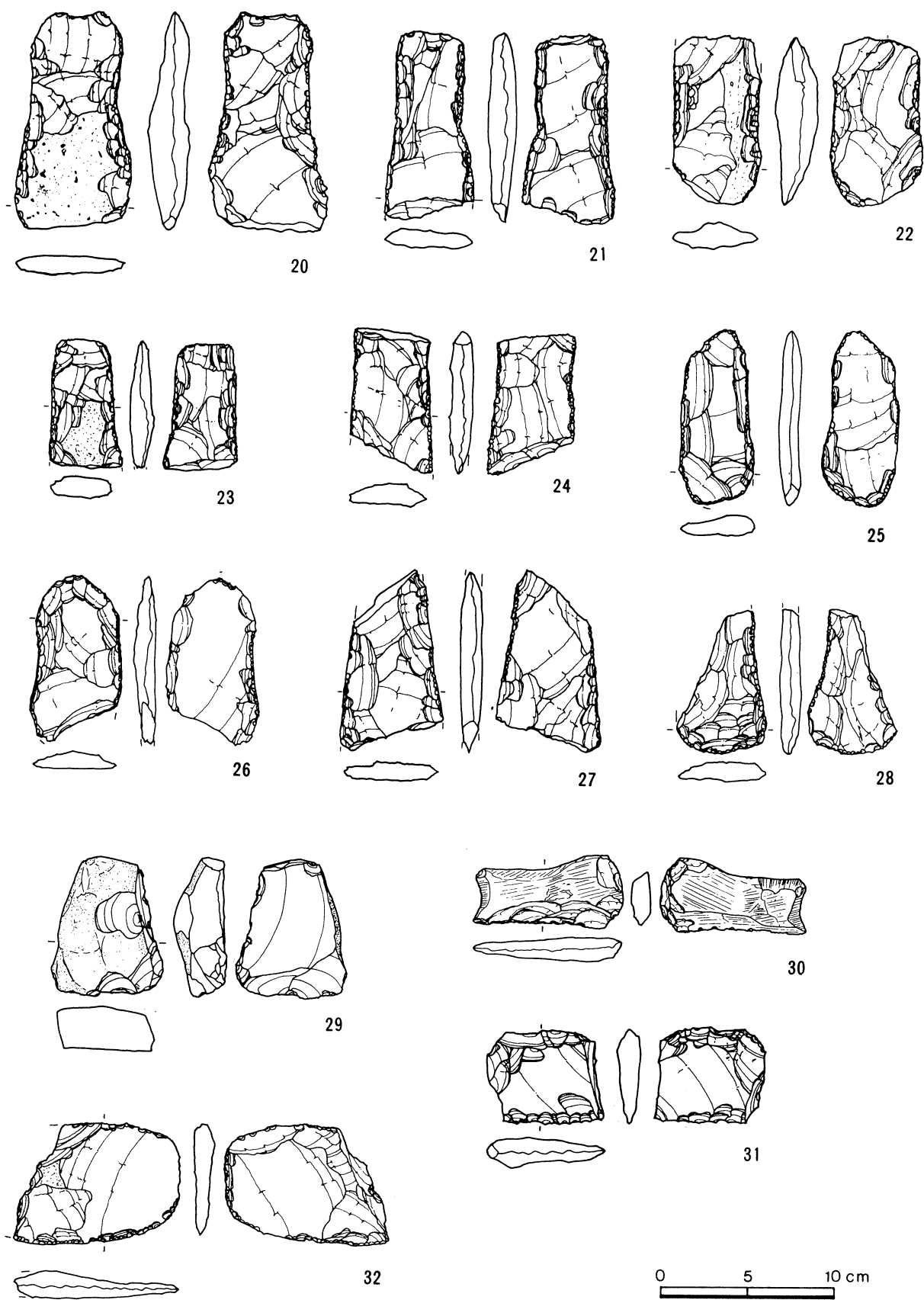
第45图 C区東出土土器20



第46图 C区東出土石器 1

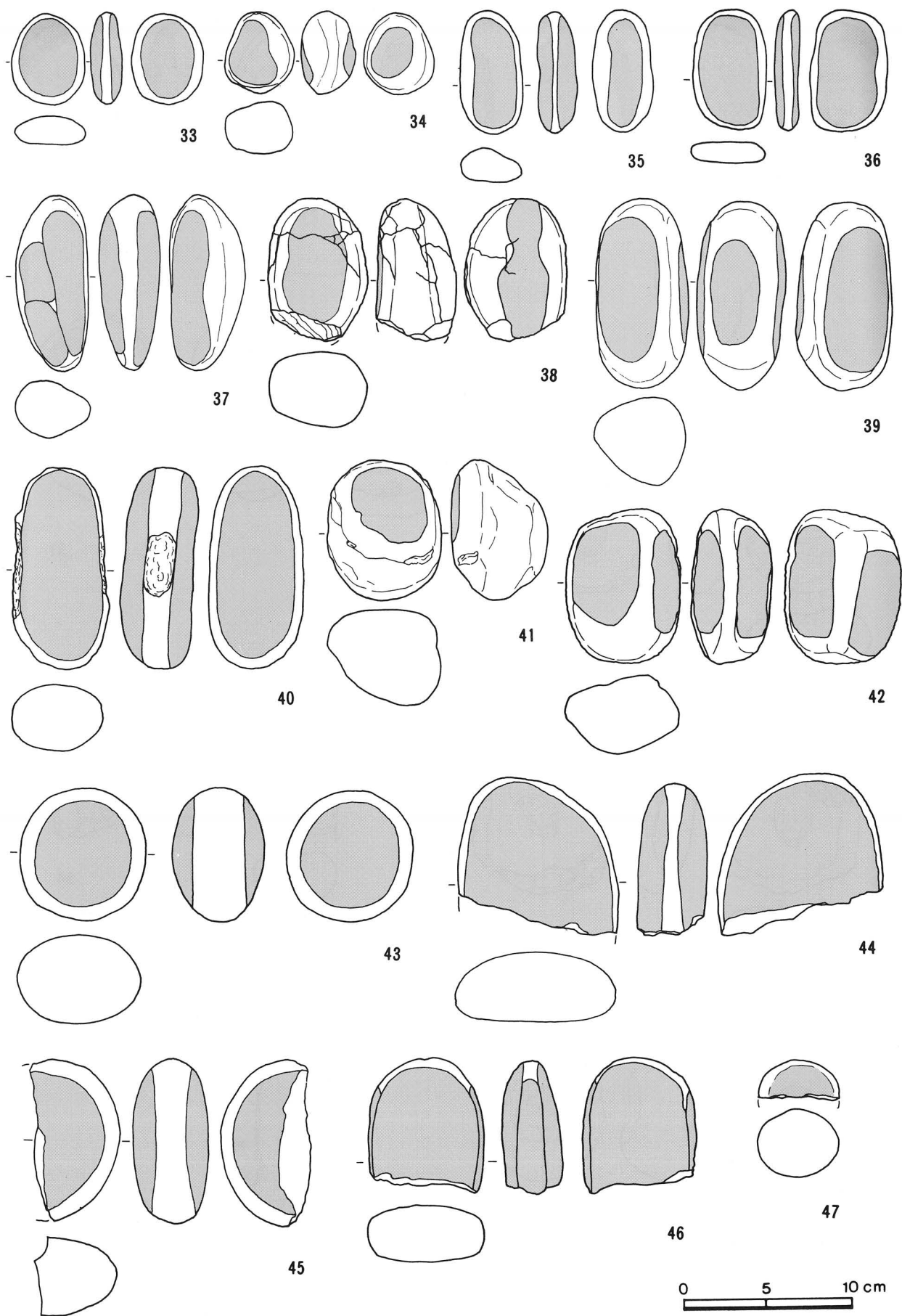


第47图 C区東出土石器2

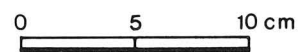
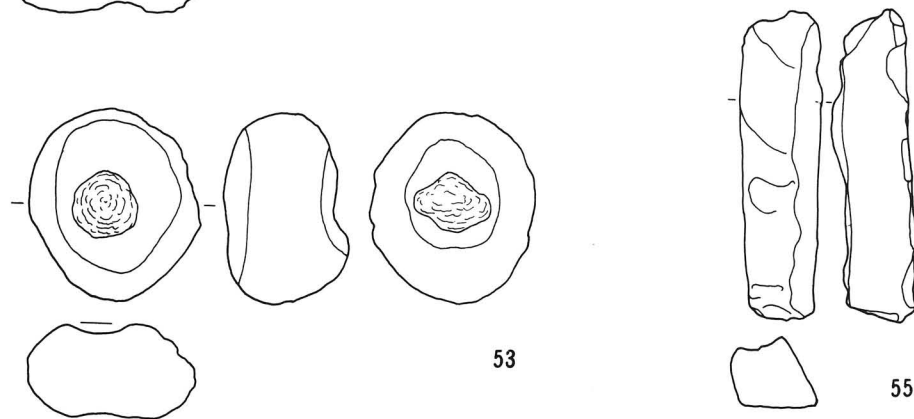
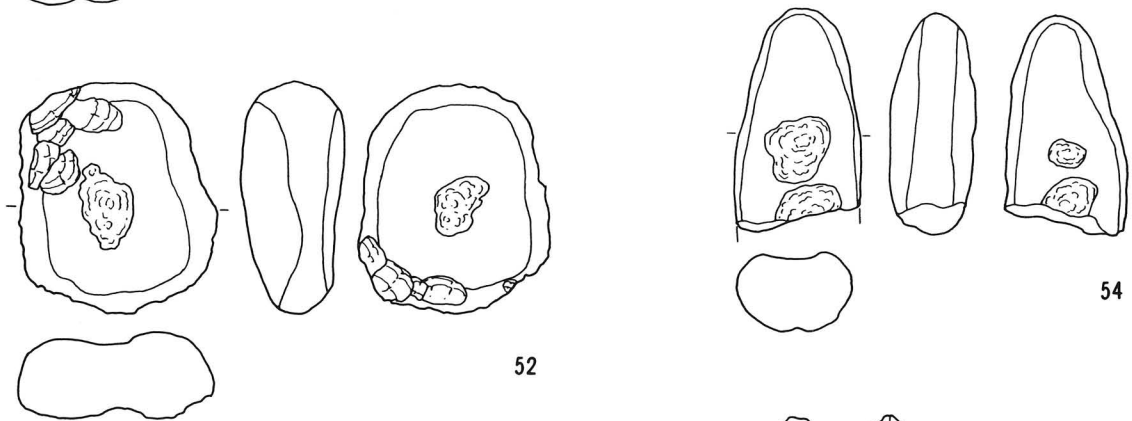
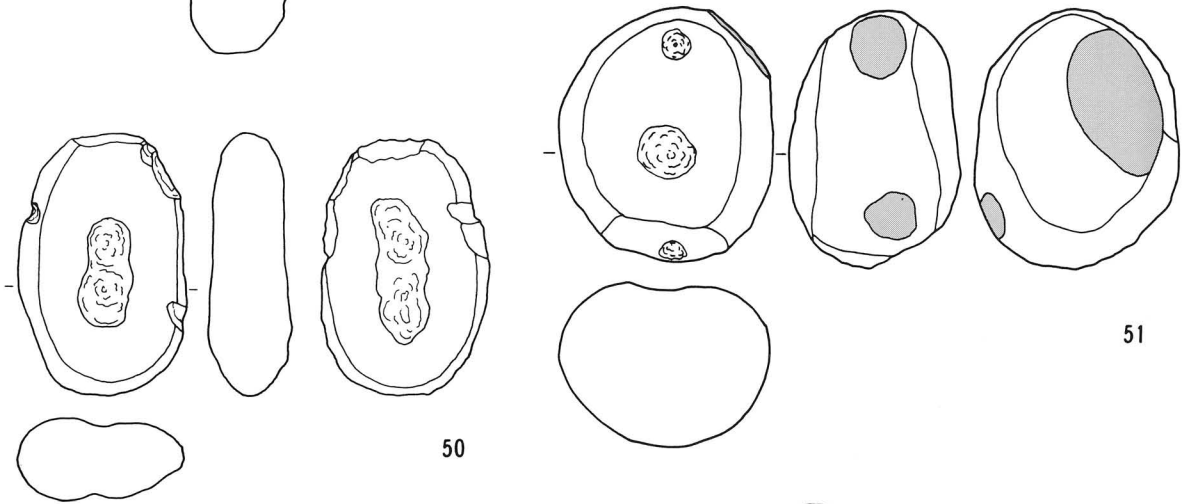
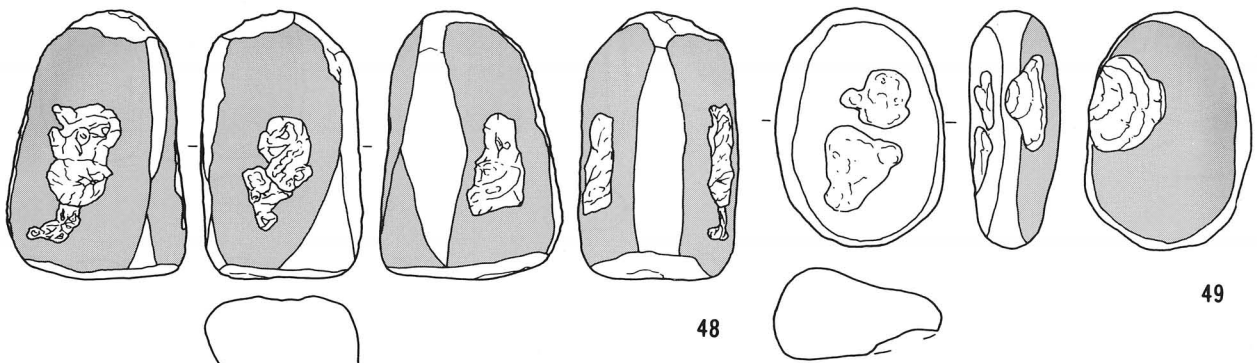


第48图 C区東出土石器3





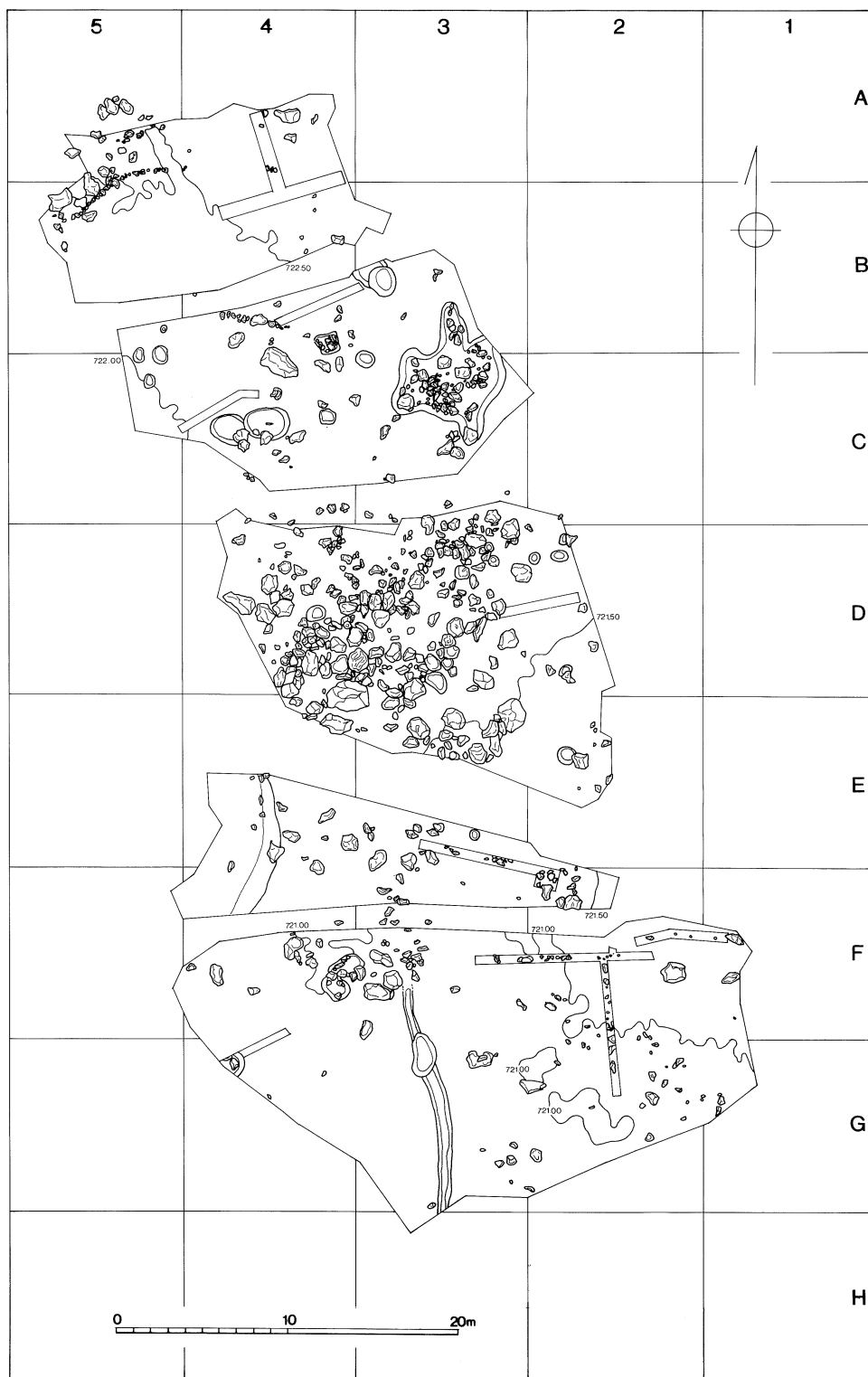
第49图 C区東出土石器 4



第50图 C区東出土石器5

## 4 D区の調査（第51図）

D区はB区とC区の間位置し、調査面積は1,180m<sup>2</sup>である。ほぼ北から南に傾斜する緩斜面上にある。調査区中央に径1～2mほどの礫が集中している。いくつかの竪穴状の落ち込みがあるようだが、詳細はわからない。



第51図 D区全体図

## 第4章 調査のまとめ

### 1 C区東地区出土の縄文時代中期終末土器について

1996年度の整理作業をすすめるなかで、比較的新しい段階の加曾利E式に近似した土器群が、山梨県地域のなかでも目立って多く出土していることがわかった。単純に土器片量で比較するならば、これらの土器群は曾利式土器の5倍以上の出土量である。曾利式も含め中期終末の土器群を簡単にまとめておきたい。

#### ●曾利式新段階

基本的に条線を地紋とした曾利式土器は出土量が比較的少ないが、終末段階の胴部に連続ハの字紋が施された土器が圧倒的に多い。第26図88、第27図110などは胴部に蛇行懸垂紋をもつ土器で、曾利IV式に含まれる可能性がある。他は口縁部紋様が沈線による弧線紋、あるいは横位に一条の沈線を巡らすもので多くが曾利V式に位置づけられる(第27図)。同図92のように胴部の連続ハの字紋が比較的密にしっかりと施紋されるものと、93のように疎らなものが混在し、若干の時間差があるものと思われる。

#### ●加曾利E式系(1)：口縁部紋様帯を有する土器群

縄文地紋の土器群のなかでは、口縁部に渦巻紋と楕円紋がある第29図147がより古い段階(曾利IV式併行)のものと思われる。胴部に結節縄紋が施され、曾利式後半のなかでも比較的古段階に多いとされる胴部蛇行懸垂紋との紋様の共通性を指摘できよう。この結節縄紋について近隣に類例を求めると、甲府盆地北西の敷島町金の尾遺跡23号住居出土土器(第52図1)<sup>11)</sup>がある。縄文地紋の土器としては大泉村姥神遺跡12号住居出土土器(第52図2)<sup>12)</sup>などが併行すると考えられる。

さらに、第29図148～158のように楕円紋や弧線紋が認められるものがある。曾利式においては、渦巻紋と楕円紋それに弧線紋の組み合わせから、前二者が時間的変化とともに欠落していく傾向が認められ<sup>13)</sup>、これらの土器についても同様の時間差が想定できるかもしれない。北巨摩地域では柳坪遺跡4区礫層出土土器、高根町次郎構遺跡SK22出土土器(第52図3)<sup>14)</sup>、高根町川又坂上遺跡第2地区1号住居出土土器(第52図4)<sup>15)</sup>、韮崎市新田遺跡C-6G出土土器(第52図5)<sup>16)</sup>など、北巨摩では比較的類例が多い。これらは曾利V式のなかでも古い段階に併行するのではなからうか。

#### ●加曾利E式系(2)：口縁部紋様帯をもたない土器群

器形は胴部中央が括れ、下半にやや膨らみをもつものが多いようであるが、第24図45、第35図264などは胴部中央やや上部に最大径をもつ特徴的な器形で、やや安定感に欠ける形状である。また第23図30は基本的には加曾利EⅢ式後半から同IV式にみられる対向U字紋をモチーフにしながらも、各紋様構成には混乱した様相さえ感じられる。第23図43のように胴部に垂下する平行沈線間の幅が比較的狭いものは

より古い段階が予想される。

稲村晃嗣氏は加曾利E式新段階の紋様構成について、対向U字交錯文類型・渦文逆U字交錯文類型・併行垂下文類型の3タイプの存在を指摘しているが<sup>17)</sup>、小屋敷遺跡の資料も概ねこれらの類型に対応させることが可能であろう。

対向U字交錯文類型に相当するのは、第23図24・30、第30図161・173、第36図277・279・288・294、第38図325・326・329・330・333などで、北巨摩地域では韮崎市宮ノ前遺跡1号単独埋甕(第52図6)に近例があるが、須玉町郷蔵地遺跡1号住居出土土器(第52図7・8)のようなタイプの土器は明確なものが認められない。

渦文逆U字交錯文類型に相当するのは、第29図160、第35図264・271・276があり、第31図174の鉢も器形上の制約で下半の逆U字紋が省略されたものであろう。北巨摩地域では宮ノ前遺跡3号単独埋甕(第52図9)がある。第29図159の胴部全面に隆帯紋が施された土器は藤巻幸男氏らの編年<sup>18)</sup>に従えば胴部隆帯紋土器VI期に位置づけられる。北巨摩地域では須玉町川又南遺跡14号埋甕(第52図10)<sup>19)</sup>に類例がある。

併行垂下文類型に相当するのは、明らかなものは第33図219のみだが、破片資料は比較的多い。また第24図45は「併行垂下」とまではいえないがこれらのバリエーションだろうか。北巨摩地域では宮ノ前遺跡2号単独埋甕(第52図11)がある。これらの他に第24図50のように縄紋地紋のみのものはやはり宮ノ前遺跡2号単独埋甕(第52図12)に類例がある。

小屋敷遺跡の加曾利E式系土器群は、概ね口縁部紋様帯を喪失した段階の資料としてとくに量的に纏まることが特徴である。これらは鈴木保彦氏の編年<sup>20)</sup>に従えば、第4様式a段階から、より古い部分のb段階に、また西関東を中心とした黒尾和久氏らの編年<sup>21)</sup>では12c段階から13段階にそれぞれ併行する。

小屋敷遺跡C区とは泉川を挟んで対岸に位置する柳坪遺跡では、4区礫層から小屋敷遺跡と同様の縄紋地紋の中期終末土器群が曾利式土器群に伴い比較的多数出土し、米田明訓氏はこれらの土器を「関東の加曾利E式土器あるいはそれに酷似したもの」<sup>22)</sup>とした。これと小屋敷遺跡の加曾利E式系土器を比較した場合、柳坪遺跡では渦巻紋や楕円紋、弧線紋による口縁部紋様帯を有し、かつ胴部平行垂下紋の間隔も狭い土器が量的に目立つことから、小屋敷遺跡加曾利E式系資料より古いことが予想される。一方、須玉町郷蔵地遺跡1号住居出土土器(第52図7・8)に近い紋様構成をとるものは、小屋敷遺跡加曾利E式系土器のなかでは明確なものが見当たらない。破片資料にどの程度含まれているのか、いま一つ判然としないが、存在したとしても量的には少ないのではないだろうか。このことが、当加曾利E式系土器群の時間的下限を左右するものなのかについては今後の課題である。

小屋敷遺跡では後期の称名寺式以降の土器群も出土しているが、これらは量的には極めてわずかで、遺構らしいものも確認できない。中期終末を頂点としてそれ以降の土地利用は低調になったと思われる。東隣の柳坪遺跡もこの傾向は同様で、後期以降の遺跡分布の中心は、同じ鳩川・泉川流域でもさらに1～2kmほど上流域の別当遺跡、金生遺跡、姥神遺跡などに移っていくようである。

## 2 おわりに

小屋敷遺跡の加曾利E式系土器群は、曾利式とは系譜を異にする中期終末土器群の変遷を八ヶ岳山麓・北巨摩地域で把握していく上で今後も問題になっていく資料である。中期終末に様式的に崩壊する曾利式にとってかわる土器様式の出現背景が当資料には多分に含まれているのではないだろうか。それだけに、各土器の出土状態がほとんど今日掴めない状態にあるのは残念である。せめておもだった土器の出土位置と、土壌間の切り合い関係だけでも検討できるならば、終末段階曾利式との供伴関係も含めて、加曾利E式系土器群についてももう少し詳細な変遷過程をここで予想できた可能性もある。

現場図面、写真などが見当たらないことについては、今日となっては憶測の域をでないが、必要な図面がそもそも無い（撮影・作図していない）場合と、図面等はあったがその後（他の文書廃棄作業にでも混じって？）紛失した場合の両要因が重なったのだろうか。いずれにしても当調査は、予算的にも時間的にもとくに厳しい条件の圃場整備事業に伴うものであったときき、本格的な埋蔵文化財行政がスタートしたばかりの当町教育委員会には、開発部局との調整も含めて遺跡の内容と調査面積がその調査能力をはるかに超えたものであった。

しかし、縄文時代中期終末そして中世という、当地域においてはとくに類例の少ない貴重な遺跡を記録保存した意味をここに充分報告できないことについては、埋蔵文化財行政を管轄する町教育委員会として重大な責任を負わざるを得ない。発掘調査から整理作業までの過程で、ご助言やご教示をいただいた関係各位に深くお詫び申し上げるとともに、「小屋敷遺跡」を遺してくれた八ヶ岳南麓の先人にも謝罪したいと思う。

11) 山梨県教育委員会1987『山梨県埋蔵文化財センター調査報告第25集 金の尾遺跡』

12) 註6

13) 佐野 隆氏（明野村教育委員会）の指摘による。

14) 高根町教育委員会1996『次郎構遺跡』

15) 山梨県教育委員会1993『山梨県埋蔵文化財センター調査報告第75集 川又坂上遺跡』

16) 韮崎市教育委員会1996『新田遺跡』

17) 稲村晃嗣1990「加曾利E系列の土器群」『調査研究収録』7 横浜市埋蔵文化財センター

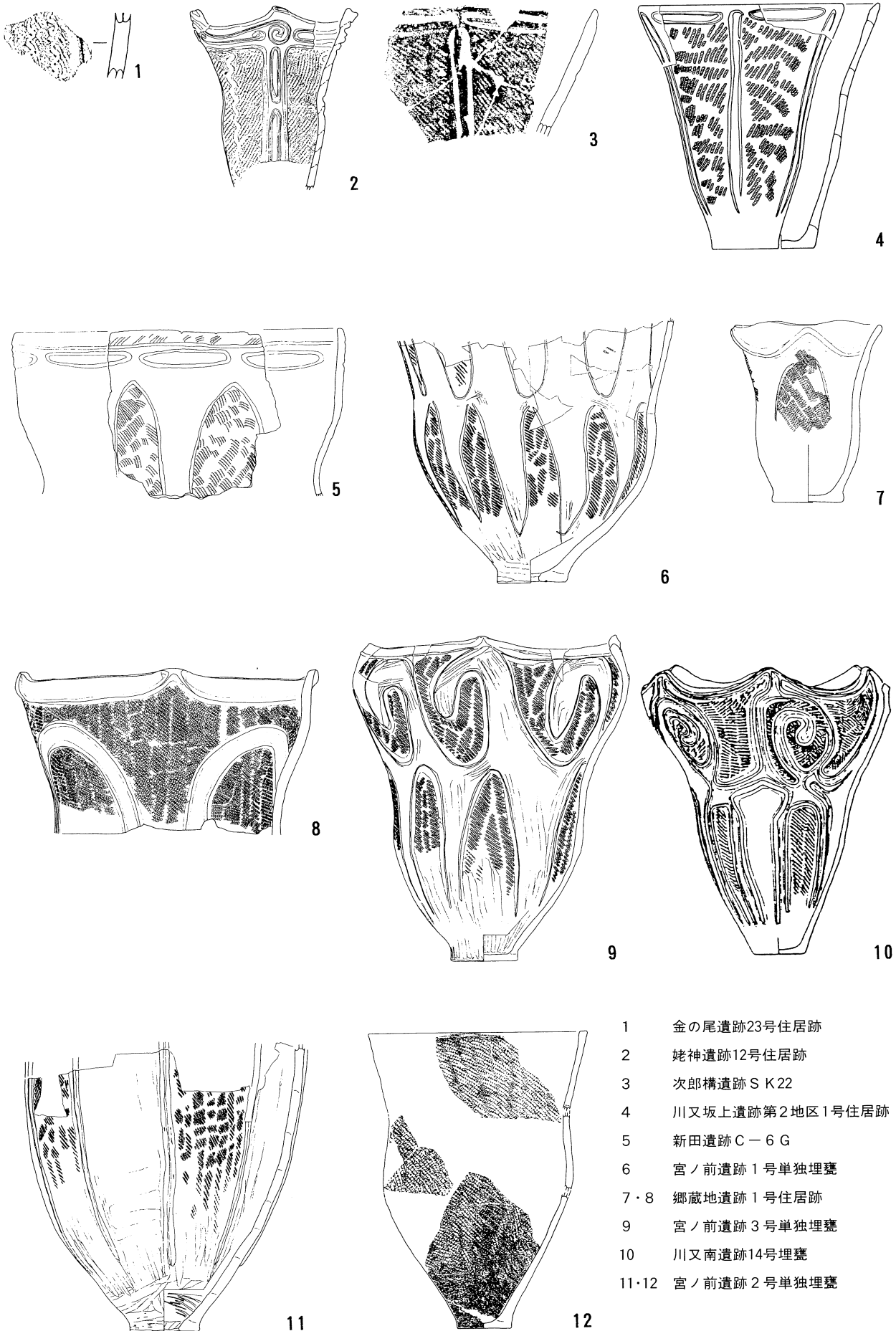
18) 石坂 茂・藤巻幸男・桜岡正信1988「加曾利E式土器に関する一考察」『群馬の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団

19) 須玉町教育委員会1986『川又南遺跡』

20) 鈴木保彦・山本暉久1988「加曾利E式土器様式」『縄文土器大観』2 小学館

21) 黒尾和久・小林謙一・中山真治1995「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平（発表要旨・資料）』縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学会

22) 米田明訓1986「中期後半土器の諸問題」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告第13集 柳坪遺跡』



- 1 金の尾遺跡23号住居跡
- 2 姥神遺跡12号住居跡
- 3 次郎構遺跡 S K 22
- 4 川又坂上遺跡第2地区1号住居跡
- 5 新田遺跡 C - 6 G
- 6 宮ノ前遺跡 1号单独埋甕
- 7・8 郷藏地遺跡 1号住居跡
- 9 宮ノ前遺跡 3号单独埋甕
- 10 川又南遺跡14号埋甕
- 11・12 宮ノ前遺跡 2号单独埋甕

第52図 加曾利E式系周辺資料（縮尺不同）

表5 石器観察表

B区

図番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
1	石鏃	(2.63)	1.30	0.40	(1.2)	黒曜石	有茎凸基
2	打製石斧	12.0	4.6	1.6	125	シルト岩	捺形
3	"	9.2	4.6	1.8	100	砂岩	"
4	"	7.0	4.7	1.4	55	ホルンフェルス	"
5	"	13.2	6.0	1.7	132	砂岩	"
6	"	(11.0)	5.0	1.6	(110)	ホルンフェルス	"
7	"	(9.8)	(4.9)	2.0	(105)	ホルンフェルス	"
8	"	(6.2)	5.5	0.9	(55)	砂岩	"
9	"	(9.2)	(5.4)	1.3	(90)	砂岩	短冊形
10	横刃形石器	(7.4)	(6.2)	1.8	(70)	ホルンフェルス	
11	"	9.5	4.6	1.1	55	ホルンフェルス	
12	"	9.1	4.1	1.2	68	真岩	
13	"	8.7	4.2	1.5	75	ホルンフェルス	
14	"	10.8	4.0	0.9	65	ホルンフェルス	

C区

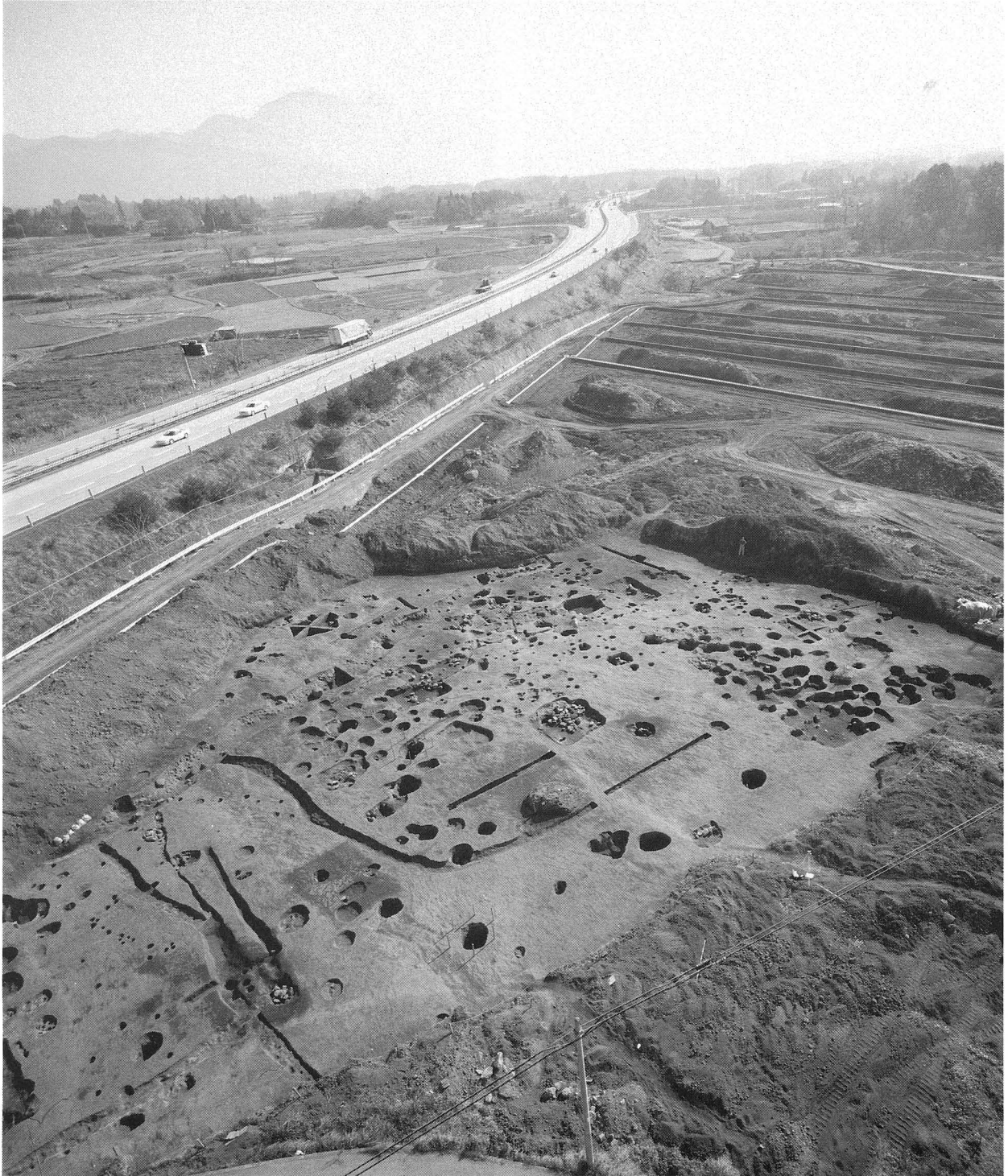
1	石鏃	2.65	1.58	0.38	1.0	黒曜石	無茎凹基
2	"	1.83	1.62	0.32	0.5	黒曜石	"
3	石匙	4.96	6.31	1.25	30.8	ホルンフェルス	斜型
4	スクレイパー	(4.68)	(2.67)	(1.25)	(12.5)	真岩	
5	石匙	(4.11)	(4.38)	(1.80)	(28.8)	チャート(白いスジが目立つ)	
6	"	4.96	5.49	1.15	20	チャート	横型
7	磨製石斧	(5.52)	(3.09)	(1.15)	(30.2)	凝灰岩	定角式
8	"(小型)	(3.20)	(1.70)	(0.85)	(6.4)	真岩	"
9	スクレイパー	4.24	6.58	1.60	32	黒曜石	不定形
10	小剥離のある剥片	2.30	1.41	0.50	0.8	黒曜石	
11	ピエス・エスキーユ	3.26	3.90	1.32	14	黒曜石	
12	石核	2.66	2.57	1.45	10.1	黒曜石	
13	剥片	4.19	4.74	1.12	15.1	安山岩	
14	"	2.45	2.73	1.35	5.5	黒曜石	
15	"	2.10	1.48	0.53	0.8	黒曜石	
16	"	1.61	1.27	0.60	0.8	黒曜石	
17	"	8.75	12.52	3.15	321	安山岩	
18	"	7.62	3.88	1.13	30	ホルンフェルス	19と接合
19	"	7.98	4.07	1.19	37	ホルンフェルス	18と接合
20	打製石斧	12.6	6.5	2.3	235	砂岩	捺型
21	"	10.9	5.1	1.4	120	ホルンフェルス	"
22	"	(9.8)	5.2	2.3	(140)	真岩	短冊型
23	"	(8.5)	4.2	1.3	(55)	真岩	捺型
24	"	(8.3)	4.9	1.2	(65)	砂岩	捺型
25	"	(10.2)	4.4	1.2	(66)	ホルンフェルス	"
26	"	(9.6)	5.2	1.2	(55)	真岩	"
27	"	(10.5)	6.0	1.1	(85)	ホルンフェルス	"
28	"	(8.3)	5.2	1.2	(50)	砂岩	"
29	"	8.11	6.35	3.08	160	安山岩	"
30	横刃形石器	4.25	8.43	1.40	55	粘板岩	表裏に磨痕あり
31	"	5.4	5.5	1.7	70	硬質真岩	
32	"	(9.4)	8.1	1.6	(99)	ホルンフェルス	
33	磨石	5.5	4.4	1.7	70	安山岩	磨面2
34	"	4.94	4.15	3.27	72	安山岩	磨面2
35	"	7.5	3.6	2.2	70	安山岩	磨面2
36	"	7.3	4.5	1.4	60	安山岩	磨面2
37	"	10.6	4.53	3.6	212	安山岩	磨面4
38	"	(8.72)	6.15	4.8	(240)	輝石安山岩	磨面2
39	"	11.48	5.71	5.43	445	輝石安山岩	磨面3
40	"	12.3	5.8	4.3	420	安山岩	磨面2 側面に敲打痕
41	"	8.55	6.9	5.79	383	安山岩	磨面1
42	"	9.5	7.0	4.8	360	輝石安山岩	磨面4
43	"	8.0	7.6	5.6	455	片麻岩	磨面2
44	"	(9.5)	10.0	4.4	(565)	安山岩	磨面2
45	"	9.9	(5.0)	4.4	(310)	片麻岩	磨面2
46	"	(8.3)	7.0	3.6	(295)	安山岩	磨面4
47	"	(2.41)	(4.72)	(4.1)	(51)	輝石安山岩	磨面(1)
48	凹石	11.85	7.07	7.92	781	輝石安山岩	凹3面各2、磨面4
49	"	10.56	7.35	4.02	385	輝石安山岩	凹表2
50	"	11.7	7.4	3.6	360	輝石安山岩	凹表2、裏2
51	"	11.3	9.3	7.5	740	輝石安山岩	凹表3、磨面3
52	"	10.2	8.8	4.2	430	輝石安山岩	凹表1、裏1
53	"	8.6	7.4	5.0	325	輝石安山岩	凹表1、裏1
54	"	(9.8)	5.6	3.7	(240)	輝石安山岩	凹表(2)、裏(2)
55	棒状礫	13.7	3.6	3.4	250	粘板岩	

表6 小屋敷遺跡石器組成表

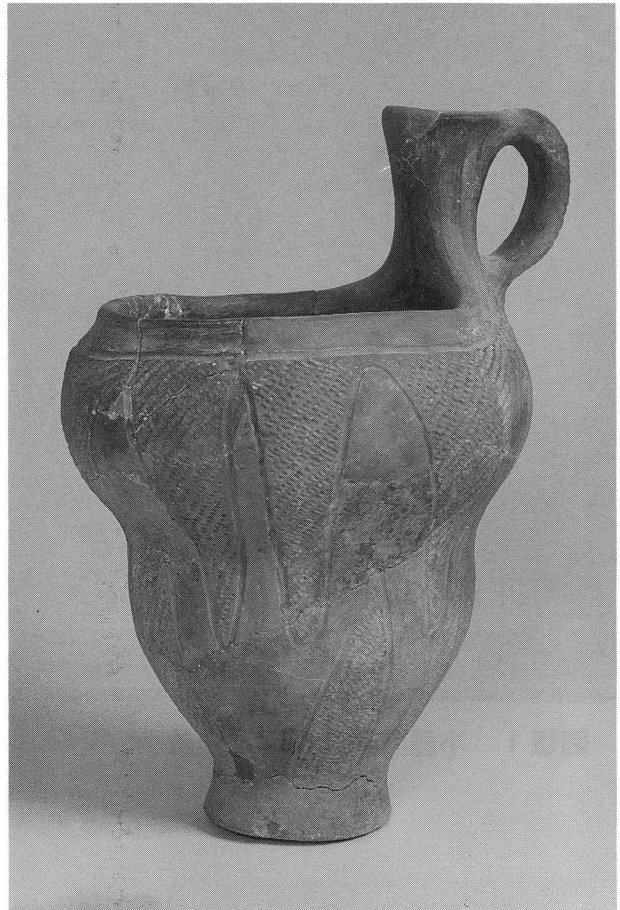
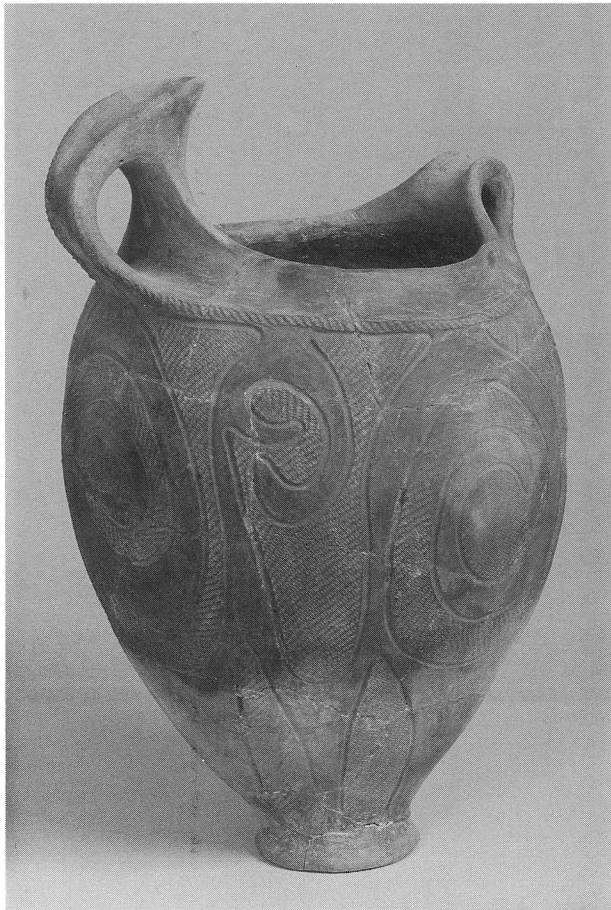
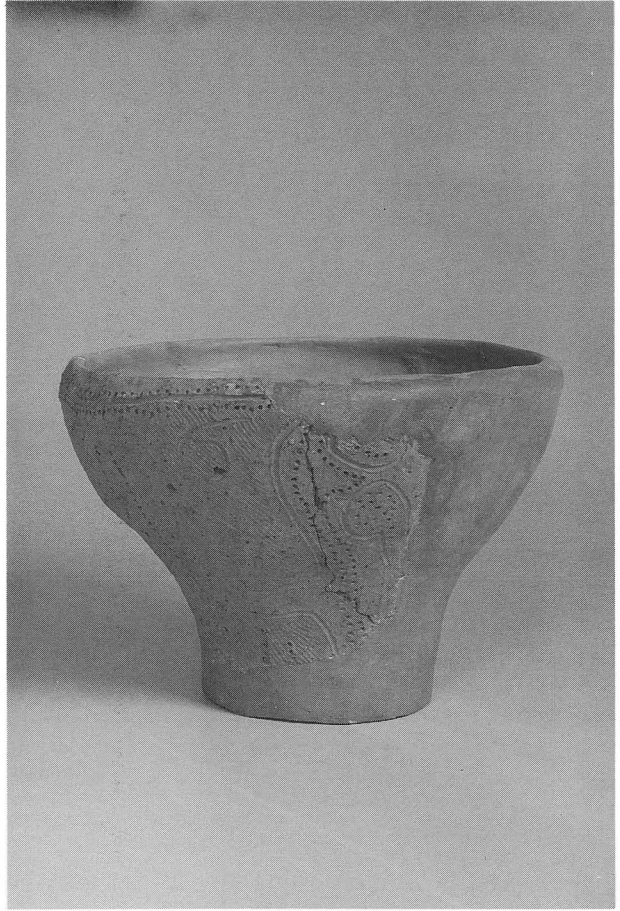
	石鏃	打斧	横刃	石匙	スク	磨斧	磨石	凹石	ピエス	小剥離	石核	剥片	礫	合計
B区	7.2	8	5											14
	57.1	57.1	35.7											100
C区	2	10	3	3	2	2	15	7	1	1	1	7	1	55
	3.6	18.2	5.5	5.5	3.6	3.6	27.3	12.8	1.8	1.8	1.8	12.7	1.8	100
合計	3	18	8	3	2	2	15	7	1	1	1	7	1	69
	4.3	26.1	11.6	4.3	2.9	2.9	21.7	10.1	1.5	1.5	1.5	10.1	1.5	100

上段：出土点数 下段：%数値

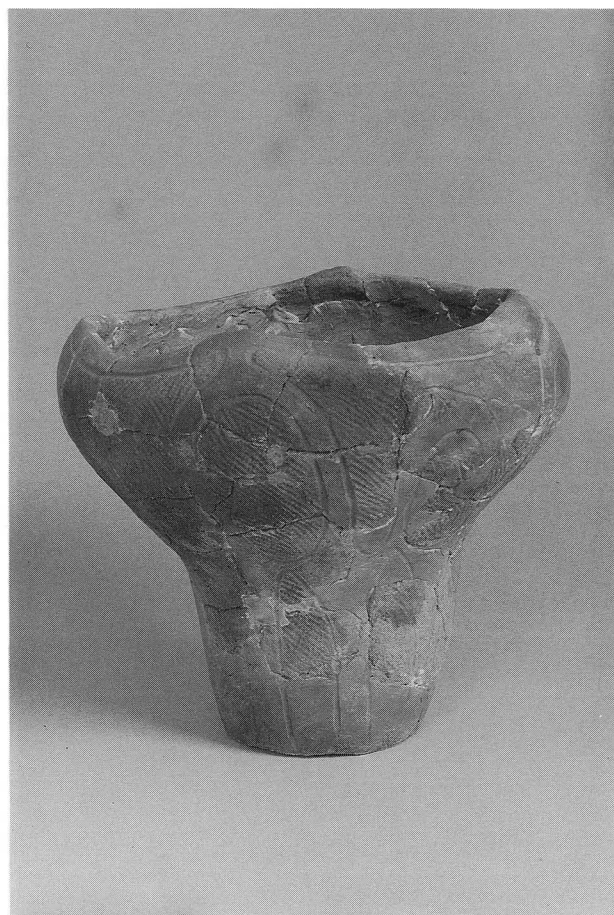
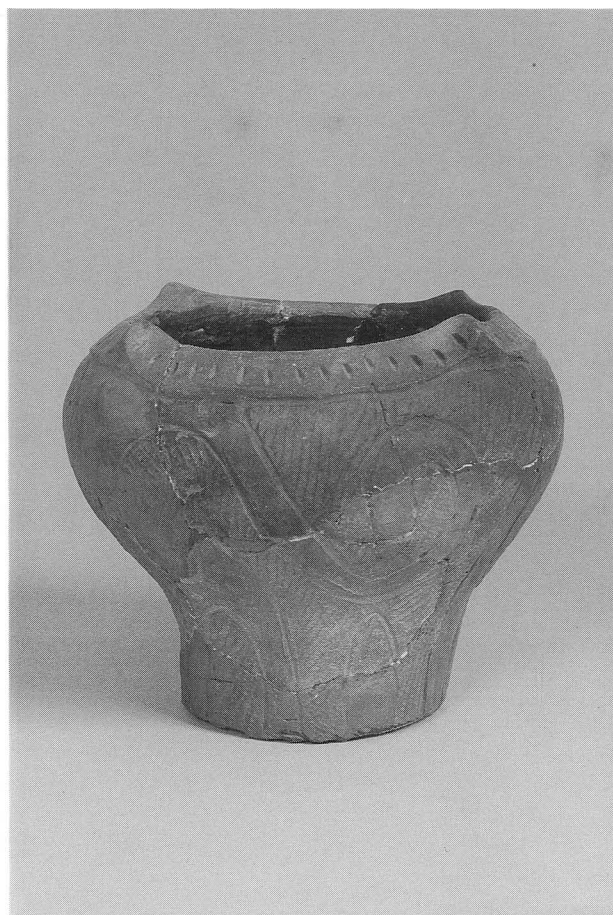
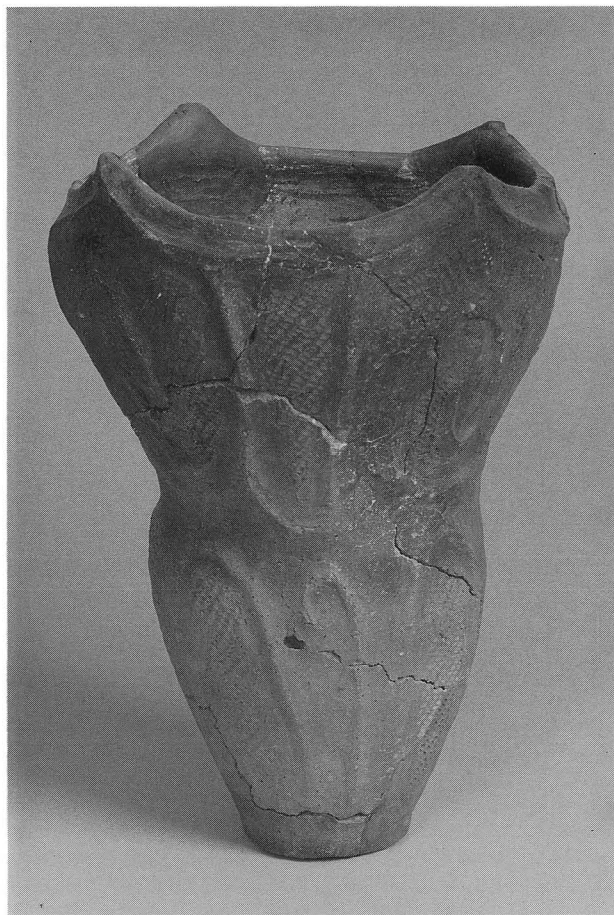




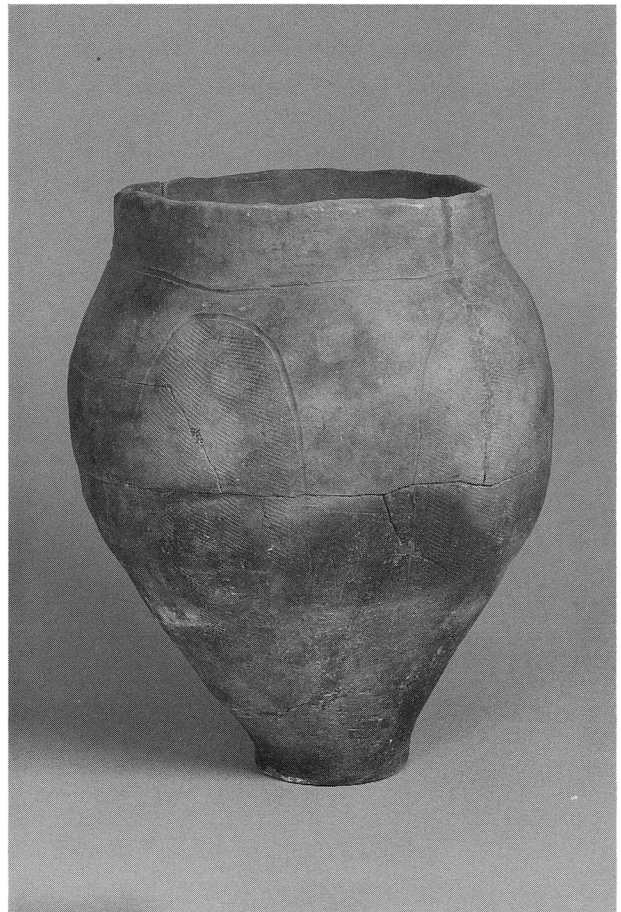
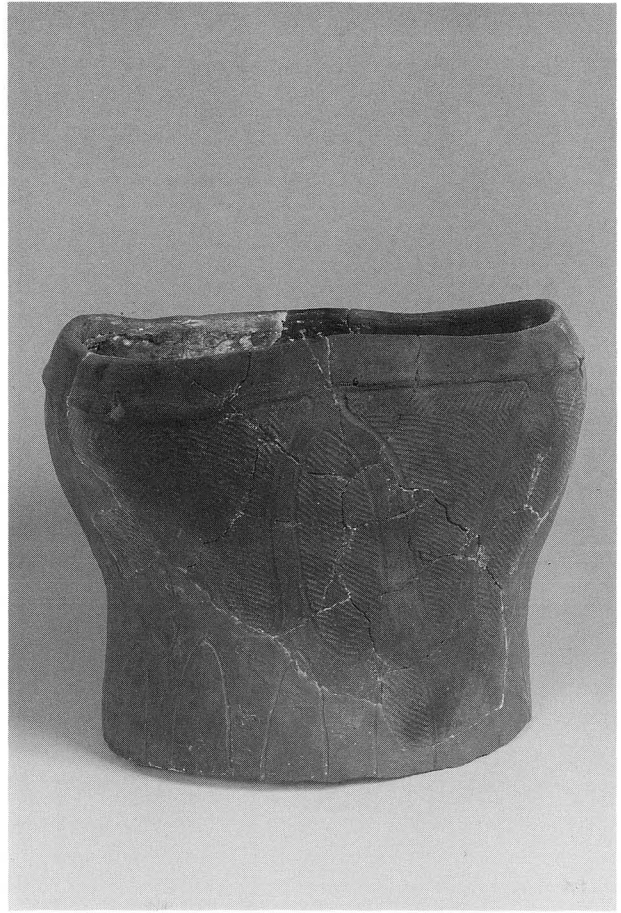
图版1 小屋敷遺跡C区東全景



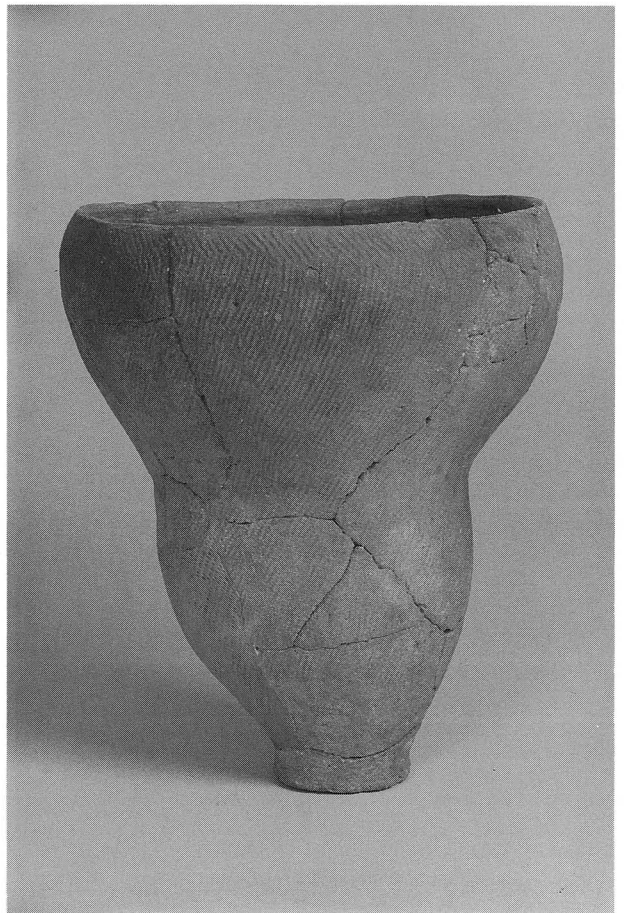
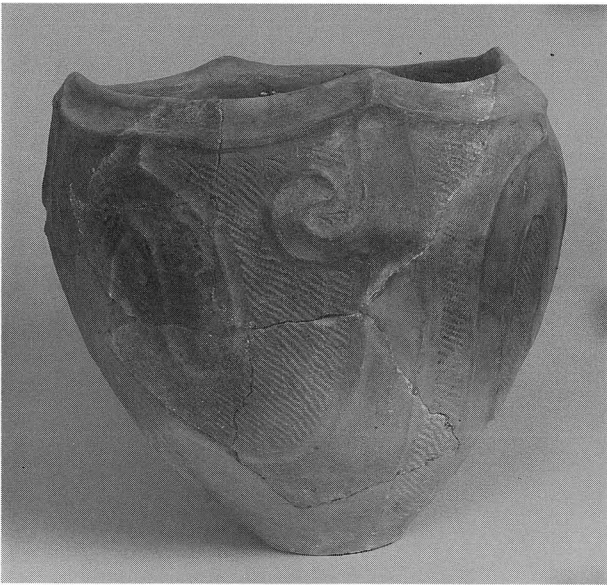
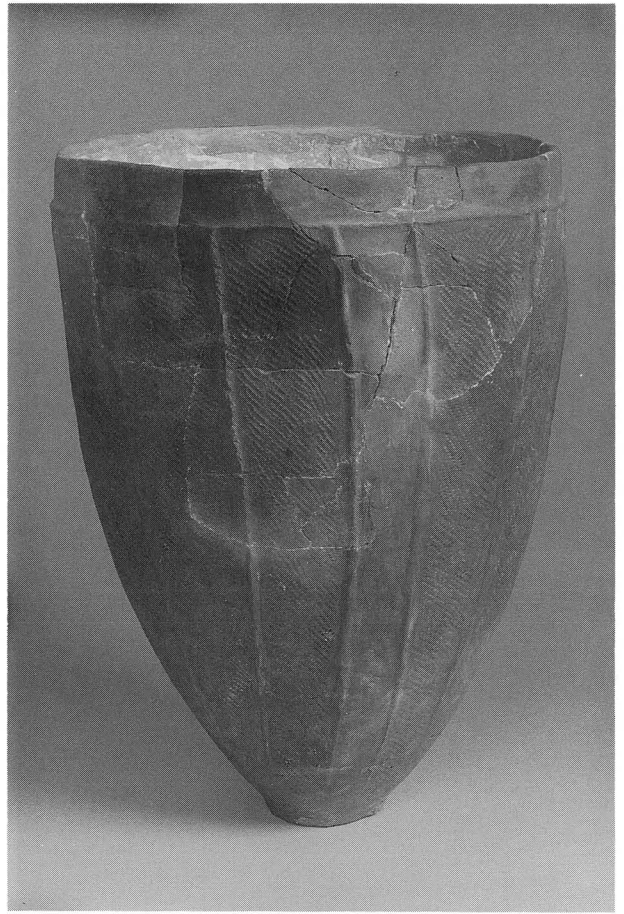
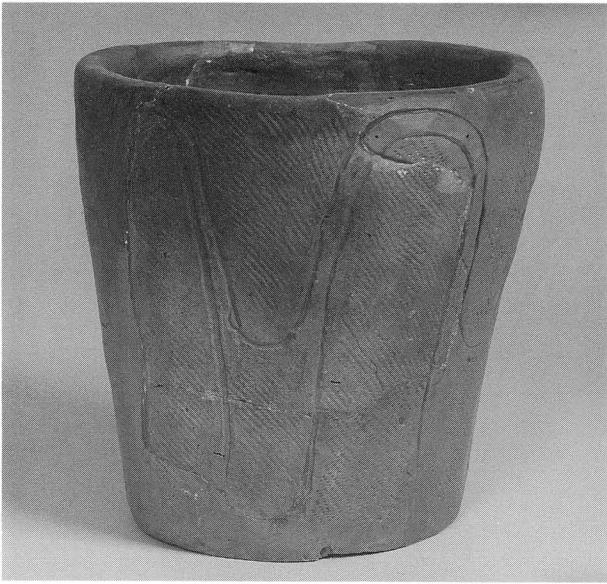
图版2 C区東出土土器



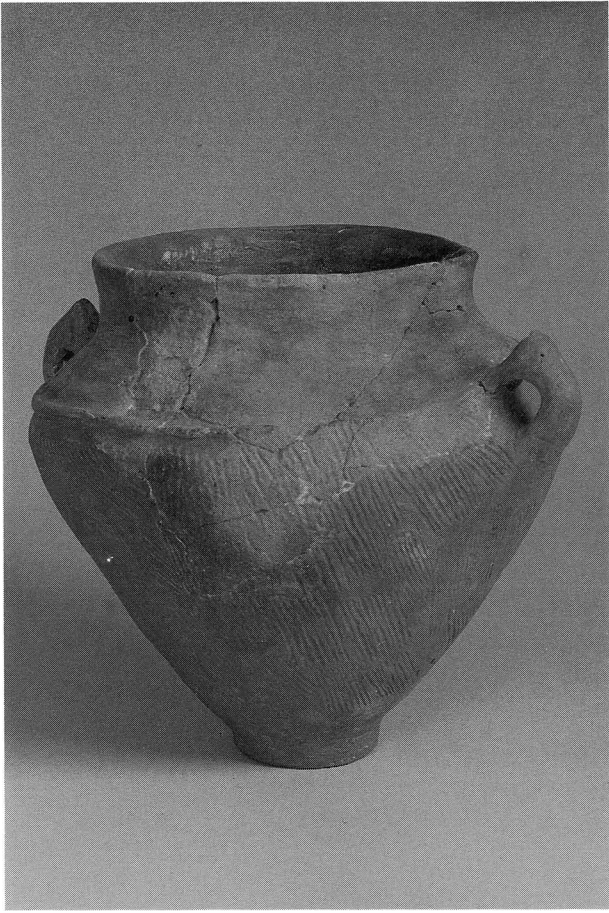
图版3 C区東出土土器



图版4 C区東出土土器

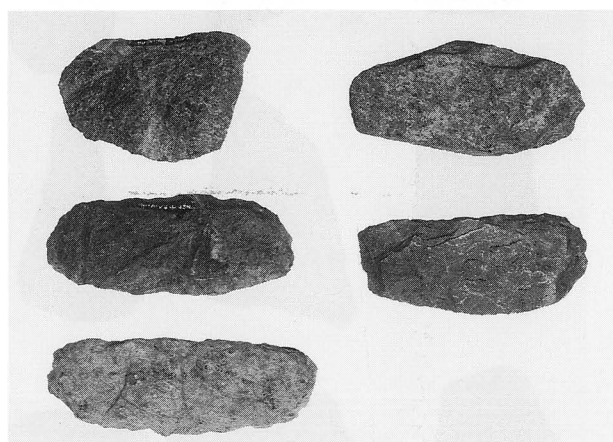
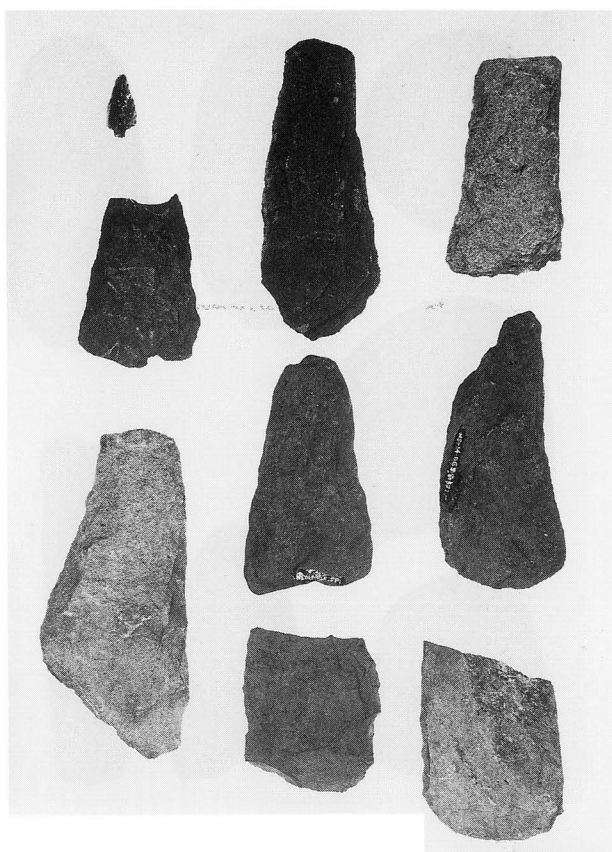


图版5 C区東出土土器

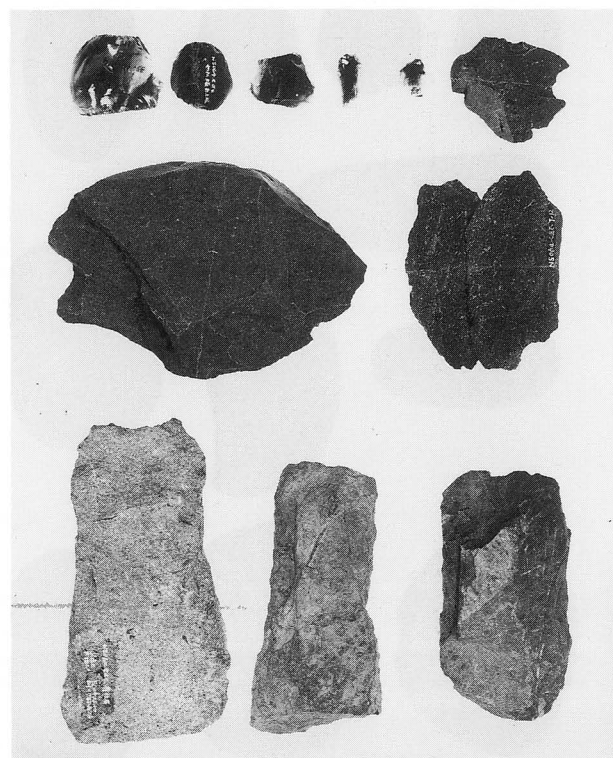
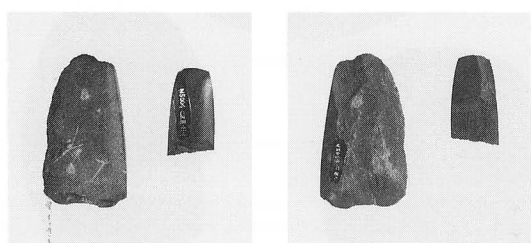
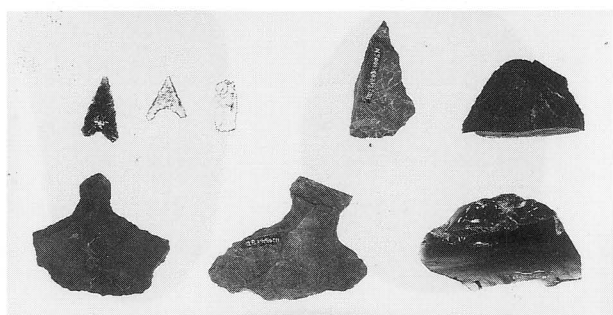


図版6 C区東出土土器

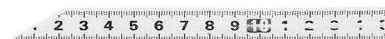
図版7 B区出土土器（上の1点）

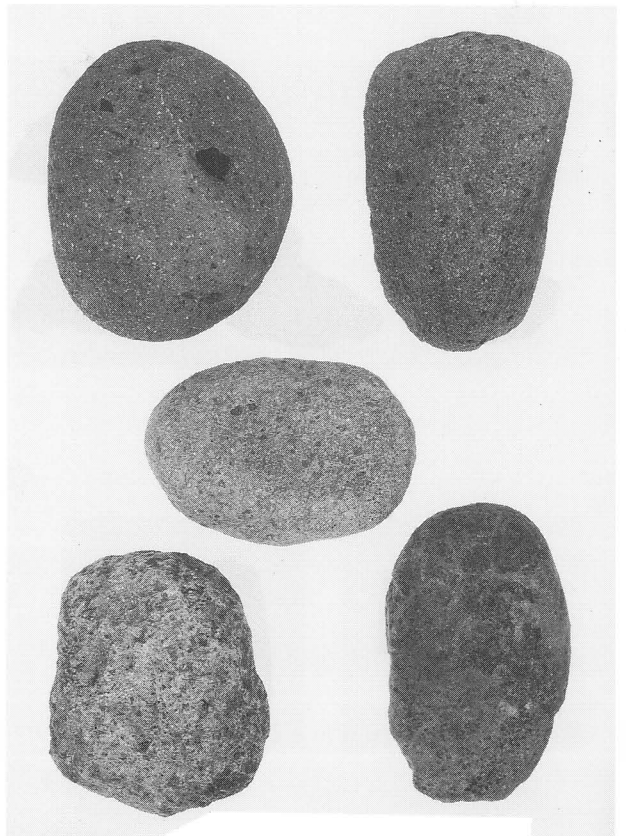
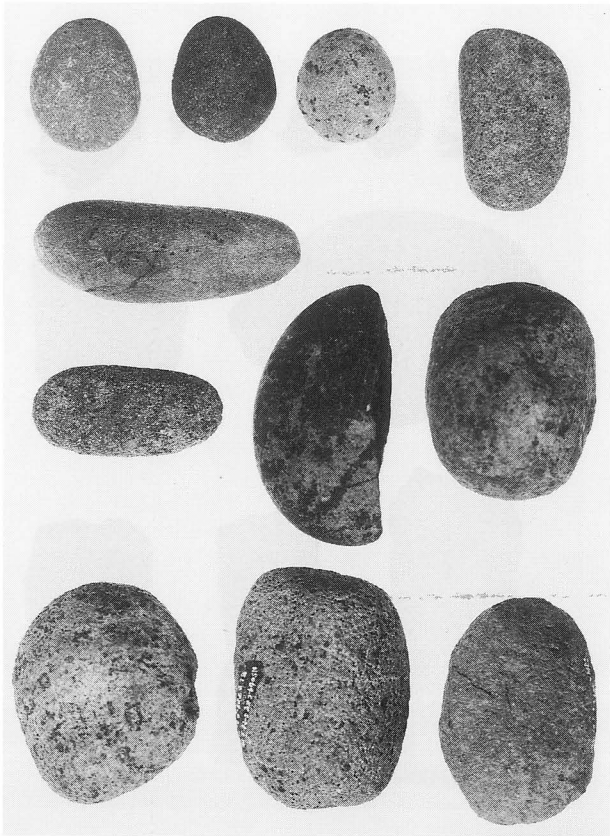
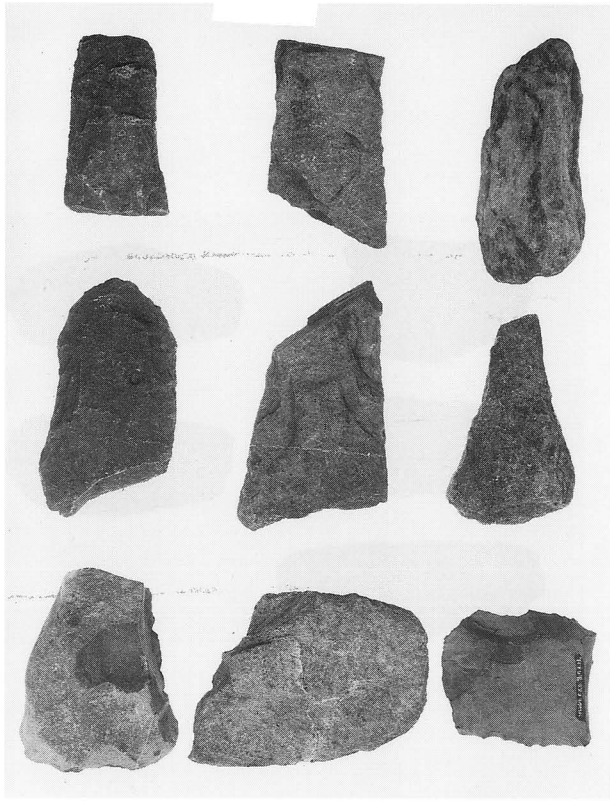


图版 8 B区出土石器

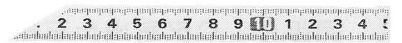


图版 9 C区東出土石器





图版10 C区東出土石器





## 報告書概要

書名	おやしき 小屋敷遺跡		
シリーズ	長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書 第13集		
著者名	小宮山 隆		
編集・発行者	長坂町教育委員会		
住所・電話	山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2575-19 TEL 0551-32-2111		
印刷所	峡北印刷株式会社		
印刷日・発行日	1997年3月20日・1997年3月31日		
小屋敷遺跡	25000分の1地図名・位置・標高	谷戸	北緯 35°50'10" 東経138°232'10" 720m
概要	主な時代	縄文時代中期後半・平安時代・中世	
	主な遺構	縄文時代中期初頭住居、同中期終末土壇群、平安～中世集落	
	調査期間	1991年6月～1991年10月	
	所在地	山梨県北巨摩郡長坂町大八田字小屋敷ほか	

長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書 第13集

### 小屋敷遺跡

1997年3月20日 印刷

1997年3月31日 発行

編集・発行 長坂町教育委員会  
山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2575-19  
TEL 0551-32-2111

印刷 峡北印刷株式会社  
山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2313  
TEL 0551-32-3245

